庄内川の老魚のなげき

作・宮田 照
え・すずきけいこ

①

わしは庄内川に
古くから住む
鯉の権兵衛じゃ

近頃の人間は
少しましになって
きたかな？
川が少しきれいに
なったもんな
じゃが……
まだまだ
安心できんじゃて

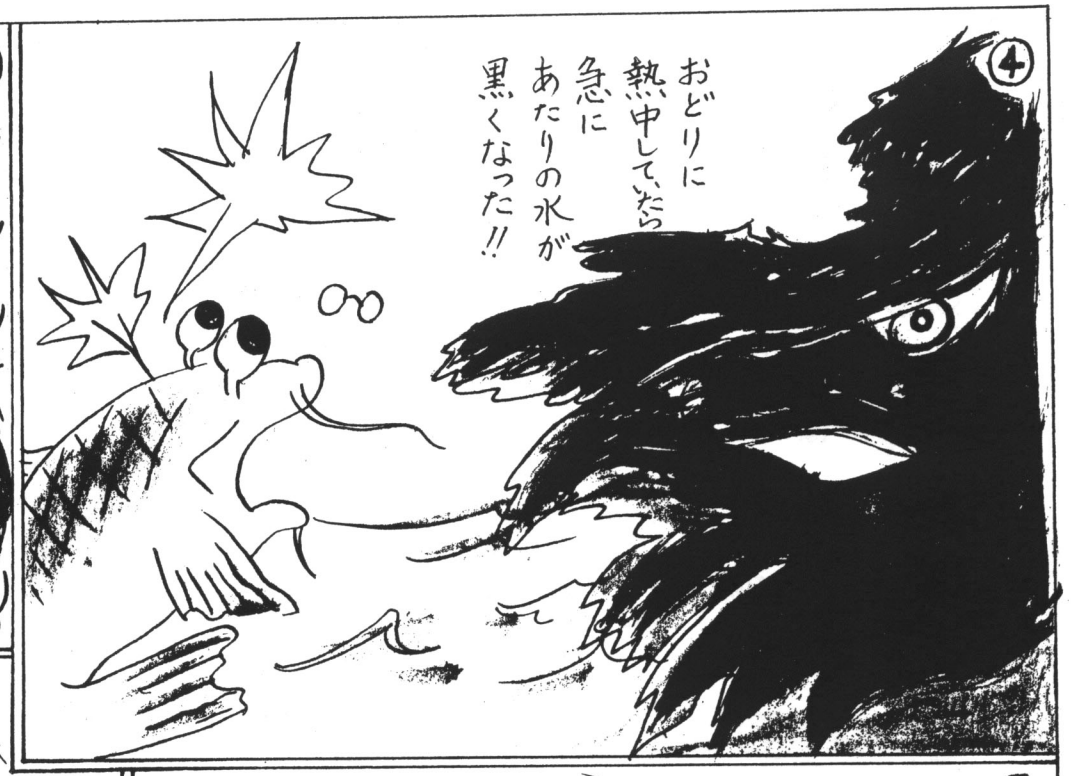
②

ステキー

わしの
若い頃はそれはそれは
きれいな川じゃった
おめかしした
イタセンペラが
いつも自慢していたものよ

③

夏の夜など
月の光で
一晩中
楽しくおどり
明かしたものさ


④
おどりに
熱中してたら
急に
あたりの水が
黒くなった!!

⑤
悲鳴をあげながら
仲間達が
つぎつぎ
死んでいったんじゃ……

⑥
それからというもの
黒い悪魔の水は
わしらの住家だった
庄内川に矢田川に
流され続けられた
そして
仲間友達と別れ別れに
なってしまったよ

⑦
住む所のないわしらは
水たまりや
少しのわき水で
命をながらえて
きたんだよ

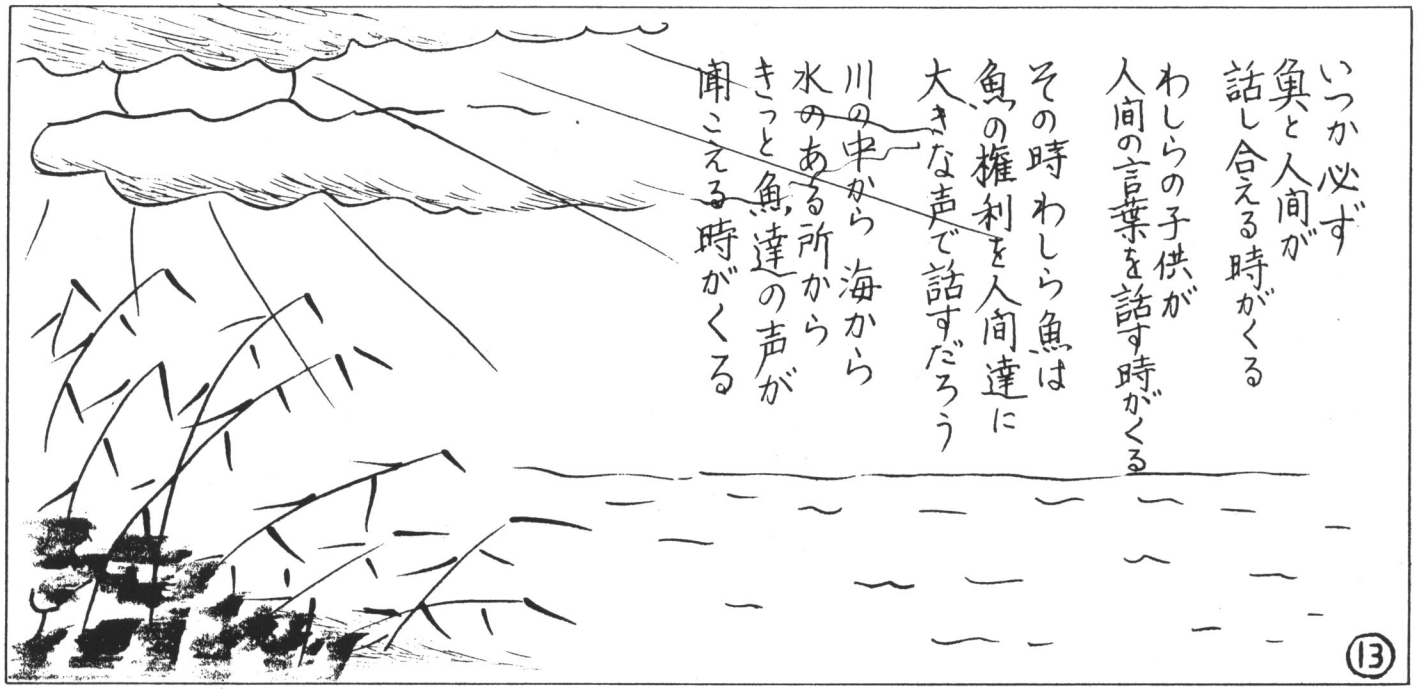
⑧
ある日
悪魔の水を流している
のは人間だと
知った時は
くやしかったね
わしらは
戦うすべを
知らんからなあ……

⑨
長い月日が過ぎ
それでもわしらは
ほそぼそと
生きてきたんだ
ある日
上流で多雨が降った
らしく
わしらは水に
流されてしまった

⑩
命からがら流れの少い所に
たどりついた時
なつかしい友に
出逢った
ヨカッタ、ヨカッタ

⑪
一晩中悪魔の水を流す
人間について話し合ったんだ
わしらの事を
理解させるのだ!!
どうにも
ならねえよー
酒

⑫
人間の性質
そこで
わしらは子供達に
勉強させることにした
?



絵を付けた後で……

私も子供の頃からこの土地で育ち、庄内川や矢田川には愛着があります。早二十数年になるかしら、川がきれいだった頃には友達や弟妹などと良く泳ぎに、魚つりに出かけたものです。それが魚も住めない位、汚くなったと聞かされた時は淋しく思ったものです。最近になって魚が少し住めるようになり、魚つり大会を開催すると聞き、一家で出てみたのですが、食べられないと聞き、ここはほんとうに川なのかと考えさせられました。一日も早く魚達が安心して住める川が戻ってくるよう願っています。

庄内川の魚類と鮎追跡調査

庄内川の水生生物

建設省庄内川工事事務所の出版物より

魚類各種の概要

庄内川に生息する魚類の各種について主としてその分布と，それぞれの特徴を理解するうえに必要な若干の説明を加えることにする。

コノシロ科

• コノシロ

本種は伊勢湾沿岸に広く分布し個体数も多い沿岸性の海魚であるが，夏季は外海で過ごし10月～5月頃まで内湾，河口などの汽水域へ侵入する。大きいものをコノシロ，小さいものをコハダまたはツナシなどと呼んでいる。特に音に対して敏感なため，舟ばたや海面で竹をたたいておい込む狩り込み漁法でも捕獲される。体は扁平で背ビレの最後の軟縦が大きくのびていて，他の種類と容易に区別できる。かつては，河口付近でかなり多く獲れたが，現在では極めて少ない。

サ ケ 科

• ニジマス

支流の肥田川で採捕されており，この地方ではアスという方言で呼ばれている。天然産のものではなく，おそらく養殖しているものが河川に流れ出たものであろう。本種は北米太平洋岸の河川の原産であるが，比較的高温に耐え現在日本各地の湖沼，河川，養殖池に広く放流されている。

ア ユ 科

• ア　ユ

今回の調査では，本流の多治見地区より上流釜戸地区までで採捕され，生息が確認されたが，これらは恐らく放流されたもので，河口から名古屋市内の汚濁の激しい水域を溯上してきたものとは考えられない。しかし，最近では出水時には水分橋・庄内川橋などでも時々見られることがある。この水系で採捕されたものは，長良川や揖斐川産のもののように大型になるまで成長しているものは少ない。

コ イ 科

• モ ツ ゴ

本流では水分橋より下流枇杷島橋の間ではフナについで多くみられる。また肥田川・定林寺川・大原川でも生息が認められている（岐阜県生物教育 Vol. XII）。本種は地方によってイシモロコクチボソ，ホソ，モロコなどという方言で呼ばれている。

• カマツカ

本種は生息範囲が広く，上流部の瑞浪市から下流部，枇杷島橋付近まで広く分布している。釣人の間ではスナモグリ，スナクジ，ドウゼンなどという方言で呼ばれている。これは頭部を砂につきさし付近の砂を吹きあげ，その中にいる小型の底生動物を捕食する。本流のほか日吉川，肥田川，大原川などの支流においても生息が認められている。（岐阜県生物教育Vol. XII）

• ニ ゴ イ

本種も河川の上流部から河口付近まで分布する広水域性の種類である。従来は庄内川本流でも名四国道大橋付近までは生息していたようであるが，今回の調査では確認することができなかった。しかし，支流の肥田川で生息が認められている。（岐阜県生物教育 Vol. XII）方言として，カワゴイ，ミゴイなどと呼ばれている。

• タモロコ

本流では釜戸・瑞浪地区での生息記録があるほか，今回の調査では吉根橋で採捕されている。支流でも妻木川・大原川などで観察された。一般にモロコと呼んでいる。

• スゴモロコ

この種は本来琵琶湖の特産種であるが，おそらくアユ苗と共に移入されたものであろう。一般の河川では，上流部から中流部に至るまでかなり広い範囲にわたって分布するものであるが，庄内川水系では支流の大原川で観察された記録があるのみである。（岐阜県生物教育Vol. XII）方言としてはムギツキ，ヤナギバエなどと呼ばれる。

• ウ グ イ

一般の河川では上流部から河口部の汽水域にわたって広く分布し，個体数も多いのが普通である。過去においては，庄内川でも産卵期の5月頃には群をなして溯上するのが水分橋・庄内橋付近でよくみうけられた。近年水質の悪化により日吉川・土岐川等上流部およびその支流においてのみ生息が認められている。丹羽博士が「長良川の生物（1957）」において述べているように，上・中流部に住むものと，下流や内湾などに住み産卵期のみに渓流域に溯上する二つのタイプがあるように思える。

• アブラハヤ

アブラハヤは河川の中流上部より上流からさらに源流に近い付近まで分布する。庄内川水系では従来生息が明らかにされた記録はみられなかったが，1973年の調査において夏季・冬季ともに源流近くの水域でかなりの個体数が認められた。

• オイカワ

本種は信濃川以西，中部地方の殆んどの河川において，中流から上流下部にかけて広く分布し，夏季には多くの場所で優占種として出現する。釣魚としてもよく知られている。本水系では枇杷島橋より上流の本・支流に広く分布していることが認められたほか，八田川・新木津用水，青木川，地蔵川の上流部においてもその生息が認められた。オスは生殖期には美しい婚姻色があらわれるが，メスは常に白銀色のうろこをしているため，白ハエともいわれる。方言としてはババサ，ババカイ，シロハヨなどの呼び名がある。

・カワムツ

分布の上限は，ほぼオイカワと同じであるが，下限はオイカワよりもかなり上部である。本流よりも支流に多くみられる。特に目立つことは，オイカワの生息していない川巾1m前後の谷川にまで生息しているが，河口部まで下らないのがこの種類の特徴である。生殖期にはオイカワと同様，オスには鮮かな婚姻色があらわれる。方言としてアカムツ，ヤマバエ，ムツバエなどと呼ばれる。

・フ　ナ

この水系ではギンブナとゲンゴロウブナの2亜種が生息し，本流での分布は上流部の下位または中流上部が限界である。松川橋より上流ではギンブナが多く，それより下流ではゲンゴロウブナが比較的多い。かつては河口部でもかなり多くの漁獲がみられたが水質の悪化により，一時著しく減少した。しかし，最近では水質の回復にともない増加の傾向を示している。上流部の支流日吉川，肥田川，大原川などでも生息が認められており，オイカワと同様，この水系の優占的な種である。

・コ　イ

分布限界はフナと同様であり，上限は本流では武並付近であり，支流での肥田川・妻木川・大原川などにおいても生息が認められているが，個体数は少ない。恐らく養殖池から逃げ出したものであろう。

ドジョウ科

・ドジョウ

本流の上流から下流にわたって広く分布する種類であるが，底質が泥または砂泥のところに多い。本流では釜戸が上限のようであり支流では日吉川，妻木川，大原川，矢田川などに生息が認められている。また，新木津用水，五条川，青木川等においても生息していることが認められた。

・シマドジョウ

本種もドジョウと同様，上流から下流に至るまで広く分布するが，個体数としてはそれ程多くはない。特に砂底を好み，食用魚としてはあまり重要視されない。産卵期は6月，本流では釜戸・瑞浪・多治見等で生息が認められており，支流では日吉川，大原川等にも生息している。方言には，カンナメドジョウ，ゴマドジョウ等という呼び名がある。

ナマズ科

・ナマズ

この種の分布限界は，一般の河川では中流上部までとされているが，庄内川の場合上流部の釜戸瑞浪，多治見地区でも採捕されているほか，支流の大原川においても生息が認められている。最近名古屋市内の水域においても除々に増加の傾向がみられる。カワボウズ・ボウズなどの方言名がある。

ギギ科

・ギ　ギ

分布の上限は，ナマズよりもやや上流で，下限もまたナマズよりかなり上流である。庄内川水系では土岐川の武並・釜戸で採捕されており，地方によっては，クロイカ，クルザス，ザス，ハチナマズ，コウバチなどの方言名がある。

・アカザ

本来は中流部より上流部までのかなり広い範囲に分布している種であるが，水質の汚濁にともない近年姿を消した水域が多い。庄内川水系でも支流の定林寺川で採集された記録が残っている程度である。

ウナギ科

・ウナギ

水源付近から河口に至るまで広い範囲にわたって分布する魚類で，10月上旬～5月下旬の間に群をなして溯上する。淡水で7～12年ぐらい経過したのちアユと同時期に川を下ってゆくが不明の点が多い。庄内川水系では，瑞浪・多治見および支流の日吉川，肥田川，大原川において生息している記録があるが採捕による調査では，これを確認することはできなかった。しかし，河口から一色大橋付近では過去にかなり多くの漁獲量のあったことは聞きとりにより明らかである。

メダカ科

・メダカ

メダカは一般には河川の中・下流部の流れのゆるやかな水域，または田圃の小みぞなどにみられる種である。庄内川では河口に近い一色公園付近および新庄内川橋付近において採捕した。この他，汚濁の大きい堀川大瀬子橋の岸寄りで数十匹が群遊しているのを認めた。

ボラ科

・ボ　ラ

本種は海水魚であるが，稚魚期から未成魚期にかけて川を溯上する習性をもっている。春3月頃には2㎝位に成長し，6月頃にはデンボコと呼ばれ10㎝程度に成長する。初秋から秋の彼岸頃には当歳のイナとなる。河口からの溯上距離は60～70㎞におよぶことがある。庄内川では，河口部の魚類のうちではマハゼと共に優占的な種類である。

タイワンドジョウ科

・カムルチー

通称雷魚と呼ばれている。1920年頃日本へは移入され各地の平野部の河川や湖沼で繁殖している。今回の調査では，水分橋，枇杷島橋でかなり大型のものが採捕されたほか，土岐川の多治見，支流の日吉川，肥田川，大原川などで採捕された記録がある。庄内川水系でも，中・下流部に広く分布し河口近くではかなり繁殖している様子がみられる。肉食で有用魚を食害するのでこの繁殖は好ましくない。味は美味であるが生食すると寄生虫（顎口虫）の危険がある。

ヒイラギ科

・ヒイラギ

本来は沿岸性の海水魚で内湾に多い種であるが，河口付近へも侵入する。一名ゼンメとも呼ばれている。汽水域をかなり上まで溯上する。鰭に刺があってヒイラギの葉に似ていることからこの和名がつけられたようである。

スズキ科

・スズキ

この種もボラ(イナ)，マハゼなどと共に河川をさかのぼる習性をもつ海水魚で，その溯上はボラやハゼに比べてさらに遠くまでさかのぼるものとして知られている。令の若いものをセイゴといい成魚をスズキと呼んでいる。庄内川では，かつては竜泉寺付近まで溯上していた記録がある。今回の調査では，水質汚濁の影響からか河口と枇杷島橋において採捕できた程度である。 方言では，セイゴ，マタカ（やや大きいもの）などと呼ばれている。

カワアナゴ科

・ドンコ

一般には河川の中流に分布する種であるが，本水系では大原川において生息の記録がある。煮付けなどにすると美味であるが生産が少ないのであまり重要視されない。

ハゼ科

・ヨシノボリ

この種は日本のほぼ全土にわたり広く，河川，湖沼に生息する普通の小型底生魚である。今回の調査でも本流の瑞浪・土岐・多治見において採捕されたほか，支流の日吉川，肥田川，妻木川，大原川などに広く生息している記録があり，この水系での底生魚としては多い方である。ザッコ，チチコ，チリンコなどの方言名がある。

・カワヨシノボリ

中部地方以西の西南日本に分布し，河川の上・中流部に広く生息する。

ヨシノボリによく似ているが成魚では胸鰭の鰭条数が少ないこと，産着卵の卵径が著しく大きい点などで区別されている。この種をヨシノボリ属から分離するかどうかについては専門家の間にもいろいろ意見がある。

筆者による直接の調査では確認できなかったが生物教育 Vol. XII （岐阜県生物研究会1967年）に記録されているのでここに引用した。

・マハゼ

主として感潮帯に生息する種類であるが，淡水水域にまでも登ってくることがあり，この習性は海水魚のスズキやボラについで遠くまでさかのぼる習性をもっている。庄内川でもかつては，矢田川の合流点付近まで溯上していた記録があるが，水質の悪化により一時，河口のハゼは絶滅したといわれていた。しかし最近ではわずかづつ増加の傾向を示している。今回の調査でも河口，一色大橋，枇杷島橋で採捕された。

コチ科

・コ　チ

海水魚であるが汽水域にも生息し，砂底に住む頬部左右に2棘を有し，強く刺す。かつては，河口付近で多く漁獲されたといわれているが，今日では水質汚濁の影響であろうが，激減し個体数も極めて少ない。

カジカ科

・カジカ

カジカは，イワナ，アマゴ，アブラハヤなどと共に，河川の上流部に生息する種類で源流近くにまで分布する。水の澄んだ瀬の礫底に多くみられる。分布の下限は，一般の河川では中流部までである。今回の調査では，瑞浪市柳瀬橋において採捕された。丹羽博士は，「長良川の生物(1954)」において，上流に生息するものはその卵が大粒であり産卵期も遅いが，中流性のものは，その卵は小粒で産卵期も上流のものに比べると，かなり早く，習性に違いのあることを示唆している。カブ，ザッコ，ゼビンなどの方言名がある。

庄内川における主要魚類の分布(1973～1974年)

庄内川に生息する主な魚類が，源流から河口に至る間にどのように分布しているかを本流について，1973年～1974年の間に直接採捕又は観察により調査した結果を示すと表－4のようになる。

表－4 庄内川における魚類の分布 (1973・74年)

種名		上流部			中流部		下流部			
		瑞浪	土岐	多治見	志段味橋	吉根橋	新庄内川橋	枇杷島橋	一色大橋	河口
アユ科										
Plecoglossus altivelis	アユ	○	○							
コイ科										
Pseudorasbora parva	モツゴ					○	○	○	○	
Pseudogobio esocinus	カマツカ	○	○	○	○	○	○	○		
Gnathopogon elongatus elongatus	タモロコ					○				
G. biwae	スゴモロコ						○			
Moroco steindachneri	アブラハヤ	○								
Zacco platypus	オイカワ	○	○	○		○	○	○		
Z. temminckii	カワムツ						○			
Carassius auratus cuvieri	ゲンゴロウブナ								○	
C. auratus longsdorfii	ギンブナ				○	○	○	○	○	○
Cyprinus carpio	コイ	○								
ドジョウ科										
Misgurnus anguillicaudatus	ドジョウ	○								
Lefua echigonia	ホトケドジョウ	○								
Cobitis biwae	シマドジョウ	○								
ナマズ科										
Parasilurus asotus	ナマズ					○	○			
メダカ科										
Oryzias latipes	メダカ						○		○	
ボラ科										
Mugil cephalus	ボラ									○
タイワンドジョウ科										
Channa argus	カムルチー						○	○		
ヒイラギ科										
Leiognathus nuchalis	ヒイラギ									○
スズキ科										
Leteolabrax japonicus	スズキ							○		○
シマイサキ科										
Therapon oxrhynchus	シマイサキ									○
ハゼ科										
Rhinogobius brunneus	ヨシノボリ	○	○						○	
Acanthogobius flavimanus	マハゼ							○	○	○
カジカ科										
Cottus pollux	カジカ	○								

この水系の上流部では，オイカワ，カマツカをはじめ10種が生息していることが認められた。このうち前記の2種が最も優占的にみられ，その分布範囲も広い。それについで多いのがアユとヨシノボリである。アユは，下流部の水質条件からみて殆んどが放流したものと思われる。オイカワは貧腐水性からβ－中腐水性の指標種であり，下流域の枇杷島橋から上流域，瑞浪市の上部まで広く分布し，本支流を含めて最もポピュラーに出現する。カマツカも本流では，オイカワと同様枇杷島橋より瑞浪までの底質が砂底の水域に生息し，最近増加しつつある。漁業協同組合でも，この増殖に力を入れている。中流部では，志段味橋（春日井市）吉根橋付近で，モツゴ，カマツカ，タモロコ，オイカワ，ナマズ，ギンブナなど6種の生息が認められた。カマツカとオイカワがここでも優占性を示している。下流部では新庄内川橋より河口までの間に，フナ，モツゴなど17種の生息を確認した。下流部での優占的種類はギンブナでありモツゴ，オイカワがこれについでいる。下流部に生息する魚類のうちボラ，ヒイラギ，スズキ，シマイサギ，マハゼは海水性又は汽水性種であるが，このうちスズキ，マハゼは河口より14km上流の枇杷島橋の地点で採捕した。これらの種類は，かつては，もっと上流の矢田川との分岐点，ときにはそれより上流にまで溯上していたといわれる。下流部での優占種は，β－中腐水性～α－中腐水性の指標種のフナである。この他に個体数としてはそれ程多くはないが，カムルチーが水質汚濁が著しくなって以来増加の傾向を示している。また水質の悪化により河口周辺から姿を消したものには，クロダイ，カレイ，ウナギなどがあり，著しく減少したものにはコチ，スズキ，マハゼ，コノシロ，ヒイラギなどがある。

なお庄内頭首工より下流に生息するこれらの魚類は捕獲しても異臭があって食用にはならない点今後の水質改善，水産生物の保護増殖とともに解決しなければならない重要な課題である。

庄内川の水生生物

建設省庄内川工事事務所

あゆの追跡調査

9年ぶり鮎放流される！

きれいにする会を発足させるに当って庄内川に放流又は天然塁上の鮎が住めるようにするのが一つの悲願でした。５１年6月１４日１９年ぶりに鮎が放流され、生息できる最低の状況にまですることができました。これも会員の皆様方の援助御協力のたまものです。

ここに鮎の追跡調査及び庄内川の魚類の分布状況について報告致します。

＜鮎追跡調査＞

５１年度

6.１４　吉根橋下流エン堤下に愛知県水産課が稚鮎を放流、１万７千匹体長６～７㎝。

6.２９　吉根橋下流エン堤下で投網を打つ

残念ながら鮎は採取できず石には、はみあとが認められる。

吉根橋上流で瀬頭に投網を打つが、鮎は採取できず、はみあとも確認できず、従ってエン堤上流に登った形跡なし。

7.　1　庄内橋下流で鮎の友釣りをしているとの情報があり疑問を抱きながら夕方庄内橋下流で投網を打つ

ここで鮎を採取、体長11㎝瀬頭あたりにははみあとがびっしりとある。採取した鮎は天然か放流かは疑問。

7.２３　吉根橋放流点で投網を打つ、残念ながら鮎は採取できず中央流心部附近で、はみあと確認。生存の可能性ますます強まる、前回採取地点のはみあとの石は苔がくさっていた。

8.　8　準会員より水分橋右岸でやせほそった鮎が四つ網で取れたと

の連絡があり投網を打ったが採取できず、はみあとも確認できなかった。水分橋付近では、鮎の生息に疑問を感じる。

吉根橋下流５００mの中央部で鮎採取、体長１８cm一般の鮎とくらべると白っぽく何かものたりない。

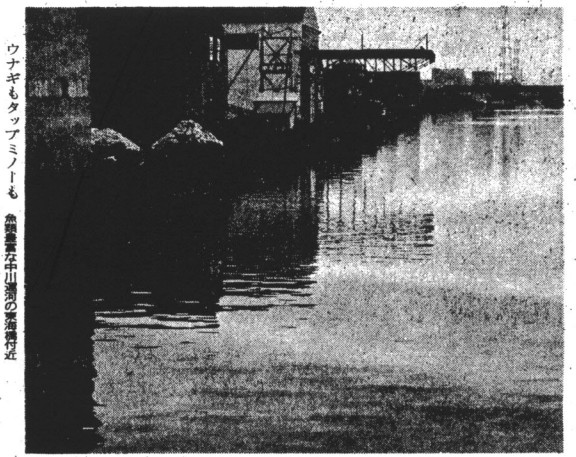
中日新聞　昭和51年8月17日

フナが―メダカが―戻った

市内の主要河川で魚類分布調査

17地点で22種確認

浄化の指標　オイカワも姿見せる



ウナギもタップミノーも　魚類豊富な中川運河の家畜橋付近

「市内の河川は、じわじわ息を吹き返している」――市公害対策局は十六日、山崎公害対策局長（佐藤昇・前市財政衛生部会長）に市内の主な河川の「魚類分布表」を報告した。河川別にどんな魚が泳いでいるかをまとめたもので、全市的な調査は初めてのことだという。その中で、水のきれいな川にしかすまないオイカワが天白川、山崎川、庄内川、堀川で採取されたのが注目された。また、中川運河の家畜橋付近では、名古屋港の海水も影響するためかボラ、チンタの姿も見られた。

市内河川の汚濁状況は、さる六月、有機汚濁を示すBOD（生物化学的酸素要量）を中心に調査がまとめられた。その大部分は「下水道の整備、さらには工場による廃水の減少で、かなりきれいになった。国の環境基準であるBOD一〇PPM以下という数値を達成している河川も多い」――というもの。

これに対し、市議会から「単に数値を示されても、一般にはピンとこない。一度、どんな魚がいるか調べたらどうか」との提案があり、市公害対策局では実際に調査を行なったり、酸素不足で魚が浮いた際のデータも参考に、今回の「分布表」をまとめた。河川は十二河川で計十七地点。

それによると、確認された魚類は計二十二種類で、ほとんどの河川で採取されたのはフナ。これは当然かも知れないが、初めて採取されたのはフナ。これは当然かも知れないが、初めて採取されたのはフナ。これは当然かも知れないが、初めて

8.22　中日新聞に鮎の成長がのる、

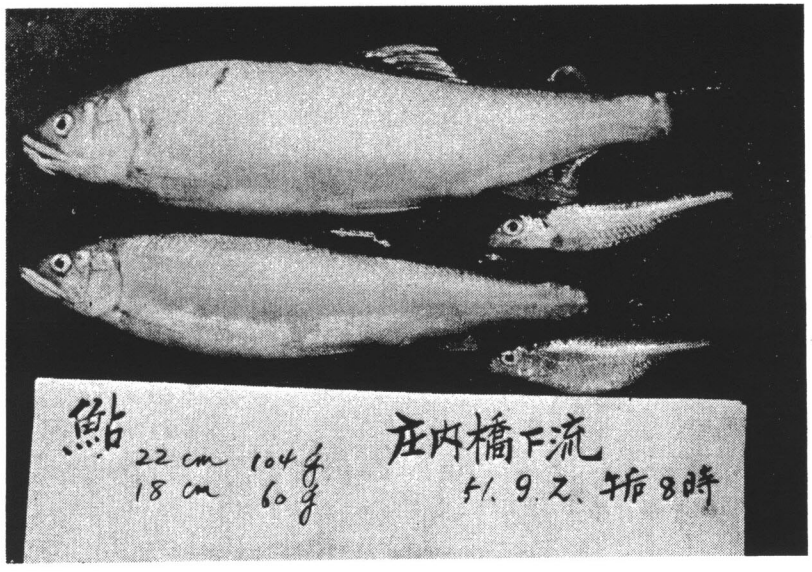
体長１８～２１cm

8.23　夜、吉根橋下流でコロガシ（ガリ）で鮎を採取、体長２０cm

鮎は成長している。〃〃コロガシ程度なら楽しめるが友釣りにはまだまだ疑問。

9.　2　庄内橋１００m下流投網で鮎を採取、大きいのは体長22cm 体重 104g 石にはみあと確認、天然か放流か？

名古屋女子大の広教授にたずねる。



9.　7　広教授とともに庄内橋下流部の苔を調査採取。

１０.　6　名古屋女子大の広教授の調査により庄内橋で採取された鮎は天然の鮎であることが立証、毎日新聞にて発表される（１０.６分）

１０.２３　第一回食べられるかも知れない魚釣り大会の試食会の魚を採取

松川橋　フナ　シラハエ　コイ　　ナマズ

水分橋　フナ　コイ　カマツカ　シラハエ

庄内橋　フナ　シラハエ　ナマズ　鮎　体長25cm 落ち鮎の様だ。

上流部の土岐川漁業組合の話では今年は鮎の成長が良いとのこと。

１０.２４　第一回食べられるかも知れない釣り大会と試食会

（天然鮎がいたことにより食べられないを訂正する）

第一回試食会の感想（５０名位）…… 全体的に食べられない。

松川橋　フナ、コイ、ナマズは食べにくいがシラハエは食べられそう。

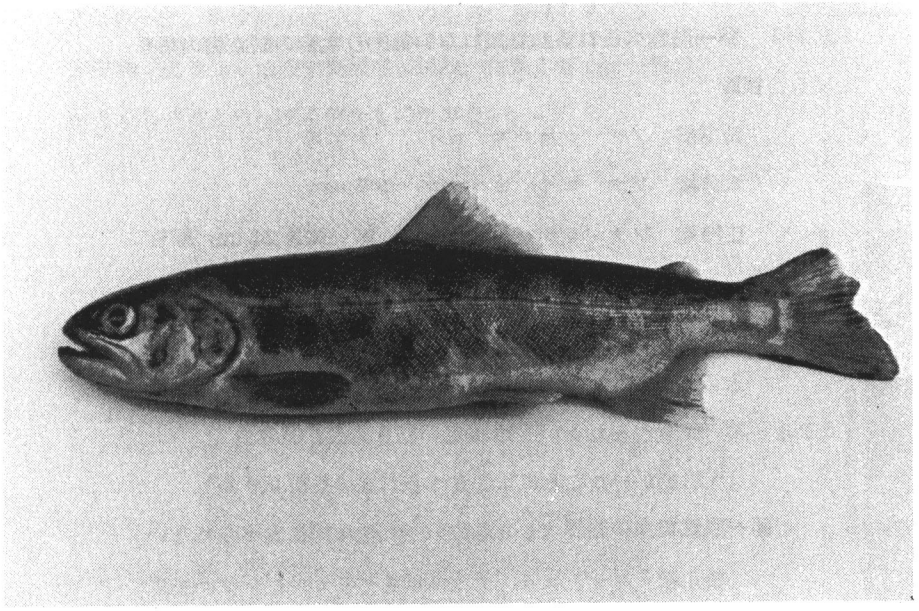
水分橋　コイ、フナ等はもちろんシラハエ、カマツカについても食べられない。

庄内橋　フナ、コイ、ナマズについては吐き出すほどひどい。

一口ふくむと油くさい臭いとイオウの様な味が口の中に広がる。ジュースをのんでもいつまでも口の中から消えない。

５２年度

1.３０　土岐川上流部（庄内川水域でのあまごの生息確認の最新情報）上折戸付近であまご採取、体長２０ｃｍ（写真）



あまご　２０㎝

3.　　塑上時期も近づき庄内橋下流へ出かけるも鮎確認できず。

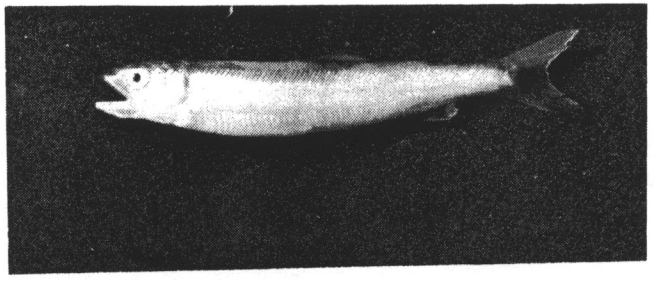
4.　　準会員の手により水分橋でブルーギル、採取体長１０㎝。

4.２３　今年も庄内橋下流にて鮎採取、体長10cm ボラ、セイゴ
カマツカ、センペラ、モツゴ、ヒガイ、ウグイ、カニ、モエビ等も採取。

5.１５　**第一回鮎救出作戦**

雨あがりのため水量多く採取困難、３０匹程救出成功
体長１２㎝。
名古屋女子大広教授、土岐川漁業組合の協力をえる。

ウグイ 20 cm



鮎 12 cm

昭和52年（1977年）5月30日（月曜日）　中部讀賣新

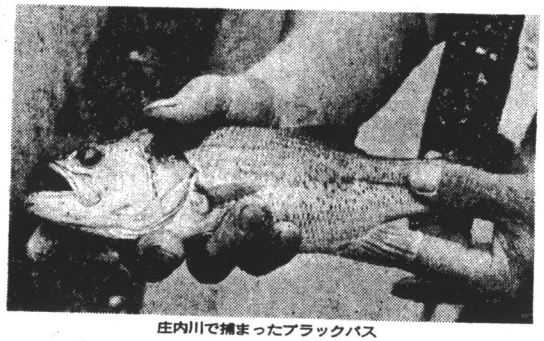
悪魚ブラックバス

庄内川にもいた

だれが持ち込んだ

西区で釣り人の網にアユが気がかり

小魚を食い荒らす猛魚ブラックバスが三十九日、名古屋市西区の庄内川でタモ網にかかり、同川にもすみついていることが確認された。昨年、犬山市の入鹿池で異常繁殖しているのがわかって以来、これまでに矢作川と天白川で見つかっているが、庄内川で見つかったのは初めて。



庄内川で捕まったブラックバス

同川には二年前から愛知県がアユを放流しており、「もし繁殖し始めたら、とんでもないことになる」と関係者を心配させている。

ブラックバスを捕えたのは名古屋市西区八筋町三八九、メッキ業小川武さん（四三）。この日昼すぎ、庄内川橋下流約百㍍の庄内川で、タモ網で魚をすくっていたところ、カワハゼやフナ、モロコなどの魚にまじって、背みを帯びた銀色の魚がかかった。下あごの突起やエラの大きさから、ひと目でブラックバスとわかり、河原は大変な騒ぎ。

東山動物園に持ち込み、川村西獣医（三三）に鑑定してもらった結果、やはり本物で、体長約二十六㌢、重さ二百㌘の成魚だった。

ブラックバスは北米原産の淡水魚で、日本には大正年間、釣り魚として輸入されたが、その後、各地の池や河川で繁殖。他の魚をエサにすることから漁業関係者にきらわれ、愛知県でも昨年、県漁業調整規則を一部改正して、卵を含めて河川や池に放流することを禁止している。

庄内川で見つかったことについて、県水産課は「だれかが持ち込んだとしか考えようがない。どの程度繁殖するかは解明されておらず、問題はこの点にある。しかし、アユなどがやられなければいいが……」と思案もんでいる。

6.10　庄内橋下流で鮎採取、体長 13cm。

うなぎの塑上確認、エン堤のかべに、はりついて登る姿は生命力の強さを感じる。

㊟　すでに専門業者がうなぎを密漁との情報あり。

7.10　庄内橋下流鮎採取、体長 15cm。

新川中橋下流エン堤下で鮎が生息との情報あり、投網打っも確認できず、水分橋でも同様。

8.18　庄内橋下流鮎採取、体長 14cm（魚体の成長あまり変らず）

9.　庄内橋下流鮎採取、体長 18cm。

上流部の土岐川漁業組合の話では今年は鮎の成長が悪いとのこと。

水量が少なかったことが原因か？

10. 8　**第二回食べられるかも知れない釣り大会**の試食会のため魚を採取。

庄内橋下流シラハエ、モツゴ、カマツカ、フナ、コイ、ナマズ、鮎は採取できず。

１０．　９　**第２回食べられるかも知れない魚釣り大会と試食会**

釣った魚をその場で試食。

第２回試食会の感想

昨年よりやや良くなる。

庄内橋の魚　フナ、コイ、ナマズ、異様な味がする。

水分橋の魚　フナ、コイ、ナマズ、異様な味がする。

シラハエ、モツゴ、カマツカ、ヒガイ等はがまんすれば食べられる。

しかし多く食べると一日中不快な味が口の中に残る。

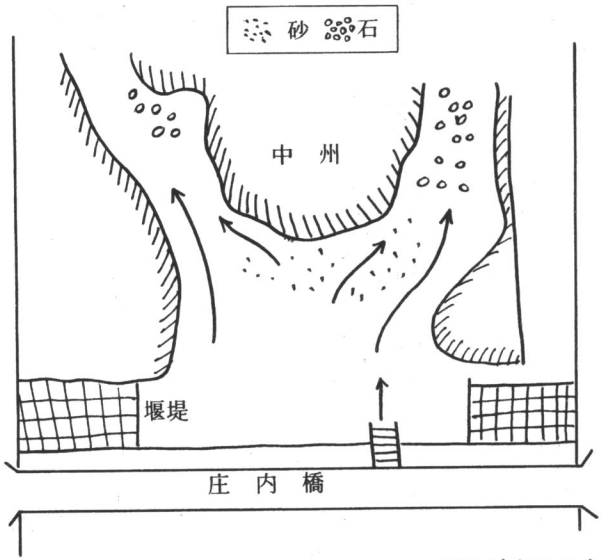
５３年度

3.１８　晴天　夕方６時～８時

庄内橋下流、投網打つも鮎採取できず。

シラハエ、モツゴ、カマツカなど確認。

５２年度にくらべ川の流れが変化。



水量が少なく川の流れが変化し、陸地が広くなる

白い泡が立ち川には悪臭がする。

（中性洗剤が原因か？）

平日朝８時ごろは比較的きれいだが、１０時ごろには濁りが出はじめる。

3.２４　晴天　夕方７時～８時　水温９℃

庄内橋下流左岸で投網打つも鮎採取できず。前日の雨で中州には渡れず。

水分橋下流水道管下でニゴイを採取体長１３㎝。ゼゼラ又はツチフキに似た魚も採取体長１１㎝。

第２回鮎救出作戦のため愛知県に特別採捕願を提出。

鮎塑上の条件

- 時　期　　3～4月
- 水　温　　13℃～18℃
- 時　間　　日没時（Pm 5時～Pm 7時頃）

（塑上する川の水温と海水の温度が同じになる時）

3.25　晴（ハナグモリ）　PM 5:00～6:00　庄内川の水温を測定。

正　徳　橋　　2:30 － 13℃

潮さし込む。ヘドロ多くあり。

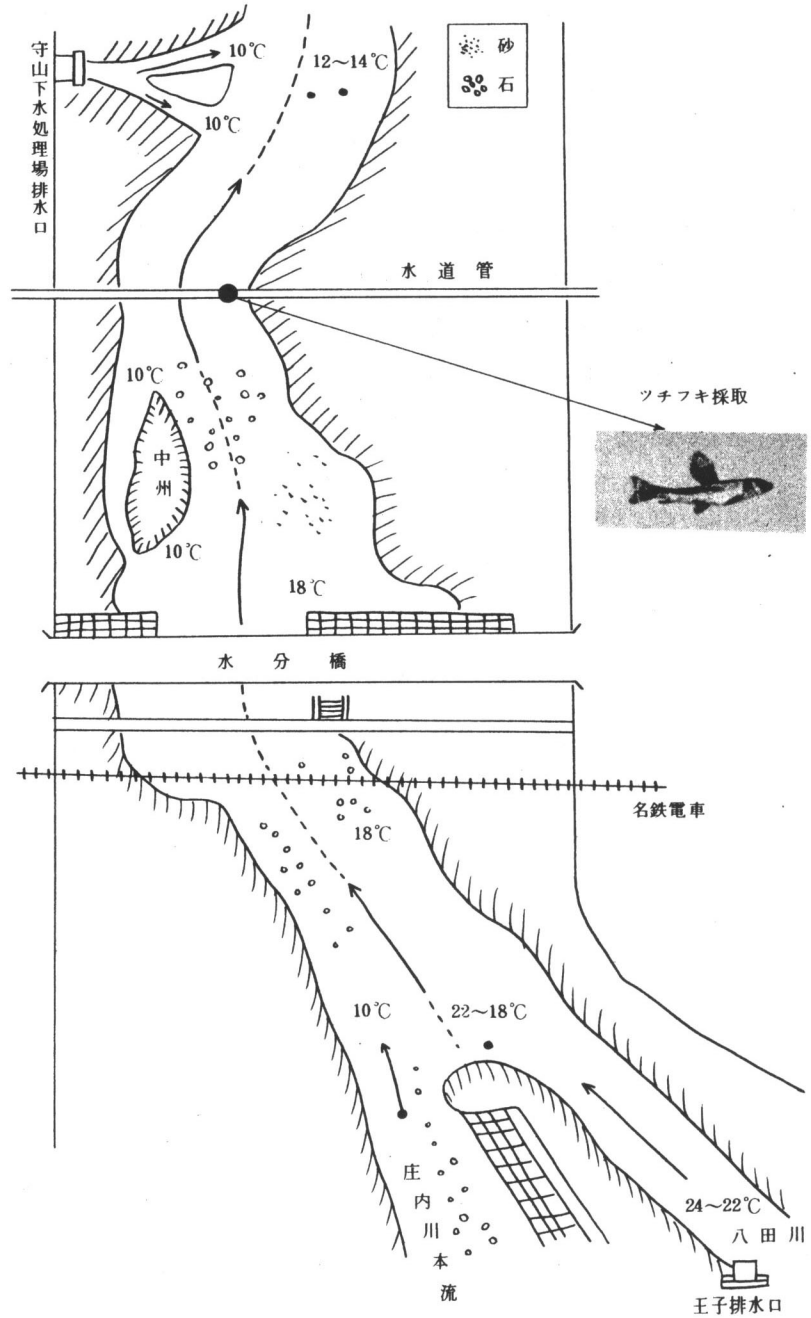
2:40 － 13℃

潮さし込む。

枇杷島橋下　　3:00 － 13℃

ヘドロ少しあり。

庄内橋エン堤下　　3:20 － 14℃



3.26　夕方4時～6時　晴天　風ややある　水温14℃

庄内橋下流投網打つも鮎採取できず。

シラハエ、モツゴ、ニゴイ、ツチフキ、カマツカ、フナ、確認。

水質汚濁は魚の移動をも阻害するから汚水域上流の郡集構成にも影響を与える、都市や工場は下流に発達するので海と汚水域上流との間の移動が困難となる。

工場廃水と都市下水の双方に対して、フナとオイカワの抵抗力が強い。

水資汚濁に対する各種の抵抗力を比較する。

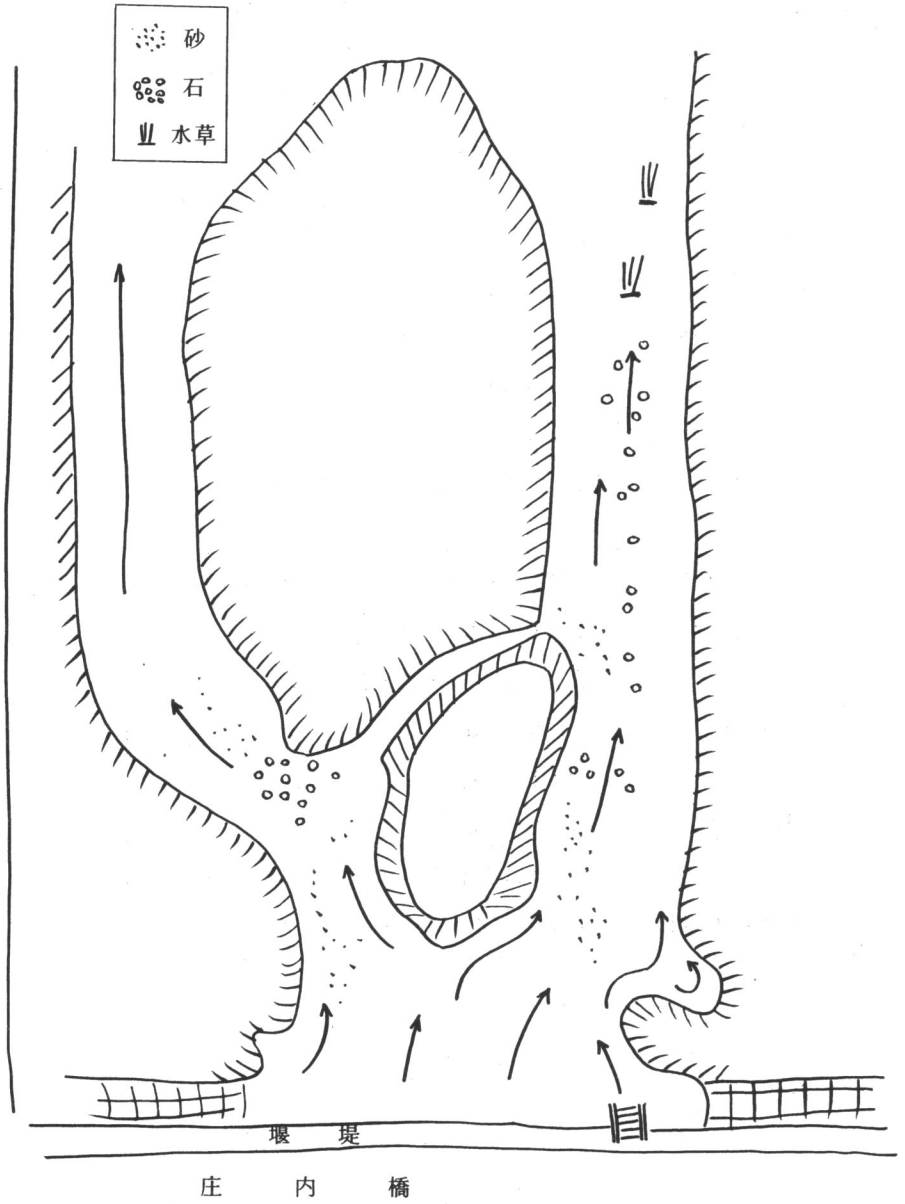
フナ　鮎　オイカワ、コイ、ナマズ、カマツカ

河川の生体学より

沼田真　監修

水野信彦

御勢久右衛門共著



3.30　夕方4時　晴天　風強し

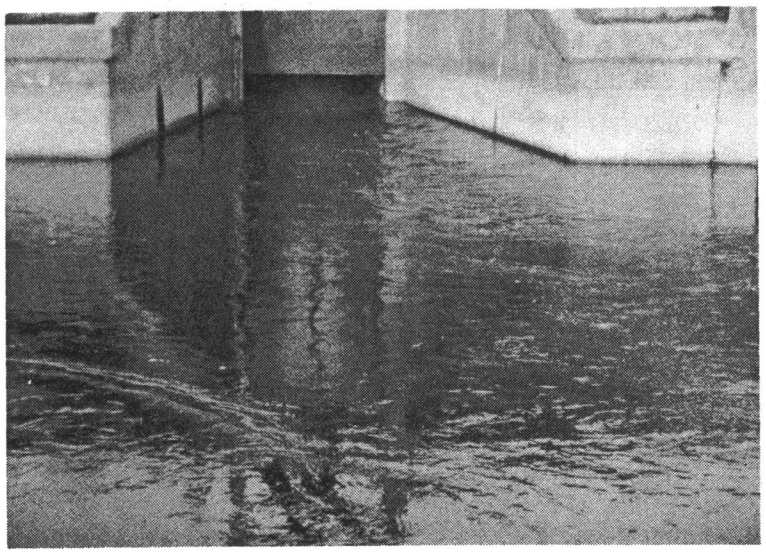
王子製紙排水口、水温18℃、3月25日と比較すると水位20cm程低下。

水分橋上流八田川合流点13℃～14℃

3月28日の雨のため、本流水位10～15cm位、高かった。王子製紙排水口下流にて水草を確認、茶色ぽかった。

庄内橋下流エン堤下、5時、水量が多く投網を打つことをやめる。左岸15℃～16℃　右岸12℃～13℃ 水たまり14℃

新川中橋　庄内川本流　12℃～13℃
　　矢田川　14℃～15℃



4.　5　夕方4時　晴天　風ややある。

王子製紙排水口　24℃

水分橋上流八田川合流点　14℃

水分橋上流　12℃

水分橋下右岸　20℃　水分橋下水たまり　14℃

〃　左岸　12℃　守山下水処理場排水口　13℃

新川中橋4時50分

庄内川本流　16℃　矢田川　15℃

庄内橋5時

エン堤下右岸左岸とも14℃

庄内橋下流エン堤下で投網打つも鮎採取できず

4月3日の雨で本流はやや水量多し

ドンコ、シラハエ、モツゴ、モロコ、ウグイ、フナ、ニゴイ等を採取。

4.19　夕方5時　晴

王子製紙排水口　26℃～27℃　八田川20℃

水分橋上流本流　15℃～16℃

水分橋下流右岸　17℃

〃　左岸　15℃～16℃

守山下水処理場排水口　13℃～14℃

〃　上流本流　15℃～16℃

新川中橋5時30分

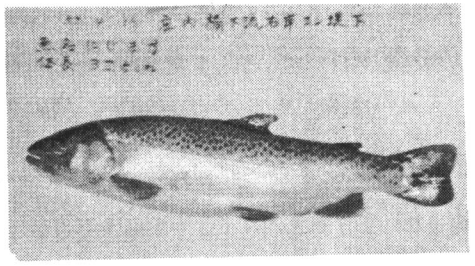
庄内川　17℃　矢田川18℃～20℃

庄内橋下流右岸　16℃

〃　左岸　16℃

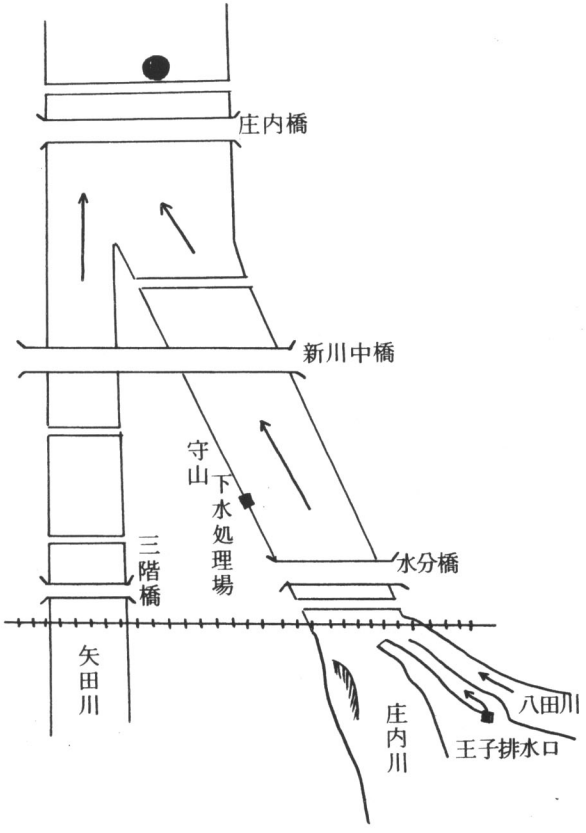
庄内橋下流エン堤下で投網打つも鮎採取できず。

新川中橋上流矢田川エン堤でフナ、シラハエ、モロコ採取。雨で水量が多くエン堤をコイ、フナが飛び上り登る姿は爽快だった。



庄内橋下流右岸エン堤下でにじます採取
32.5cm

4月18日の雨で八田川にも水が流れ初め、王子製紙排水口の水とが合流したしかし排水と八田川との水が分かれて流れる、八田川の水が流れる右岸側では魚の飛びはねるのが見えるが排水側では魚影は確認できず。



4.19　4月19日まで鮎の追跡調査をしてきたが、いまだに採取できない鮎の塑上出来ない原因について

1.　52年度全県的に鮎の不作

上流部の土岐川については鮎の友ずり開禁日、全くの不調、秋の落ち鮎がふ化出来ずに終つた可能性大？

1.　庄内橋下流エン堤下の鮎についても成育不調

1.　雨量が少なく砂が流れ込んで苔のつく石をかくしてしまつたことが原因とも考えられる

1.　52年8月より王子製紙の設備増設により水質の悪化、又水温の人口的格差

温排水によって、旧水温との著しい温度差が見られる

【今年は鮎の塑上状態が悪く鮎救出作戦中止】

5.25　庄内川上流、土岐川の支流、肥田川にあまご放流
3,000匹

中日新聞（夕刊）

昭和53年6月3日（土曜日）E版〔12〕

夕刊 市民版

きれいになってきた水

魚はどうかな

庄内川で重金属調査

網にシラハエなどピチピチ

魚にとまれた重金属を調べるため、庄内川の魚を取る名古屋市職員や矢田・庄内川をきれいにする会の人たち＝名古屋市守山区の水分橋下流で

名古屋市は三日午前、守山区瀬古の庄内川水分橋付近で、魚介類の重金属調査をした。四十八年から毎年実施しており、ことしは天白川に次いで二回目。

この日は、公害対策局の水質保全課、公害研究所水質部、名古屋女子大関係者のほか「矢田・庄内川をきれいにする会」の人たちも参加。午前九時三十分から水分橋付近に集まり、投網などでつぎつぎ魚を採取した。

庄内川の水はこのところ年々浄化のきざしがみられ、きれいな水に好んで住むといわれるシラハエ十四匹のほか、モロコ、フナ、カマツカなど計百八匹がとれた。

捕獲した魚は公害研究所へ持ち込み、水銀、鉛、カドミウムなど重金属類や、有機物質が含まれていないかを分析する。

調査結果がわかるのは九月ごろになるという。

市公害対策局は「全体的にはきれいになってきたのだろうが、市の周辺部では家庭汚水の流入もめだっている。下水道の整備を急ぐことが必要だ」と話している。

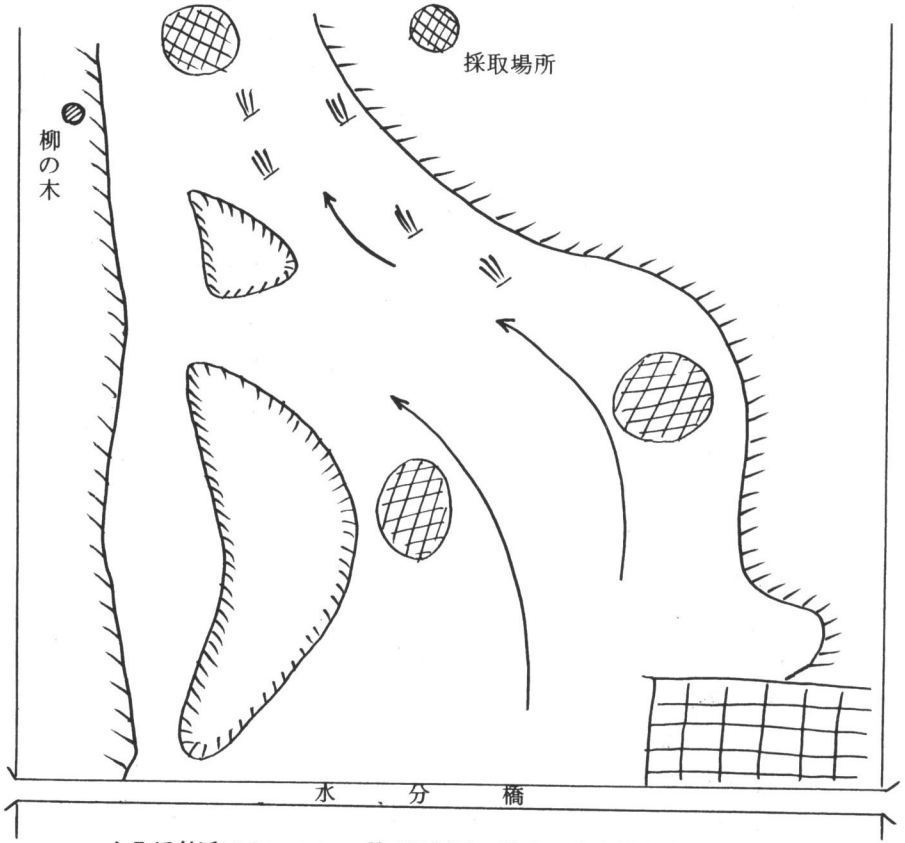
むすび糸織 各種取揃え
あなたの夢をかなえる糸 ひとりむすび糸
本つづれ帯糸・入荷 京綾加工承ります
御園座隣 むすび糸・典子の巣 出羽
地下鉄矢田駅大曽根口前 ☎ 電話 営業日／毎週火曜日

6. 3　庄内川、矢田川、新川、重金属調査のため魚採取。

名古屋女子大学　広教授・藤井教授

名古屋市公害対策局水質保全課公害研究所水質部、きれいにする会。

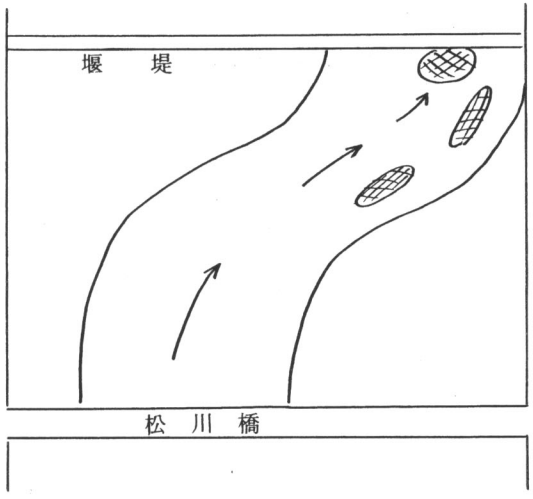
1. 水分橋　9時　フナ、シラハエ、カマツカ



水分橋付近はあいかわらず王子製紙の排水と庄内川本流との水の色がはっきり分かれ、まだまだ、しかし魚類は年々ふえている。

2. 松川橋　フナ、カマツカ、シラハエ、モツゴ、カワムツ

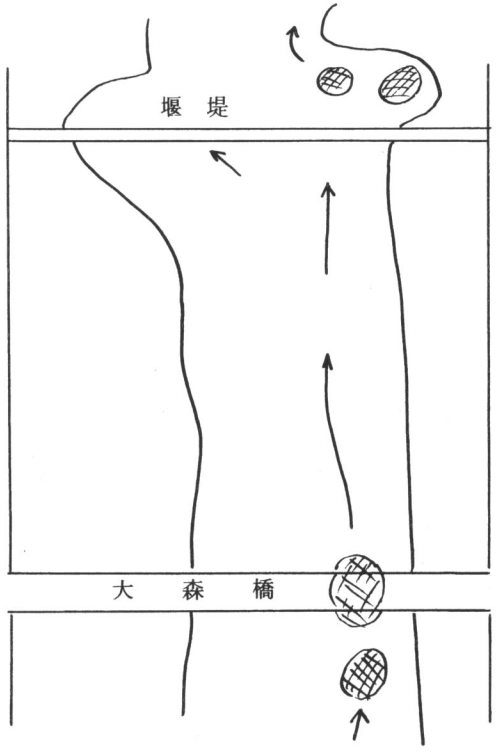
松川橋付近は５２年度よりさらに良くなる。上流部の土岐川漁業組合の浄化運動の成果が表われているようだ。



3. 大森橋　フナ

大森橋付近はきれいになるもフナしか採取できずまだまだの感あり。

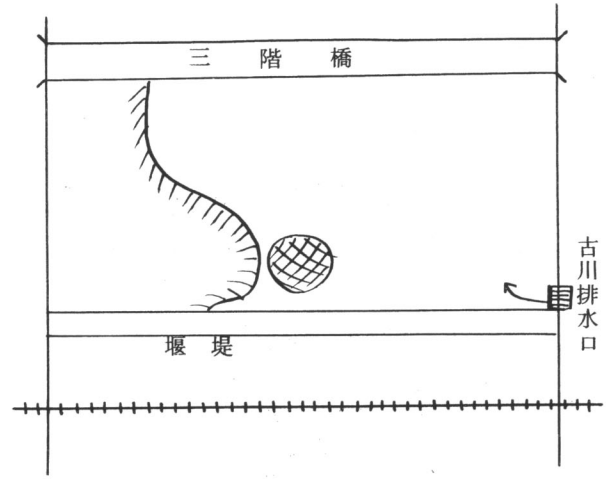
家庭排水と中小の工場排水とで水質は悪い。



4. 三階橋　フナ、コイ 40cm

三階橋付近は家庭、工場排水が入って来るため投網にヘドロが付着する。

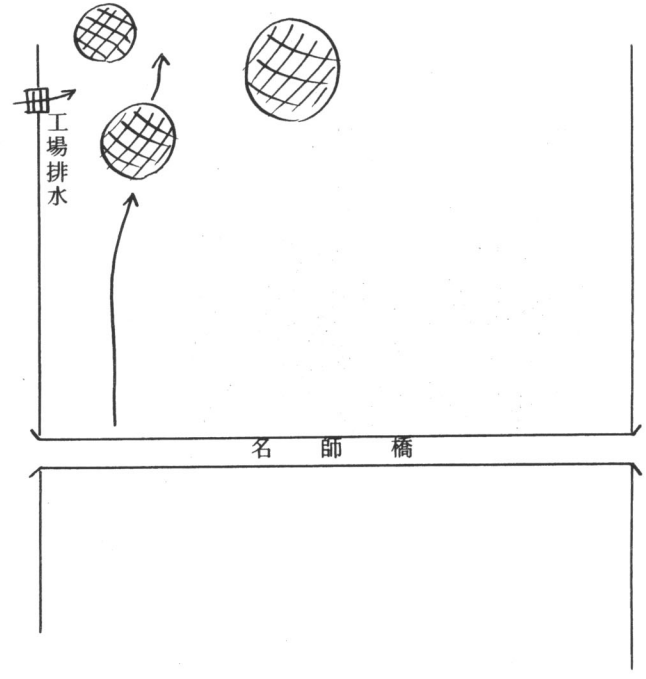
矢田川については家庭、工場排水のため水質が悪くシラハエは採取できなかった。



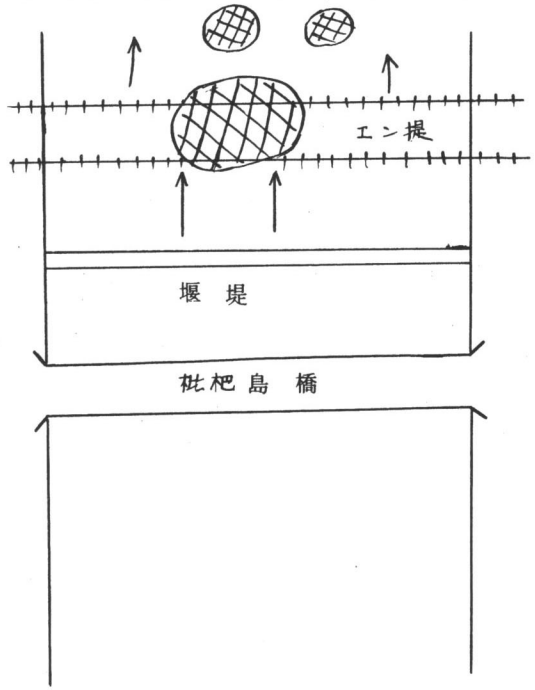
5. 名師橋　フナ

新川についても工場排水が多いため、水質は悪い。

シラハエ採取できず。



6. 枇杷島橋　アユ、フナ、コイ、シラハエ、モツゴ、モロコ、センペラ、セイゴ、ボラ、手長エビ



ボラ、セイゴが群をなしていた

枇杷島橋下流部でアユ、セイゴ、ボラ、手長エビ等など比較的水質の良い所にいる魚類がふえ、すこしづつ庄内川もきれいになっている様に思われる。（環境に対する順応力が増しているのではないかとも考える事がしばしばある）

鮎を採取する。2匹 6 cm　7cm　今年初めて。

7.　　準会員の手により水分橋でカネヒラ採取7 cm

7.1 1　庄内橋下流エン堤下

鮎採取、体長7.5 cm　うなぎも多く確認

モエビ、カニも確認。

7.1 3　庄内橋下流エン堤下　前夜の雨で増水

鮎採取 ㊫ 10.5 cm　㊥ 11.5 cm　18～20 cm 位の鮎が取れたとの情報あり。

昭和53年9月10日

中　日　新　聞

きれいになった名港 魚増える

ボラなど どっさり

珍しエイやクルマエビ 食用はもう少し辛抱

船に引き上げられた魚が銀色のウロコを光らせて跳びはねる――九日午前、名古屋港で行われた名古屋市による海水汚染調査の産業捕獲は三十キロ級のボラが大量に増え、クルマエビ、エイが初めて捕獲されるなど、大型化と多様化が目立ち、ここ数年ぶり上回る〝豊漁〟となった。市水質保全課は「名古屋港の水質がここ数年改善され、魚のすむのにふさわしくかえない環境になってきた証拠」とみている。

名港内で捕獲されたセイゴ、ボラ、コノシロ

調査は市水質保全課と同市公害研究所が海水や海底のドロ、魚類の肉を分析、総水銀、カドミウム、PCBなど重金属を中心とする有害物質の濃度を測定するため、四十八年以来続けられている。今回も前年と同じ高潮防波堤北、金城ふ頭南、九号地北の三海域で海水を採取するとともに、漁船「三慈」が長さ二百五十㍍の「かご網」を使い、一時間程度ずつ魚類を捕獲した。

ボラが次々引き上げられたほか、七十キロ級のセイゴをはじめ、クルマエビ、エイなど新たに姿を見せたもの も五種類あった。結局、捕獲魚類は三海域で千九十七匹。昨年に比べ二百四 余 多かった。捕獲の中心はコノシロの八百九匹だったが、ボラが昨年の二匹から二百三十二匹に増えたのが目立ち、数だけでなく重さでも前年を倍以上、上回る漁獲だった。

こうした結果について市水質保全課は「コノシロのような汚染型の魚だけでなく、ボラが増え、特に汚染に強くの魚種が多様化していることは、名古屋港の海中環境が魚の生存に適するようになってきたため」と分析している。

ただ、食用としての魚の安全性については、昨年捕獲されたカレイの中から厚生省の暫定基準を上回るPCBが検出されたこともあるため、魚の中の重金属類は安全値を一回り、まず安全と思うが、来年早々までに今回の魚の分析をまとめるので、結論はそれまで待ってほしい」と慎重な態度をみせている。

１０.２１　第３回食べられるかも知れない魚釣り大会の試食会用の魚を採取に行く。

庄内橋下流エン堤下

鮎採取　　体長１５～２２ｃｍ　５０匹

ボラ採取　体長１５～２０ｃｍ　４０匹

１０.２２　第３回食べられるかも知れない魚釣り大会と試食会、釣った魚も試食する。

第３回試食会の感想

庄内橋の魚　アユ、ボラ　食べられた

水分橋の魚　シラハエ、カマッカ　食べられたが少し油くさいときもある

試食した魚のほとんどが定着性のある魚でないために食べることができた。

５４年度

1.１５　庄内川上流土岐川の支流肥田川に放流のあまごを観察に行く。水が少なくあまご確認できず。

庄内川は現時点ではアユが生息できる限界である？

調査担当　　宮　田　照　由

写真撮影　　石　川　雅　宥

この若アユは育つだろうか？

〈水資源シリーズNo.4〉東海の水を守ろう

庄内川 美化 それは住民・企業の心がけ次第です

庄内川。岐阜県恵那市の山岳地帯から、瑞浪、土岐、多治見、春日井市など中央線に沿った市を貫流、伊勢湾に注ぐ、全長約百㌔の一級河川。

高度経済成長の始まる前の三十四年ごろまでは、名古屋市内でも川底まである通り、コイやウグイが群れをなし、水辺の草花や庄内川特産の貝類も見られた。

「そりゃあ、きれいなもんでしたね。竜泉寺（名古屋市守山区）ではシジミ王の約大会を開いたり、熱ちアユをつかまえようとヤナをつくったりしたもんだ。ワシらも泳ぎ場をつくってよく泳いだもんだ」。〝天田・庄内川をきれいにする会〟の丹羽義秀会長（七一）＝守山区瀬古字川西二七〇＝は十数年前の庄内川をこう懐かしがる。

しかし、全国の河川がそうであるように、高度経済成長の歪みとともに、庄内川もまたこれのチンボを早めていった。汚濁の原因は上流部の砂利採取、窯業廃棄の排水とみられていた。愛知県の調べによると、庄内川流域には瀬戸市を中心とする陶磁器用製土、砠（けい）砂の清製工場等の窯業関係企業が集中、庄内川支流の矢田川、水野川流域などに二百十二工場があった。これらの排水基準をよみがえる。

しかし、四十年ごろから、全国的に〝公害防止〟〝環境保全〟の声が強まり、国、地方自治体とも〝ストップ・ザ・公害〟に本腰を入れ始めた。

四十三年六月には水質汚濁防止法が施行され、特定施設の届け出義務づけ、排水基準が定められ、これを受けて愛知県も四十七年三月、公害防止条例施行規則を定めた。これは国の排水基準をよりきびしくするもの。

「公害防止施設資金制度」をつくり、中小企業者に公害防止施設資金の貸付を開いた。最高二千五百万円の資金を低利（四十六年からは金利ゼロ）で貸し、汚水処理に力点を置こうというもの。発足当時の四十年度の融資申込みはわずか十五件、融資額五千六百余万円だったが、その後、中小企業者の間でも公害防止意識が高まり、四十九年度末までの融資件数は千二百八十一件、融資総額は十億三千八百万円に達した。こうした法規制の強化、企業サイドの公害防止意欲の高まりのなかで、住民の間でも「庄内川の清流を取戻そう」の動きが芽ばえ始めた。

四十九年十二月には〝矢田・庄内川をきれいにする会〟が生まれた。「庄内川がどんどんよごれていく過程で、それを見過ごしてきた私たちの責任を痛感した。昔の清流を私たちの手で蘇に返そう、そのためには子孫に伝えるやらねばならない―そんな気持から、そこで愛知県は四十年度からいて立ってもいられなくなった」これが同会をつくった動機だ。

ある。わずか三人で発足した会だが、今では会員六百五十四人になった。合言葉は「川のよこれは心にろ、家庭汚水のよこれ」。立看板やポスターで河川の汚濁をうったえ、たった。しかし、住民の視線の目は公害に対する認識が急速に高まった。かつて化学工場などによる処理施設が次々と建設され、技術的には公害防止は決定的に進んだ。十数年前の自然は取戻せたと言う。

今回の種子放流は、関係者の「庄内川はきれいになった」の自信から実現したのだが、不安がないわけではない。「庄内川で魚が取れた」との報告が相次いでおり水質、環境汚染管理委員会で〝試験的にアユを放ってはどうか〟の声があがり、庄内川漁協組合の協力でやってみる。しかし、正直いって不安。うまく育ってくれればよいのですが……」（愛知県水産課）と言う。しかし「育ってほしい」「育つだろう」との期待も大きい。「そりゃ、不安もあるが、放流は私たちの夢と希望を与えてくれる不安にも育たなかったら、もっと言われにくるように、みんながんばればいい。嗚いニュースの多い中、アユを放流したと自体、クリーン・ヒットですよ」―下流部の住民はおのぞみなまなざしでながめている。

九年ぶりアユ放流

―白濁の川 庄内川に―

庄内川に稚アユが放たれた。愛知県恵那市の一万七千四。「白濁河川」（愛知県下最悪の川）―川のこちらが増すにつれ、こう呼ばれてきた庄内川も、行政監視、住民の浄化運動が実り、よみがえりつつある。愛知県水産課が「アユが生きられる環境に戻ったかどうか」を調べるため、九年ぶりに放流したもの。六月十四日

明、名古屋市守山区吉根、吉根橋下流約百材の放流地点では、稚アユが勢リンを

おどりぜなから、川面に吸込まれていった。「大きくなれよ」「育て」・

岸辺で見守る人々の胸は期待に大きくふくらんだ。いた。がんばれ！稚アユ君。

清流を子に孫に

公害防止、目覚める企業

庄内川。岐阜県恵那市の山岳地帯から、瑞浪、土岐、多治見、春日井市など中央線に沿った市を貫流、伊勢湾に注ぐ、全長約百㌔の一級河川。

高度経済成長の始まる前の三十四年ごろまでは、名古屋市内でも川底まである通り、コイやウグイが群れをなし、水辺の草花や庄内川特産の貝類も見られた。

「そりゃあ、きれいなもんでしたね。竜泉寺（名古屋市守山区）ではシジミ王の約大会を開いたり、熱ちアユをつかまえようとヤナをつくったりしたもんだ。ワシらも泳ぎ場をつくってよく泳いだもんだ」。〝天田・庄内川をきれいにする会〟の丹羽義秀会長（七一）＝守山区瀬古字川西二七〇＝は十数年前の庄内川をこう懐かしがる。

しかし、全国の河川がそうであるように、高度経済成長の歪みとともに、庄内川もまたこれのチンボを早めていった。汚濁の原因は上流部の砂利採取、窯業廃棄の排水とみられていた。愛知県の調べによると、庄内川流域には瀬戸市を中心とする陶磁器用製土、砠（けい）砂の清製工場等の窯業関係企業が集中、庄内川支流の矢田川、水野川流域などに二百十二工場があった。これらの排水基準をよりきびしくするもの。

しかし、四十年ごろから、全国的に〝公害防止〟〝環境保全〟の声が強まり、国、地方自治体とも〝ストップ・ザ・公害〟に本腰を入れ始めた。

四十三年六月には水質汚濁防止法が施行され、特定施設の届け出義務づけ、排水基準が定められ、これを受けて愛知県も四十七年三月、公害防止条例施行規則を定めた。これは国の排水基準をよりきびしくするもの。

しかし、四十四年ごろから、全国的に〝公害防止〟〝環境保全〟の声が強まり、国、地方自治体とも〝ストップ・ザ・公害〟に本腰を入れ始めた。

行政、企業、住民三者一体で

浄化へ取組む

「公害防止施設資金制度」をつくり、中小企業者に公害防止施設資金の貸付を開いた。最高二千五百万円の資金を低利（四十六年からは金利ゼロ）で貸し、汚水処理に力点を置こうというもの。発足当時の四十年度の融資申込みはわずか十五件、融資額五千六百余万円だったが、その後、中小企業者の間でも公害防止意識が高まり、四十九年度末までの融資件数は千二百八十一件、融資総額は十億三千八百万円に達した。こうした法規制の強化、企業サイドの公害防止意欲の高まりのなかで、住民の間でも「庄内川の清流を取戻そう」の動きが芽ばえ始めた。

四十九年十二月には〝矢田・庄内川をきれいにする会〟が生まれた。「庄内川がどんどんよごれていく過程で、それを見過ごしてきた私たちの責任を痛感した。昔の清流を私たちの手で蘇に返そう、そのためには子孫に伝えるやらねばならない―そんな気持から、そこで愛知県は四十年度からいて立ってもいられなくなった」これが同会をつくった動機だ。

ある。わずか三人で発足した会だが、今では会員六百五十四人になった。合言葉は「川のよこれは心にろ、家庭汚水のよこれ」。立看板やポスターで河川の汚濁をうったえ、たった。しかし、住民の視線の目は公害に対する認識が急速に高まった。かつて化学工場などによる処理施設が次々と建設され、技術的には公害防止は決定的に進んだ。十数年前の自然は取戻せたと言う。

今回の種子放流は、関係者の「庄内川はきれいになった」の自信から実現したのだが、不安がないわけではない。「庄内川で魚が取れた」との報告が相次いでおり水質、環境汚染管理委員会で〝試験的にアユを放ってはどうか〟の声があがり、庄内川漁協組合の協力でやってみる。しかし、正直いって不安。うまく育ってくれればよいのですが……」（愛知県水産課）と言う。しかし「育ってほしい」「育つだろう」との期待も大きい。「そりゃ、不安もあるが、放流は私たちの夢と希望を与えてくれる不安にも育たなかったら、もっと言われにくるように、みんながんばればいい。嗚いニュースの多い中、アユを放流したと自体、クリーン・ヒットですよ」―下流部の住民はおのぞみなまなざしでながめている。

野鳥類も帰ってきた

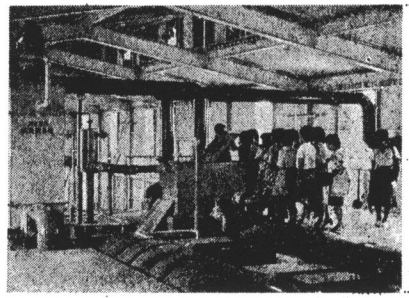
流域工場 処理施設ふえる

川が きれいになるに従って、姿を消していた動植物もまたよみがえった。名古屋女子大生活科学研究所が昨年四月まとめた庄内川の魚類生息調査（名古屋市守山区の松河橋から下流十カ所で調査）では、これまでほとんど姿をみかけなかったコイ科のモツゴ、カマツカ、オイカワ、クモハゼ科のマハゼのほか、マナマツ、ボラ、スズキなど八科十七種の魚が見つかった。

また、建設省庄内川工事事務所が今年三月に発表した庄内川水系の野鳥、こん虫、植物・水生物の観察結果でも、汚濁でほとんど絶滅したかワヒモやジョウドウツバメが観察され、野鳥だけで百九種、こん虫は四百四十三種が報告された。「川が きれいになれば、生きとした生命がよみがえる」を証明したわけ。

伊神則之・環境汚染防止課技術補佐は「水質汚濁防止法のできる前は、工場排水しろ、家庭汚水にしろ、たれ流しの状態だったので河川の汚濁をうったえた。しかし、住民の視線の目は公害に対する認識が急速に高まった。かつて化学工場などによる処理施設が次々と建設され、技術的には公害防止は決定的に進んだ。十数年前の自然は取戻せたと言う。

今回の種子放流は、関係者の「庄内川はきれいになった」の自信から実現したのだが、不安がないわけではない。「庄内川で魚が取れた」との報告が相次いでおり水質、環境汚染管理委員会で〝試験的にアユを放ってはどうか〟の声があがり、庄内川漁協組合の協力でやってみる。しかし、正直いって不安。うまく育ってくれればよいのですが……」（愛知県水産課）と言う。しかし「育ってほしい」「育つだろう」との期待も大きい。「そりゃ、不安もあるが、放流は私たちの夢と希望を与えてくれる不安にも育たなかったら、もっと言われにくるように、みんながんばればいい。嗚いニュースの多い中、アユを放流したと自体、クリーン・ヒットですよ」―下流部の住民はおのぞみなまなざしでながめている。



矩光の川にきれいな水を――。一日に約五万人分の し尿を完全処理する瑞穂市農久手町衛生組合の近代設備を見学する本地ケ原小学校PTAの人たち

庄内川漁業協同組合長　伊沢　佑保

一時は死の川となるかと心配された庄内川も、いろいろな人々の努力によって、二、三年前から徐々に美しい元の姿に戻りつつあることは、私達漁業組合員のみならず一般の人々も非常に喜びと期待をもって見守っていることと思います。

このような時に愛知県水産課の製努力によって去る六月十四日庄内川に鮎の試験放流れたことは非常に意義の深い事で、ぜひ立派に育つように、皆が努力と協力をおかけ鮎にも釣って来るか と出撃られるようにしなければならぬと思っています。

「名古屋市はバスに乗って鮎釣りに行ける」というようになったらどんなに楽しい事でしょう。

「元気に育って！」と子供たちの夢を托して九年ぶりに放流される稚アユ―名古屋市守山区の吉根橋付近で―

雑誌に紹介されたきれいにする会

社婦　50－(2)

名古屋市

婦人ボランティア
活動実践集

名古屋市教育委員会

名古屋の町に清流を

宮　田　明　美
名古屋市守山区瀬古川西252
（793）7961

1.　会の誕生と私

私が初めて庄内川を見た日、庄内川は白く濁っていました。川岸に座って眺めていると、白い砂だけが流れて行くようで、魚もいなければ鳥も飛ばない、生き物に一度も出合わない一日、それは中学を出て初めて名古屋へ足を踏み入れた最初の日だったのです。それ以来私と庄内川との縁は深まり、山あいの小さな村で生まれ川原で遊び川で泳ぎ育った私は川が大好きです。一人名古屋に住んで悲しい事やつらい事、そしてうれしい時にも庄内川の川岸に座り込み、歌を口ずさみながら私一人の憩の場とし、時々鼻をさすようないやな臭いも町を流れる川としては仕方のない事だと思っており、知らないうちに臭いのにもなれ、庄内川の汚ない事など忘れてしまっていました。その間何年かが過ぎ去り、人並に結婚して庄内川にはさまれた所に住む様になって私はあらためて川の汚なさを感じました。それと反対に名古屋で生まれ育った夫は、私の田舎の川のきれいさ、水の冷たさに誘われて、その頃から渓流釣りを楽しむ様になりました。いえ、楽しむと言うより半分とりつかれて行ったと言う方が正しいかもしれません。なぜって毎日毎日話すことと言えば「どこどこの川へ行けばあまごが百匹つれる」とか「鮎がよくかかる川がある」という事ばかり。それだけでなく土曜日には、仕事から帰ると食事もそこそこに、三時間も車で走り、自分の釣りたい所に車を止めて、やっと空がしらみかける頃にはもう竿をふっています。川には氷がはり道路は凍結している様な寒い冬であれ、時には夏の雷や嵐の日でも川に居ればごきげんで魚など釣れなくてもいいのです。普通の人ではつきあいきれないと思います。妻であ

る私でさえがまんできないのですから。たとえば昼時に食事をしようと思って誘ってみても、それから三時間位は何も食べようともしないで釣りに無中。

そんなある日「庄内川で鮎が釣れるといいのになあ。」と夫の声、そして「昔は鮎も釣れたし泳ぐ事だってできた。」とまわりの声、「それじゃもう一度鮎が住めるようにしたらどうだ。」といつも一緒に釣りに行く人たちがコーヒーを飲みながら話している。でも私はきれいな庄内川を知らない。だから庄内川がきれいになるなんて、又鮎が住めるようになるなんて夢だと思いました。それに誰がきれいにするだろうとも思いました。まさか夫が先に立つはずもないし、口先だけではきれいになるはずもない。そんな私の気持をよそに夫は向いの旦那さんと毎日話し合っていたのです。話がはずむと家に帰って来るのはいつも午前様、子供のいない我家では私ひとりですから川をきれいにすることなど早くやめてしまえばいいとどれほど思ったかしれません。しかし話は進んで行くばかり。いつの間にか呼びかけ人も十人を越える様になり、第一回目の会合が開かれることとなりました。住民運動としてはめずらしいとのことで、毎日新聞社は庄内川シリーズを書いたあとだと言う事もあってさっそく新聞にのせるべく記者が訪ずれるというので、私も新聞にのせてもらえるかなと思い会合に出席しました。男の人も女の人も私の思って居たより大勢いたのにはおどろきました。こんなに沢山の人が川をきれいにしようと思っているとは考えていなかったのです。良い事だと思っていても自分ひとりでは恥かしくて何もできない私ですが、近所の奥さんの顔ぶれを見て心強く思い何でもよいから私にできる事があったら少しでも協力しようと心に決めました。翌日の朝刊にやはり私の顔ものり親しい友人からの電話で力強くはげまされたのも私がきれいにする会に足を踏み入れた一つの理由でもありました。いったん心にきめたものの仕事かり帰って食事もしないできれいにする会の方へ行ってしまう夫を見ると、私を無視したことにあらためて腹だたしく思い、再びこんな会などない方がいいと少々ヒステリックに迷いを持つ私です。

2. 夫（事務局長）の手助けをするなかから

さて第一回目の会合で、きれいにする会は庄内川の第二シリーズを足で書こうと言うことになり、まず沿岸に看板を立てることにしました。看板の標語は毎日新聞からおかりして、「川の汚れは心の汚れ。」と書き、これをきれいにする会のモットウとしたのです。

さあ、看板造りがはじまり、仕事上、のこぎりやスコップなどお手のものの夫が先になり、一生懸命やっている姿を見ると、五分でも十分でも早く終る様に、釘一本でも手伝って打つ私。夫にしてみれば邪魔だったかもしれません。こうして看板を造る一方会の人達は建設省や土木局へ足を運んで、看板を立てる場所の許可を求めていたのです。本当なら市や県が看板を立てればいいのに、と思いを裏腹に、川岸に立てられた看板は私が立てたのだと自己満足をしたものです。「看板を造る費用のたしにして下さい。」と自分の小使を送ってくれた子がいました。大人でもなかなかできない事なのに、まだ年はもいかない子供がこんなに川をきれいにしようと努力していると思うと、頭の下がる思いがしました。会ではさっそく名前のわからない子の看板を一枚立てました。それには「君の看板だよ。」と記したのです。きっと自分の看板を見て、どこかで私たちを応援し、自らも川をきれいにすることに心がけていてくれることでしょう。大変息の長い運動になる事を覚悟した御一同様は、その後連日会合が開かれ、会則を作り、会長を丹羽さんに決め、会計もその他の世話人、又支部も決まり、夫は事務局長をおうせつかりました。事務というものに経験のない夫がどうするのかと、私の方が不安でいつもよけいな事ばかり言ってどなられたり、又学校時代の不勉強さを共にくやみ、なぐさめあい、その頃から近所の人に呼びかけのビラ作成には、一緒に文章を考え、昼間夫が仕事に行っているうちにガリ版でビラを刷りあげ夜に配って歩き、又市場で出合った奥さん達に、「川を汚すのは工場排水だけでなく、私達一人一人が汚しているのだ。」と会の主旨を話し、会員としての参加を求めました。いつしか会員は百人を越える様になり、私たち（夫と私）の仕事も益々増えて行きました。時々新聞などを見てはげましの手紙がとどくと、事務処理につかれた私たちも元気がでました。手紙の主は遠くは奈良県の方までいました。近くの人にはお会いする為、夫と阿部さんと二人で毎晩のように訪問を続け、会員は増えるばかりです。でも近所の人の中には、「何にとぼけているのかしらないが、長つづきするはずはないし、川をきれいにしようとすれば、日本の企業がつぶれてしまう。」と色々批判する人もいました。

3. 「喰えない魚つり大会」を開いて

そんな中で市民の目を川に向けさせようと、庄内川での釣り大会を企画しましたが、どうすればよいのかととまどう事ばかり。私はどんな種類の魚が釣れるのか知りませんでしたが、水分橋付近の魚を釣って食べる人はいないと言う事から「喰えない魚つり大会」としてビラを刷り、近所の子供に手渡すと、おもしろい様に広がりました。それで釣り大会には子供の参加が多いだろうと思い、会費は無料としました。さあそうなりますと賞品集めが大変で、行きつけの釣道具屋さんから竿やリール、仕掛などを寄付して頂いたり、あっちの友達こっちの親戚から、山と積まれた物品を前に、さもうれしそうな夫の顔を見て、私も胸がはずむ思いでした。初めての催しに当日水分橋付近の参加者は見物人を入れて五百人を越える人の集まりを想像できたでしょうか。

受付を始めた時、すでに釣り始めていた子供に「何時に来たの。」と聞くと「朝四時から来た」と答える子供がたくさんいました。遅くに来た子供は、あんなに広い川原でも釣り場を失う位です。何時間釣れなくてもあきることなく釣りを楽しむ子供たち。何事にもあきっぽい現代っ子達も川で釣りを楽しむことにはあきることを知らない様です。見物していた父母もこの子等の為にも川はきれいでなくてはならないと考えた事でしょう。

さて審査の時、あまごや鮎や岩魚しか知らない私はコイなのかフナなのか、又ナマズなのかライギョなのか、さっぱり見分けがつかず、釣って来た子供達に、「これは何て魚？」といちいち聞いていました。中にはカメを釣って来た子、又おたまじゃくしを釣って来た子、庄内川とはふしぎな川である。ただ気に入らないのは、釣り場の臭いにおいと、奇形の魚が釣れることです。においと言えば水分橋に一日中立っていたとしたら、頭が痛くなりそう。こうした行事に各方面の注意や御協力が有り釣り大会に病人やけが人が出てはいけないので看護学校の生徒さんにも協力して頂きました。おかげで大きなけがや病人も出ないうちに、第一回喰えない魚釣り大会は、大盛況におわりました。釣り大会が終ってからは庄内川のあちこちに釣り糸をたれる人が増えてきました。そして矢田川でも釣り大会をという市民の声が多いので第二回喰えない魚親子釣り大会を矢田川と香流川で行なう事にしました。ここでは庄内川に見られなかった事ですが、金魚が釣れるのです。これら第一回、第二回ともに喰えない魚の釣り大会を行ない考えた事は、漁業権のある水分橋上流ではどんな魚が釣れ、又釣った魚を食べる人がいるだろうか？　ということです。考えるよりはやってみる。それで第三回も行なう事に成りました。場所は松川橋付近、さいわい国際婦人年でもあったので女子選手権争奪戦を企画し、余興として宝さがしを行ないました。私も初めて庄内川の釣りを楽しむ事にし、夫の竿を持って近所の子供たちと共に川へ走り、仕掛もえさも子供達に教えてもらいました。中にはたびたび顔を合わせる子供が、ふしぎそうに「今日はおばさんも釣るのか」と一声、私も負けずに「大物賞一位を取るからね。」とやりかえす。糸をたれてじっとうきを見ていると、頭の中はからっぽ。この時かりは、子供と一緒に遊ぶ楽しさを初めて感じ、夫が釣りに無中になる気持がほんのチョットわかる様な気がしました。でも婦人の参加は少なく、その日釣り大会に花をそえてくれたのは、政府代表として国際婦人年メキシコ大会に出席した、名古屋でただ一人の婦人議員である田中美智子さんが、名古屋の母なる川庄内川に釣り糸をたれていたことです。この釣り大会で国会議員である彼女は、何を考えこれからの国会でどんな事をしてくれるのでしょう。本当は一人でも多くの議員が、現場に立つべきではないでしょうか。今にして政治家も行政も真剣に死の川に取り組まねばと田中さんに期待しながら腹だたしく思います。それはさておき、婦人が参加しているので賞品はお米やシーツ、さつまいも、雨カッパ、その他家庭的なものがたくさんそろい、釣り具のメーカーもこの釣りブームにびっくりして集まった賞品は数えきれませんでした。私もその中の一つ、クーラーを頂きました。というのも小さなフナを一匹釣っただけで大物賞一位だったのです。その時のうれしかった事、今でも忘れられません。子供達にしても私と同じ気持にひたっていたのではないでしょうか。

4. きれいな川になるまでは……

それで会では、子供達にこれら三回行なった釣り大会の感想文を募りました。一つにはあまり書く事のなくなった現代っ子に書くことの練習にもなると思ったのです。寄せられた作文はたくさんあり、中には釣りの好きな父を克明に観察し、父子共に楽しんでいる様子がよくわかる作文、又川の汚れる原因を強くさぐろうとしている作文、私たち会員に考えさせるものばかりでした。

先にふれませんでしたが、十才から十七才までを準会員としてありました。こ

の時を堺に数が一段と増え準会員はいつしか百人を越える様になりました。そうなると、会員でも知らない顔ばかり。そこで目じるしとアッピールにとバッジ作成を計画し、デザインは日本福祉大の土方先生にお願いしました。先生は「川をきれいにする事は、汚した者の義務です。」と気持よく引き受けて下さいました。あの丸々とふとって帽子をかぶっているデザインを見た時、「かわいいなあ」と思いました。一流大学の教授である土方先生のデザインのお礼に、夫はできあがったバッジを五個おいてきただけだと言うのです。各新聞社が競って招介報道されますと、老若男女を問わず手紙が殺到しました。毎日二十通も三十通も来るのです。川をきれいにすることに同意してくれ、入会したいと言う人、きれいだった頃の思い出、又一日も早くきれいな川にしてほしいと言う子供の願やはげましなど数かぞえられませんでした。私は毎日一通一通の手紙に返事を書き加え、川を見守って頂く様にバッジを送りました。中にはふしぎな手紙もありました。きっとテレビの見すぎなのでしょう。表書きに「バッジプレゼント係」とあるのです。「我会のバッジはプレゼントではありません。」と私は書いてバッジを送りました。又封書の書き方を知らない子供もいました。裏に自分の住所氏名がないのです。さいわい中に返信用の封筒を入れてあるので、それを見て誰なのかわかるだけです。学校では今封書の書き方を教えないのでしょうか。それから一人でいくつもほしいと言う欲張り子供、二十人もの友達がほしいと頼むので僕その代表と申し入れる子、でも私たちはその子に一つしか送りませび。他の子は自分で意志表示をし、積極的に取り組んでほしいと思うからです。誰かに頼らなくては、生きて行けない子では、頼るすべを失った時、自殺に走ってしまうのではないでしょうか。私はバッジを胸に誇り高い準会員である以上、自殺をしなければならないような子であってほしくない。準会員は大人をも動かす大きな力と将来を持っているのですから。と言うのも彼らは学校の休みを利用して、庄内川の清掃を行なうと申し入れてきました。その日ばかりは彼らが主役、私たち大人は喜んでその手だすけをするだけです。

それよりももっと考えさせられるのは、幼稚園からの申し入れです。準会員は十才からとしてありますので、しいて言えば準々会員と言うべきかもしれません。幼稚園の子供達の夢それは「きれいな川で遊びたい。」「きれいな川で笹舟を流したい。」「イカダを作って海んで行きたい。」「きれいな川できれいな石を見つけたい。」いつかこの子等の夢が夢でなく、きれいな川になるまで私たちは運動を続けなければならないと思います。

先日も夫の友達がこう言うのです。「川をきれいにする事はいい事だよ。でもなんでおまえがやるのだ。」と、彼は子供たちの必死の願いを知らないのです。しかし私たちは手紙によって子供たちの切なる願いを知っている。本当に涙の出る様なはげましの手紙を一度彼に見せてあげたいと思う。今の私は縁の下の力持ちでもいい。夫の下働きでもいい。この運動にあるだけの力をぶつけていこうと思っています。どんなにくたびれてもやめるにやめられない気がします。川がきれいになるまでは。

会長として

丹羽秀義

清張通史では日本歴史の流れを川の流に置きかえ、わかりやすく説明されています。それは私達に身近でなじ味深く理解しやすいからです。川には川それぞれに顔を持ち、性格あり、感情さえ覚ます。松本先生は、出てくる岐阜県土岐川を庄内川の上流だからと現地も見ずに小説の中で「清冽な川」と紹介して読者から「陶土のため真白に、にごった白い汚れた川」と誤りを指摘され、当代随一の作家をして一生の大失敗となげかしています。上流を土岐川、中流を玉野川と呼び、名古屋市八区と春日井市を流れる庄内川を下流と云う。

さて、沿岸に王子製紙があり、川の中の給水塔四本より毎日二十万トンの水を取り、その排水は悪臭をはなち、ヘドロで黒く汚れ、白い汚れと競合い、やせ衰え見る影もない姿にたまりかねた住民は、「矢田川をきれいにする会」を作った。運動の第一を「県市民にいかに川を見せ、川の実態を知ってもらうか」におき、「人類永遠のために水をより大切に…」と、息の長い道のりが始まった。数多い会員の中に色さまざまのエピソードが生れ、ドラマとなって行く。その一例に毎日顔を合せていると、気まりが悪くて云えないことも紙面なら失礼して書けそうですので、宮田夫妻にふれることにします。

親子ほどの年令差に無礼を前もってことわって置きます。君は庄内川に張り付いた小さな家に生れ、名古屋一大きな川の庭を遊び場にして、数多い楽しい思出と最もよい妻をもつ幸せ者だ。しかし、心ない政治行政と企業で汚れ痩せおとろえた庄内川を毎日見て見ぬふりはなかろうとけしかけた私と共に「川の汚れは心の汚れ」を柱に一生を楽しく、明るく笑い合うため、ユニークな運動で「次代の

青少年えきれいな川、暖い社会を」と隣近所に辻で喋り、あらゆる集りで二人は手をふり、足をふんばった。声をからした訴えに何かたくらんでいる物好きで〝変り者よ〟と人の声を背に、公徳心低下をなげかれる現代の良識ある人々に私達の声は大きく広がって行き、「川の汚れは心の汚れ」と書いた看板五十本が矢田庄内川に堀川と立ちならんだ。

見すてられ汚れた川を救うには一般大衆の目と足を川に集め、大人も子供も一諸に遊びの中で楽しい思い出を残し、公徳心を高めるにありと、「食べられない魚釣り大会」を企画発表した。各報道陣は大々的に取上げ、これに力を得た会員一同は精力的に三回行うに及び、県内外よりの関心はいやが上にも高まり、たくさんな問合せ激励は、電話で、手紙でと大反響を呼び、会員一同てんやわんや。これに平行して宮田夫妻の口げんかも盛んになる。夫婦けんかは犬も食はぬと、たかをくくったものの少々気になるが、そんな頃子供にも大人にも、したしまれ可愛がられるユウモラスで誇り高きシンボルマークのバッチ作成を企画した。デザインは日本福祉大土方教授の心より御協力で愛くるしくよく肥た鯛やきを思い起させる絶妙なバッチが出来上った。幼稚園から大学迄、家族ぐるみに職場にと一人一人の胸に誇り高きシンボルマークが付いて行く。それに追打ちを掛るかのように「泳げ鯛やきの歌声」風を呼びバッチブームとなり、五月九日母の日には母なる庄内川へバッチで大行進が行はれます。宮田夫妻の口げんかもこのところ益々盛んだ。だがさも楽しんでいるかのように見受ける。私の頭の中を楽しく明るく笑いとユニークな運動の言葉が横切りなんだかうれしくなる。この道を歩んだ者だけが知る喜び、今となって宮田君はもとより夫人も同じ思いでしょう。

古来、〝国を治める者川を治め水を治めるにあり〟といわれていますが、口では「水はきれいでなくてはならない」という。しかし心のどっかに政治家も、国民も、経済発展と生活向上の為には少々汚れても仕方がないといいながら、自分が飲む水は神代の水をもとめるでしょう。川の水が法律で基準がきまる。それ以内で生きられない動植物は地球上からさも人類の末路をまつ如く姿を消して行く。川の息ずかいを肌で感ずる沿岸住民は、淋しく、やるせないものです。自分達で汚した堀川を木曽川の水を引いてきれいにすると行政は云う。名古屋のどまん中に、これも自分達の手で汚した庄内川を見すててどのつらさげて木曽川の水でもないでしょう。先ず足もとから、自分の庭からきれいにすることだ。

にくまれ口はこのへんで、やる気になればやれると云うことです。名古屋市は去年十二月三十日より今年一月四日、わずか六日間とわいえ、庄内川の水が堀川に導入しました。このことは、ただ堀川をきれいにすると云うだけでなく地理的にも歴史的にもごくあたり前でこれこそ、自然の姿と会員一同子供のように喜び明けましておめでとうと正月早々兄弟の川、血のつながり堀川作戦と銘打って堀川沿岸住民の皆さんに先づ足もとからと元気に呼掛けました。私達の長い長い道の向の喜びを楽しく明るく笑いとユニークな運動で政治も行政も住民も一つになって進むことを心から願って筆を置きます。

庄内川の喰えない魚つり大会に参加して

竹　内　雅　彦

ぼくの父は、この魚つり大会参加に備えて、前日から準備などで、おちつかないようだ。

当日は、四時頃に、ぼくを起こしに来た。ちょっと、ねむたかったが、梅雨の休日か、朝からよく晴れて、魚つりには、絶好の目和だ。父が、

「さあ、行くぞ。一番早いかな。」

と言って、出かけた。が、もうとっくに、人は、来ていた。それで、すぐに、受け付けをすませ、場所を選んだ。庄内川には、人・人・人。こんなに、人の集まった事は、いままでに、ぼくは見たことがない。

すると、父が、突然

「大きいぞ。」

と、大声で、さけんだので、ぼくは、思わず「やった。」

と、父の方へ走った。見ると、ほんとうに、竿が、弓のようにまがって、魚が、あばれているのがわかった。隣のおじさんが、

「おお、鯉ではないか？」

と、言い、二人で必死になって、つり上げた。父も、うれしそうだった。しかし、やっぱり、こんな大きな鯉が、食べられないとは、とっても、残念だと思う。

父の魚は、大物一等賞で、トロフィーを、もらった。とっても、うれしそうであり、得意そうでもあった。こんな楽しい遊びは、今までにあっただろうか。ぼくたちが、川の中で、こんなに、魚といっしょになって遊ぶことができるこの会を作ってくださったおじさんたちに感謝し、川がきれいになるように、みんなで協力し、全国の人が、自由に、海や川の魚を、とり、食べることが出来るように

していきたい。

おじさんたちもがんばってください。

ぼくたちも、いつでも、協力します。

矢田・庄内川をきれいにする会

名古屋市守山区瀬古川西270（TEL）793－0677

会　　則

第1章　総則及び目的

第1条（名称）この会は、矢田・庄内川をきれいにする会（略称きれいにする会）と呼ぶ。

第2条（目的）この会は、庄内川水系を汚す、すべての汚染源に対し、きれいで快適な生活環境をとり戻し、次代へ引きつぐ事を目的とする。

第3条（会員）会の目的、会則、運動方針に賛成する者はだれでも会員になれる。（ただし、十才から十七才までは準会員とする。）

第2章　機関及びその役割

第4条（総会）総会は必要に応じて開催し会の基本方針、規約改正などを決定する。

第5条（世話人会）会は、各支部の世話人に依って世話人会をつくり、会全体の運営を行う。

第6条（支部世話人会）会は地区ごとに支部をつくり、支部世話人会によりそれを運営する。

第7条（役員）世話人会の互選により、会の代表、会計、事務局を決め、日常の運営に必要な諸事項を処理する。

第3章　財　　政

第8条　この会の経費は、会費および、寄付金、その他の収入によってまかない、会費は個人一カ月一口百円以上とする（ただし準会員は、会費を必要としない。）

第4章　附　　則

第9条　この会則を運営するに必要な規定（内規）は各世話人会の協議を経て別に制定改廃する。

第10条　この会則は、1975年、5月24日から実施する。

以　上。

☆　入会申込書　☆

私は、本会の主旨に賛同し、　　口　　月分、金　　円をそえて入金を申しこみます。

昭和　　年　　月　　日

氏　名

住　所

（TEL）

矢田・庄内川をきれいにする会　殿

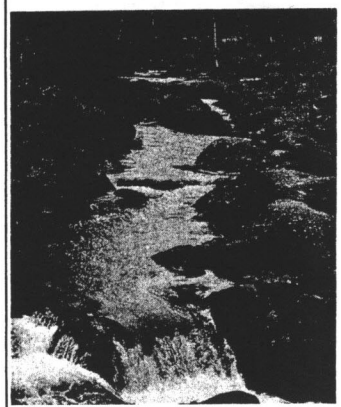
清流青湖

稲葉修

19号　JULY. 1976

天は語らず水をして語らしむ

社団法人 全国川とみずうみをきれいにする会　発行



イワナ（サケ科）

イワナ

分布　日本在来種の陸封性サケマスの一種。津軽半島以西、鳥取県日野川以東の日本海側と久慈川以西紀伊半島熊野川以東の太平洋側及び兵庫県千種川に分布し、いずれも川の最上流に生息する。

生活　魚類の生息の場としては、水量の少ないもっとも厳しいところに住んでいる。水温は13～15°Cが分布の下限で、水生昆虫や小魚などを摂餌するが、成長するとヘビや鳥類までも捕食するといわれる。産卵は秋で紅葉期と一致する。同族のヤマメはこのイワナより下流に生息する。

水質　きれいな水を好み、水質基準では水産1級類型Cで，BOD 2 ppm以下、SS 25 ppm 以下、DO 7.5 ppm 以上とされている。

ヤマメ

コイ（コイ科）

コイ

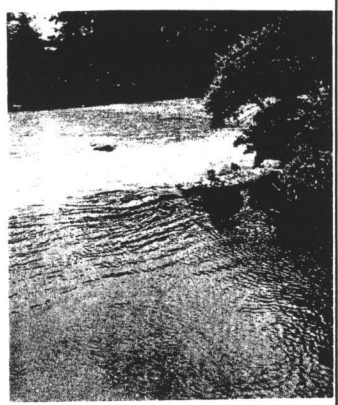
分布　わが国ではほぼ全国の湖池、沼さらに河川の中流域下部から下流域に生息している。

生活　池沼ではほぼ全面、中流域の川では大型の渕、湖では沿岸部に生息する。稚魚は水草の多く生えたところを好み、ユスリカ等を捕食しつつ生長し、成魚は底生動物と泥底の底生付着藻類やその分解物を常食とする。

産卵は関東以西で4月～5月、東北、北海道では1～2カ月おそくなる。適水温は22～28°C。フナとともに古くから食用にされている。

フナ

水質　環境基準では水産3級類型C（湖沼ではB）で、BOD 5 ppm 以下、SS 50 ppm 以下、DO 2 ppm 以上とされている。



食えない魚釣り大会！

名古屋・矢田庄内川の浄化運動

飯室勝彦

◆「矢田川・庄内川をきれいにする会」の発足

「もう黙っちゃいられない」と、名古屋市北部の住民が、目の前を流れる汚染川にたまりかね、〝矢田・庄内川をきれいにする会〟を結成した。それから二年、運動の輪は全市に広がり、県外にも及び出した。――侵され、汚され、まるで排水路と化した都市河川を市民はすっかり見放してしまった。汚染は加速度的に進む。子供のころ川で泳ぎを覚え、魚をとった経験のある住民にとって、汚れる一方の川を見るのは、たまらなくつらい。そこから「昔の川に戻し、次の世代に引き継ぐのは汚したおとなの責任」という問題意識が芽生え、「市民を川へ連れ戻そう」という方法論が生れた。市民に、自分達が見限った川をじっくり眺めさせ、危機的状況を認識させれば道は開けるはず、と考えたからだ。キャッチフレーズは「川の汚れは心の汚れ」活動の柱は「食えない魚釣り大会」。肩ひじばらないユニークな運動に触発されて市民は川へ戻り始め、行政も会の存在を無視できなくなった。

◆　もう一度アユの獲れる川に

庄内川は岐阜県、愛知県のほぼ真ん中を斜めに突っきって伊勢湾に注ぐ。矢田川は愛知県瀬戸市に源を発し、名古屋市内で庄内川に合流する。かつては名古屋城のお堀に水を供給し、子供達にかっこうの遊び場を提供していた。手づかみでアユがとれたし、庄内川からお堀に水をひくトンネルを泳いでくぐり抜けた武勇伝は、がき大将の自慢のタネだった。

その川が、いまや昔日の面影はなく、白濁のヘドロ川と化している。上流のケイ砂工場や山砂利採取現場から廃土が流れ込む。家庭排水による汚れもひどい。おまけに下流では、製紙会社が特有のニオイのする濁った水を排出する。アユはとっくに姿を消し、釣れる魚も〝食えない魚〟ばかり。背骨が曲がったり、いやなニオイがついていたり……。市民は川へ近寄らなくなり、河川敷にできた公園で遊ぶ家族連れも、水遊びはしない。

たまにしか川をみない人は、それでもたいしてショックを受けないかも知れない。しかし、両河川の合流点近く、名古屋市北区米が瀬と守山区瀬古川西で、二つの川にはさまれて暮らし、毎日川を眺めている住民は別だった。「何とかしようじゃないか」と集まり、壁新聞をはり出したのが四十九年二月。その年の暮れには〝矢田・庄内川をきれいにする会〟として正式に旗あげした。

◆　住民を川に連れ戻した釣り大会

「おれ達だって汚しているんだ、まず原点から出発しなければ……」。〝ぬるま湯的〟の批判を一部から受けながら「川の汚れは心の汚れ」の看板を沿川のあちこちに立てて回った。自分たちで木ワクを作り、ブリキを打ちつける。共鳴した看板屋さんが実費で字を書く。「矢田川の水で産湯を使った」ことが自慢の若い土建屋さんのトラックに積み、日曜ごとに堤防の上を走った。一行の中には「食えない魚がいる川なんて初めて知った」という津軽育ちの青年も加わっていた。

新聞報道で知った市民から、激励の手紙が続々舞い込んだ。「私も小さいとき、よく川で遊んだ。参加したい」「ひまはないが、せめて費用の足しに……」。なかでも「お父さんの小さいときと同じように、早く僕も魚釣りをしたい」と千五百円を同封してきた子供の手紙に、会員の胸はつき動かされた。限られた地域の十数人の会員から、市内全域の百数十人に成長「よし釣り大会をしよう。食えない魚釣り大

会だ」と話がまとまるまでに、そう長くはかからなかった。

翌年六月二十九日、第一回大会の日はからりと晴れあがり、参加者は市内外から何と三百五十人。鼻をつく工場排水の二オイに顔をしかめ、水面下数センチしか見えない汚れぶりにマユをひそめながら「魚なんているのか」と半信半疑で釣り糸をたれた。

ところが、魚はいたのである。コイ、フナ、シラハエ、ナマズ、ライギョ……。どういうわけかカメも二匹釣れた。どれも臭くて食えない魚。鼻の欠けた奇形魚や腹部に穴のあいた魚もあって「汚れ川の証拠がありあり」という感じだった。盛況に気をよくした「きれいにする会」の人達は、両河川のあちこちで釣り大会を開き、川遊びへの市民の郷愁をかきたて、汚れ川への認識を深めていった。「賞品がなければさびしい」という声にこたえて釣り具屋さんが、サオや浮きを提供し、米屋さんが米を出し、ガソリンスタンドは「自動車オイル交換券」を作って持ち込む。だが、参加者は賞品目当てというより、釣りの楽しみを求めてくる人が圧倒的。その証拠に、回を重ねるごとに川のごみは少なくなり、「もっときれいな川がほしい」という声が高まっていった。大会がなくても、釣り糸をたれる人が増え、一時は食えない魚の釣りブームも生れた。

思わぬ収穫もあった。川の石が美しいことに気づいたのである。庭石のような大きなものはないが、赤や緑のきれいな石ころがいっぱい転がっている。拾い集めて展覧会を開いたところ反響を呼び、こんどは石拾いのために河原へおりる市民が多くなった。

◆ 運動の輪を広げたバッヂ作戦

釣り大会と石拾いとで、市民を川へ呼び戻すことに成功した会にも、ウイークポイントがあった。子供達である。もともと会の目的は「きれいな川を次の世代へ引き継ぐ」ことであり、規約にもそれをうたっている。会費無料の少年部も設けてある。しかし「川が汚なくなった」「昔はこうじゃなかった」とおとながそっぽを向いているうちに、子供も近寄らなくなった。都市河川を見慣れている彼らは、たまに写生した川に灰色や茶かっ色を塗る。「本当の川は美しいものだ」というおとなの話にも、けげんな顔をするばかり。それでは〝百聞は一見にしかず〟と映画会を企画した。

大学や市役所から、川のフィルムをかき集め会に賛同した地元銀行からは映写機を永久借り出しした。会員のなかには映写技師の有資格者がちゃんといた。土曜の夜ともなれば、映写機とフイルムをかついで公民館や集会場へ。白濁のヘドロ川しか知らない子供達は、画面に写し出される青い水、逆巻き、輝く満に感動し「ヘドロ川の原因は」と考え始めた。この試みは、まだ始まったばかりだが、会員たちはいずれ大きな効果を生む土壌になると信じている。事実、少年会員の一部に、自分達でプランをたて、川のごみ拾いをするグループが出てきた。

「気楽に、楽しみながら……」というのが会員の合言葉である。河川浄化は一朝一夕には無理。気ばらず、楽しみを混じえてやらなければ運動は永続きしない。食えない魚釣り大会の発想の根底には、こうした意識があるが、もっと端的に表れているのは〝バッヂ大作戦〟だ。

会員の大学教授がデザインした会のシンボルマークをバッヂにした。タイ焼き君のような可愛い魚が、野球帽をかぶっている図柄。子供は何でも集めるのが好きだが、とりわけバッヂは人気のマト。バッヂをつけている人が、つけていない人からその意味を聞かれれば、口コミで会の趣旨が広がる。だが「きれいにする会」ではもう一つひねって「おとな二百円、子供無料、親子ペアでつけよう」と呼びかけた。一個百円の製作費、子供の分をおとなの料金でまかなうことと、ペアでつければ自然におとなが子供に昔の川のことを話すにちがいない、というネライからだった。一人で申し込んでくる子供にはバッヂの目的と河川浄化の重要性を肉筆で書いた手紙とともに送った。

この作戦は当たり、これまでにさばけたバッヂがざっと三千個。子供らは帽子やシャツの胸へ誇らしげにつけて歩き、話のきっかけをつかもうと手土産がわりにバッヂを持ち歩くセールスマンもいる。

◆ 行政を動かした住民運動

「矢田・庄内川をきれいにする会」の本当の運動は、まだこれからである。まず市民に精神革命を迫り、それから市民の声で汚染源を包囲しようという遠回りの方法や、一見遊びのように見える活動にもの足りない人もいる。しかし、きれいな川の再現を求める市民の声は、着実に高まっている。ことしの春、河原で開かれた「庄内川まつり」には、七、八百人がバッヂをつけて参加、終了後、自発的にごみ拾いが始まった。ある幼稚園では、子供たちが節分の鬼に「川を汚す鬼」の仮面をつけさせ、豆まき役は「川の汚れは心の汚れ」と書いたタスキをかけた。

こうした動きは、公害行政を進める自治体にとって、時には圧力に、時には援軍になる。愛知県は、さる二月、良心的職員の仲立ちもあって、汚染物質分析のための魚をとってくれるよう「きれいにする会」に要請してきた。ささいなことだが、行政と住民運動がドッキングしたのは、かつてなかったことである。続いて、県は、庄内川へ汚染に弱いアユを放流した。「これまでのような雑魚では意味がない」という会員の声に押し切られたのである。公害行政が、この二万七千尾のうちの何尾を生き永らえさせることができるか。行政が自らに宿題を課した形になった。「上下流の住民の心をひとつに」という会の呼びかけに対し、汚染源地域の人達から反応も現れ、会と接触を始めた上流の自治体もある。「きれいにする会」では、いま看板百本を目ざしてはりきっているが、百本目は本山名古屋市長にツチを振るってもらう計画だという。忙しい市長がこれを承知するかどうかは、市の公害行政への熱意のバロメーターになりそうだ。

広がる輪に勇気づけられながら、会員たちはいま、「運動はしても、闘争はしない」と誓い合っている。汚染源の中心であるケイ砂などの窯業関連工場、陶磁器製造業は流域の重要産業であり、しかも零細企業が多い。過激な闘争は市民の反発を招き、問題解決を長びかせるだろう。「運動はするが、闘争はしない」というのは、ノンポリ市民のエネルギーを吸収し、持続させるための配慮である。

「矢田・庄内川をきれいにする会」事務局は、名古屋市守山区瀬古川西二七〇。（筆者は中日新聞社記者）

“川の汚れは心の汚れ”をスローガンに会員たちは看板100本をめざして奮闘している。（中日新聞社提供）

〝汚れ川、証拠を釣った〟釣り大会に参加した子供たちは、食えないながら釣果にごきげんだった。（中日新聞社提供）

美しい環境づくり活動事例集

第　一　集

昭和53年３月

愛　　知　　県

矢田・庄内川をきれいにする運動

矢田・庄内川をきれいにする会
会長　丹羽秀義

"川の汚れは心の汚れ"

「矢田・庄内川をきれいにする会」は、暖かい社会づくりをテーマに、次代の青少年にきれいな川を贈ろうとする趣旨に賛同する会員千余名の方々の御協力を得て、河川美化運動に取組んでいる団体であります。

中日新聞連載の清張通史では、日本の歴史を川の流れに置きかえてわかりやすく説明していますが、それは川が私達に身近かな存在であり、なじみ深く理解しやすいからです。その松本清張先生が、かって小説の中で、岐阜県土岐川を現地も見ずに、上流の山峡を流れる川だから清冽な川であると紹介し、読者から陶土に濁った白い川だと指摘される誤りをおかされたことがあります。

私達は、この運動を進めるに当たりまずこのあやまちを繰り返すまいと、自分達の足と目で川の実態を確かめることを運動の第一歩としました。

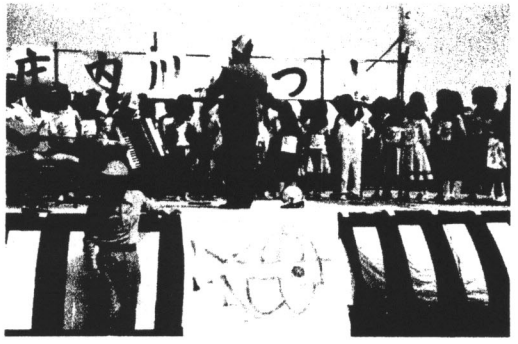
庄内川は岐阜県上流において小里、竹折、肥田、妻木、深沢の各支流を合わせて土岐川となり、県境定光寺あたりを通称玉野川と呼び、春日井市と名古屋市守山区の間を縫って庄内橋に向かい、ここで瀬戸を発した矢田川と合流し、名古屋市の西部を通り、新川と背中を接して名港にそそいでいます。

矢田・庄内川はかって流域住民の憩いの場として親しまれてきた川であり、児童にとっては遠足、写生大会、運動会など幾多の思い出をつくってくれる場所でした。しかし、戦後は高度経済成長の波に乗ってこの川の流域にも数多くの工場の進出をみ、工場排水による汚染で川は年を追って汚れていき、悪臭をはなち、ヘドロに黒ずんだみにくい川へと姿を変えていきました。

こうした姿にたまりかねた一部の流域住民が「矢田・庄内川をきれいにする会」を結成し流域住民に協力を呼びかけました。運動を始めたころは回りの人達から物好きな変り者とさげすみの目で見られ、その屈辱に耐える日々が続きました。しかし、現事務局長の宮田夫妻を中心とする会員の熱意は流域住民の心を動かし、"川の汚れは心の汚れ"と書いた看板が矢田川に、香流川に、庄内川に、地蔵川に、堀川にと次々と立てられ、その数は現在100余本を数えるに至っています。

こうした盛り上がりを一層高め、地域住民の目と足を川に集めるため“食べられない魚釣り大会”を企画しましたところ、意外に反響が大きく、各報道機関にも大々的に取り上げられて内外の関心はいやが上にも高まり、激励の電報や問い合わせの手紙が数多く寄せられました。

この間、日本福祉大学土方教授デザインによるシンボルマーク・バッチもでき上がり、５１年５月９日の母の日には、このバッチを胸にした児童生徒や大学生、母親、働く人達が庄内川をめざして大行進を行い、“矢田・庄内川をきれいにする会少年部”の手によるテーマソング川の歌の発表会が盛大にくり広げられました。



住民意識を盛り上げるための事業は多方面にわたって実施しており、青少年の作文募集、庄内川銘石展、鯉の放流大会と次々に新しい企画を実施にうつしています。

運動が進むに従って川は次第にきれいになり、宮田夫妻が５１年秋にアユの追跡調査をしたところ、庄内川にアユが立派に生息できることを確認し、名古屋女子大学広教授指導のもとに５２年春にはアユの救出作戦を実施し、“食べられない魚釣り大会”を“食べられるかも知れない魚釣り大会”にニュアンスを変え、試食会も行いました。こうした動きの中で釣場浄化を目ざした山彦釣クラブが誕生し、釣り人のマナー高揚に一役買っています。

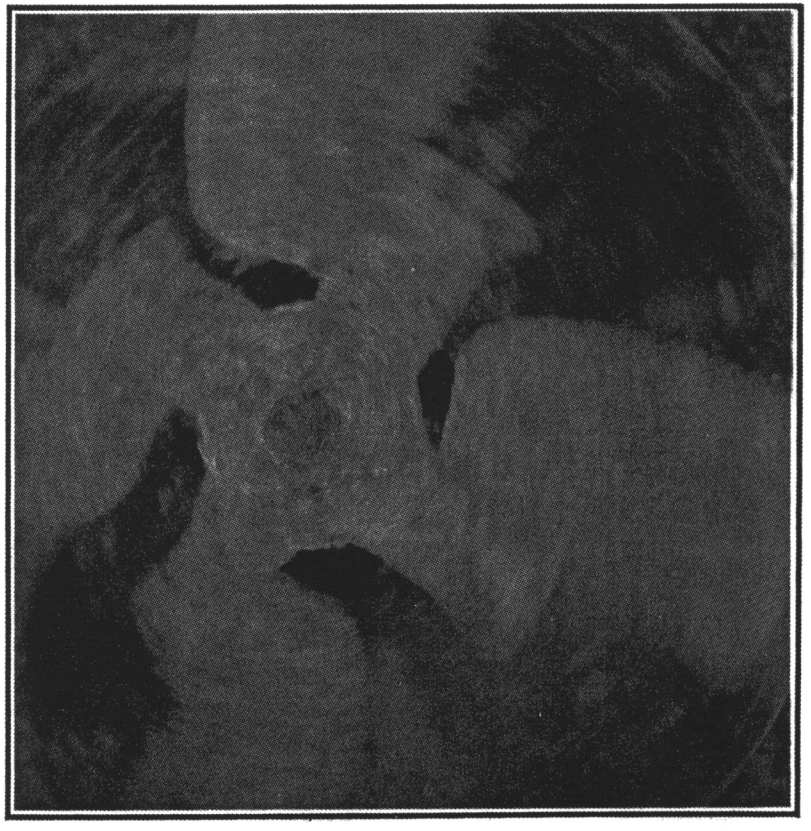
また、昨年の春桜の銀行を設立し、本年５月には住民の手で200本の桜を庄内川に植栽し、桜並木をつくることも計画しています。

このように矢田・庄内川をきれいにする運動は着々とその実を結び、流域住民の川への関心は年とともに高まっております。今後は住民と行政が手を握り、一体となって明るく楽しいユニークな運動に発展して行くことを心から願っております。

昭和53年６月15日発行　毎月１回15日発行　通巻第２号

環境と公害

1978
6
VOL. I NO. 2



住民運動

矢田・庄内川をきれいにする会

矢田、庄内川をきれいにする会は「次代のためのきれいな水と豊かな社会づくり」を目的とし、「明るく楽しく美しく」のテーマのもとに、名古屋市守山区瀬古川西、庄内川沿いの住宅街を中心として活動を続けている。

会の発足は昭和49年。5年前の下水処理場の建設と、7、8年前に騒がれた王子公害がその理由としてあげられる。住民はこれらの事件によって川への関心を強め、会の結成へと発展していった。子供の頃の想い出(川で遊んだこと、釣った魚を食べたこと)も、この運動を推めていく上に大きな力を占めていることだろう。

会員は約280名。10〜17才の準会員も含めると約1,100名にもなり、根をはった長続きする運動を目指して皆、自主的に活動している。テーマソングもあり、今までに配布された1個200円のかわいい魚のバッチは、5,000〜6,000個、目標は10,000個であるという。町で会う人の胸にそのバッチを見るのを楽しみにしているそうである。

「川の汚れは心の汚れ」という立て札を、2年間で100本立てて地元民に訴えている。100本目の立て札は市長の手によっており、現在はすでに修理の段階にはいっている。また、県境を越え、岐阜県側へも取り付けていく予定であり、すでに一部では自主的な人々により立てられているところもある。

また、会内には、"山びこクラブ"という釣クラブがある。情熱ある人々が自主的に結成したクラブであり、趣味と合わせて、運動を楽しく長続きさせようとするものである。釣に出かけると近所の人々にマイクで挨拶してから釣を始め、おわれば釣り場を借りたお礼に川掃除だけでなく、あたり一帯の清掃をし、集めたゴミをどうするかマイクを通して再び聞く。すると、あちこちから付近の人々が集まって来て気持ちよく片付けてくれる。このようなことを通じて他の土地の人々にも、運動の輪を広げていくことになる。

現在最も積極的に推し進めている活動として「あゆ救出作戦」がある。これは岐阜県の漁業組合と協力して、愛知県に対し、適切な自然保護及び蛋白資源の確保を行なうよう働きかけるものであり、会独自としては、「食べられないつり大会」「食べられるかもしれないつり大会」というユニークな企画をして会員にあゆの生息を知らせるとともに、独自に毎日調査を行なっている。

川へ関心を持たせるには、まず川に人を集め興味を持たせることが大切である。子供会などを通じて植樹、魚釣、写生会などの催しが行なわれれば、無理なく自然というもの、川というものについて考えることができるようになっていくであろう。特に子供の場合にはそういった影響が多大である。川はみんなのものであり、自分の近くの部分だけきれいであればよいというものでなく、直接関係ないからどうでもよいというものでもない。上流、下流、向こう岸、他県、他市を問わず、1本の川の流れである。川の美しさを取り戻し、愛し守り育てていくことは私たち世代の責務である。

一般に汚濁発生源については、企業責任が問われるが各家庭も無関心であってはならない。毎日の小さな関心が大きな問題へとつながっていく。例えば、水を大切にする。洗剤を過剰使用しないといったことである。洗剤の怖さを十分認識し適量使用すれば、洗剤使用量は20%節約でき、伊勢湾の赤潮防止の一端にもつながる。

企業だけが公害を出しているのではない。各々自分自身の行ないについても考え、責任を持つことが必要である。日本人は公共物を大切にする心が欠けていると言われている。自然を保護し、環境を保全していくというモラルを持つことが、公害防止につながっていく。またこのような問題は隣近所の話し合いから市民運動へと輪を広げていくべきであろう。

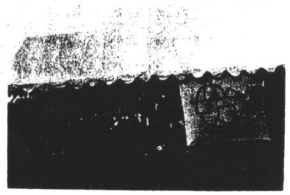
しかしいくら住民が頑張っても限度がある。住民と行政機関、川へ排出している事業所の管理者、一般市民が一体になり、川を美しくするため運動を進めていくことが本当の意味での改善につながっていく。そういった意味で、ひとりでも多くの人々の参加を求めているのである。

河川の汚濁が広く一般に叫ばれるようになってから、はや数年が経過したであろうか。しかし、組織だって浄化運動に取り組んでいるところは少ない。それは、このような運動は人々の善意によって地道に行なわれているのがほとんどだからであろう。この会が今後どのように発展していくかが楽しみである。

矢田・庄内川をきれいにする会

桜の植樹や食べられない釣大会

バッヂ7,000個売って資金に



5月14日、庄内川河畔の守山下水処理場付近で「矢田・庄内川をきれいにする会」主催の桜の植樹祭が開かれた。桜の銀行をつくって昨年から集めたお金や賛同者の寄付などで第1回として 115本が植えられた。植樹祭には本山政雄名古屋市長やこの会に賛同する守山の「ひまわり幼稚園」約 350名の園児たちが参加した。次の世代に美しい環境をということで子供が主役で、記念碑の除幕式も植樹も市長へのお願いもすべて子供中心で行われた。記念碑は方角がわかるようにと真北を向いて建てられている。

親子いっしょにこういう会に参加することで思い出にもなるし、毎年花が咲くごとにあたたかい心がよみがえり、そうしてきれいにした川を汚すこともなくなるだろうという。また山崎川が四季の道なら、ここは桜の名所にしたいと今後も植樹をつづけるそうだ。

「矢田・庄内川をきれいにする会」は48年から活動をはじめ、正式に結成したのは49年12月23日。役員は約30名、会員は愛知県各地、奈良、三重、岐阜にも散らばり、会長の丹羽秀義さん（67才）も知らないところで知らない間に増えているそうだ。現在正会員 260名準会員 780名。この会は川の美化を中心に、いろいろユニークな活動を続けている。おもしろいのは10才から会員になれることだ。会のモットーが「次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会を」であるから当然なのだが10才になれば善悪の判断もできるだろうと決めたのだそうだ。ただし17才までは準会員として会費はいらない。運動は明かるく楽しく美しく、いささかも暗さがあってはいけない無理せず、背のびせず、隣三軒両隣。これで運動はできる。そのうちのひとりがまたどこかで隣三軒両隣。これがひろがればいい。役所に補償を求める運動ではない。予算からはじめるものでもない。 200円の魚のバッチが売れれば100円が資金になる。この魚バッチは日本福祉大学の玉方康夫教授がデザインしてくれた。今までに7000個売れた。1万個売れたらみんなでバッチをつけて1万人集会を開くつもりだという。お金はかからないようにかからないようにやる。印刷もすべて手刷りのガリ版。運動を宣伝するのに一番いいのはマスコミ、新聞を利用すること。だからいかにマスコミを引っぱり出すかの学習会までするそうだ。会議は定例日を決めて（第2火曜夜7：00丹羽宅）お金がかかるから通知など一切出さない。会費111 100円も出さない人には催足もしない。すべて自発的で、もめ事も全くないそうだ。運動の過程で思いがけないところから反響があったり援助者があらわれたりする。

結成してから27回いろいろな行事をやったが雨に降られたことは一度もない。「わたしたちの心がけがいいんです。」まずやったことは庄内川・矢田川・堀川・地蔵川などに「川の汚れは心の汚れ」の立看板100本をたてた。100本目は名古屋市長がたててくれた。

この会には釣りクラブもある。少年部もある。みんなで釣りに出かけるとまずハンドマイクで地元の人に挨拶する。「みなさんおはようございます。わたしたちは名古屋の矢田庄内川をきれいにする会の者です。今日一日みなさんの大切な川で遊ばせてもらいます。」帰りにはあたりを掃除してまたお礼とゴミ捨場を教えてほしいと呼びかける。すると必ずこたえる人が、家の中やら畑の中やらからあらわれる。そうやって運動が拡がる。いっしょにいる子供たちも、そういうことを覚えていく。丹羽さんは事あるごとにハンドマイクをもって呼びかける。51年1月4日には堀川へ出かけていって宣伝カーで訴えた。「堀川と庄内川は縁の深い姉妹の川です。堀川によって発展した名古屋の町がその堀川を汚しているのは恥です。川を生きかえらせましょう」

庄内川の調査を3年がかりでずっと続けている。庄内川で4回食べられない釣り大会をやった。5回目には鮎がのぼってくるのをつきとめた。そこで食べられるかもしれない釣り大会にした。おそるおそる河原でバーベキューして試食した。どうもやはり気味わるかったそうだ。今年は鮎がのぼってこない。王子製紙の廃水の温度がだいぶ高くなっているのが原因だそうだ。

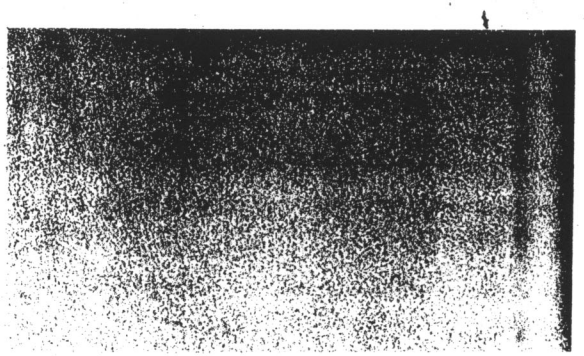
住民運動が住民エゴにならないように、常識ではなく良識をもってやろうという。子供たちが大きくなったとき、社会人としてのほこりと、務めをいかに果たすかが主眼であるから、結果を見ることはできない。そういう社会になって運動が自然に消えるまで続けなければならない。「黒川をきれいにする会」などともタイアップして、楽にいつまでも地道な活動をつづけようという。

第630号　昭和39年7月13日第三種郵便物認可
中部建築ジャーナル　昭和53年5月30日（月一回・30日発行）第三種郵便物

名古屋市水総合管理計画策定のための

市民論文集

―― 明日の名古屋の水を考える ――



名古屋市の水に関する問題について

緑区神ノ倉
小川　博

水の問題は一つ名古屋市ばかりの問題ではないが、水と云うことを考えに入れないで生活して来た今までの私等の生活が、高い水道料金を支払う段になって、初めて、今更の様におどろいている現状である。

原始の生活を考えると、古い神社（神様）は、ほとんどが、水の豊富な、流れに沿った場所にお祭されている場合が多いのである。即ち、水は神様だったのである。動植物の身体は重量の大部分が水であると聞いている。水がないと生きては居られない。こんなことは誰でも知っていることで、たくさん出版される今日の書籍を見ても皆書いてあるから、めずらしくもないし、皆知っているはずである。

ところが、どうだろう。仮令て見れば、メッキの工場の様な化学的或は物理的な汚物をたくさん出す可能性のある工場などは、それは水を多量に使用すると云うこともあろうが、大体、今迄は、河の岸に工場が建てられている場合が多いのである。これは取りも直さず、「汚物は川へ垂れ流すもの」と云う、前時代的名残なのである。少し前の時代は「三尺流れて水清し」と云う、迷信を皆が本当に信じていたのである。汚物や塵は河へ流すものと本気でそう思い込んで居たのである。犬の死骸も猫の死骸も皆そうだったのである。

考えて見ると、現在、煙草を吸う人々が、吸殻を何の気もなしに「吸ってはポイ」と路上と言わず、地下鉄道の線路の中へまでも、所かまわず投げ捨てる、あの感覚と一つも変わってはいないものなのである。

名古屋に住んでいるだけで、水に関する何も知らない、本当の素人の私が、水の資源がどうのこうのと云うことは、誤ちである様な気がする。すでに多くのその道の専門家が、水資源のことについては、日本国中の水資源をどの様に配分すべきか、そしてどうすれば適当かなどと、とうの昔から、よくよく考えて居られることだろうと私は信じている。又それが国の行政施策だと深く信じているものである。がそれでも近くは福岡市の問題、前には東京都其の他の都市の水不足の問題と、種々大きい問題が、思わぬ時に発生するのが世の中なのかも知らないが、今更、やれ雨が降らなかったからとか、台風がどうのこうのと天候のせいにするのはおかしい問題である。「天災は忘れた頃に起るものである」とはけだし名言である。

昔から大都市と云うものは水資源の豊かな所に発達するものである。大阪市・東京都・京都市皆そうである。ある本に昔奈良は水が充分でなかったから京都へ移ったのだと読んだことがある。名古屋はどうだろうか。名古屋市ぐらい地図で見ても水にめぐまれている都市はない。四方を大きな川が巡ぐっていて、水不足など起りそうもない地形をしている。多分他地方の人が考えたら、名古屋が水不足だなんて、考えも及ばないことだろうと思うが、それが実際はもう十年も過ぎるとたしかに、水が不足することになると言う、おそろしい話である。名古屋も大きくなって、今の天白区附近に大きな建物が出来て人がたくさんになったら、市税はあがるかも知れないが水の問題、教育のこと等々考えたゞけでも大変な問題が山積している。そうなったらどこから、大切な水を持ってくるかである。

昔の様な白い川、白い街の時代ではないのである。国際都市名古屋なのである。「川の汚れは産業が盛んな象徴だ」などと考えていた時代はもうとうに過ぎた過去なのである。

水は有限である。「昔は湯水の様に」と云う言葉があった。浪費があたりまえの如き考えが頭の中にあったのである。これも昔の古い歴史なのである。

地下にある水は資源としてこれ以上汲み上げて使用することは出来ない。それをすれば伊勢湾台風以上のことが、地盤の沈下から発生するにきまっている。そして今建っている大きいコンクリートの建物でさえも、時間がたつにつれて段ちがいなどがおきて地下室の入口が一米降った、なんていう現象がおきないとも限らない。現に東京では困っているのである。

地下水にたよれない現状であれば、どうしても山の多い長野、岐阜、三重等の近県と親密な連絡を持って相たすけ合う以外の方法はないのである。それは政治である。国や県、郡村など考えなくてはならない点もあるけれども水に関する限りでは境はないのである。このどこからでも不足した水をもらって来られる体制を事前に取って置くことこそ政治の本道であると思うものである。

水はひくい処、ひくい処へと流れるものである。

あと考えさせられることは大金をかけて消毒し清れいにした大切な水を、おしげもなく便所へ流して、平気でいることである。風呂の水ならば洗濯用にも使用し得るが、便所の水だけは、たとえ一回の使用量が十八立とした処で、四人家族であれば一五〇立ぐらいは一日に使用するであろうと思う。これが、消毒した銭と手間のかかった水なのである。

中水を作ると云うことは、都市としては大変なことであろうが、将来来るべき時代を考えた時はどうしても、

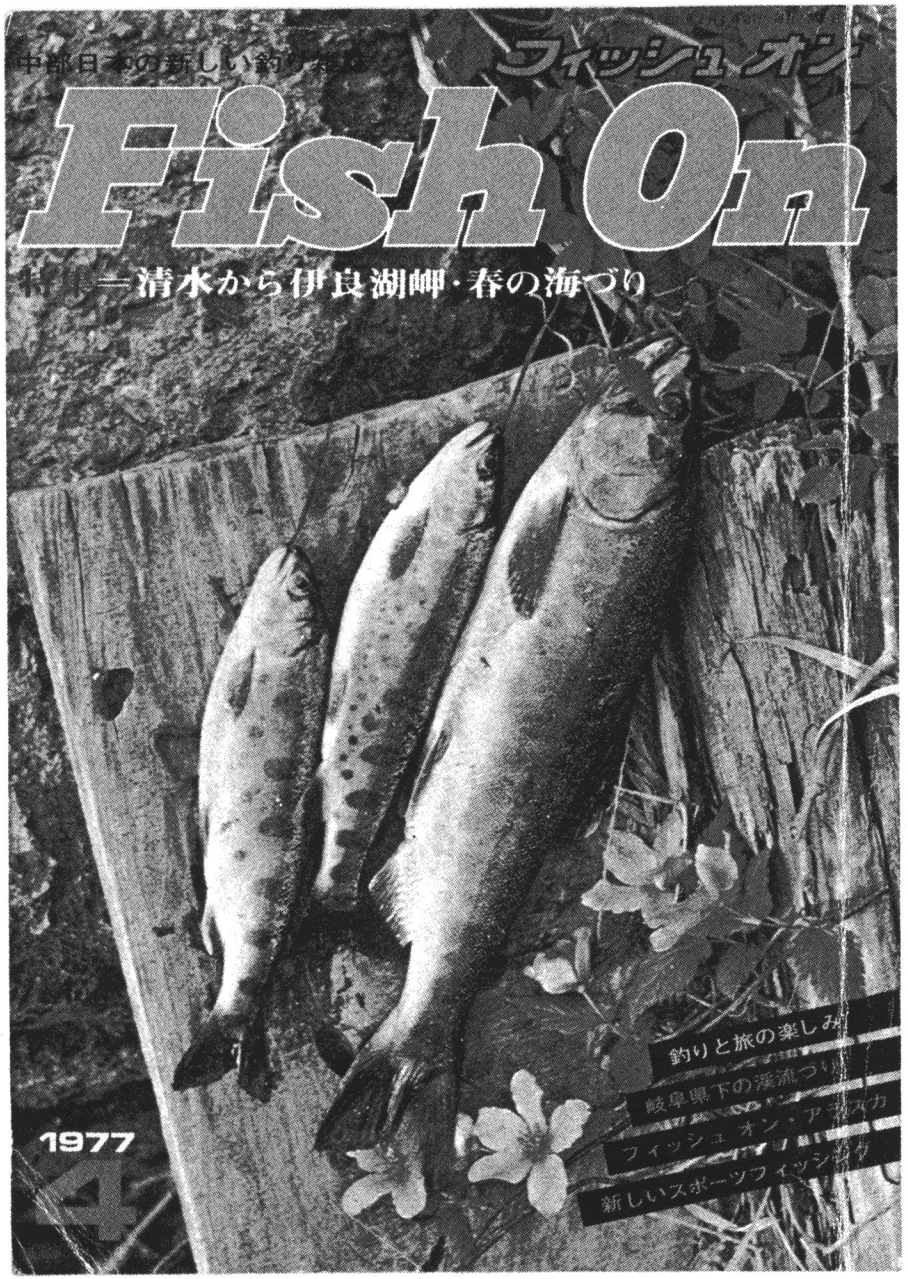
出来る所からでも着手して置きたいことである。

海の水は無限に近いものである。これをなんとか真水に近い化学的な施策をして、海水の浄化と共に陸水の一部に再使用する考えを、もう本格的に始めても良い時機に来ているものと思う。九州の一部で又はその他で、試験的にやったと云う話は聞いているがこれも、県一個の問題ではなく国全体の問題だと思っている。〉

またそれから私は良く見かけるが漏水の問題である。駅や公園などの水道にはたまたま漏水と云うか垂れ流しと云うか、もったいない場所が、たまたま見かけられます。市民からの通報をまっていずに、積極的に局員に見廻ってもらって、少しでも漏れた場所があれば修理してもらいたいものと思います。漏水は昼夜を分かたず、流れっぱなしですから、大きい問題だと考えています。

最後に大きな問題を書きます。市中の各河川は皆様のおかげで魚も住める様になってきたし、たしかに清くなってはきましたが、私の心配の第一は物理的な汚れは処理は目に見えるから簡単ですが、なんと云っても化学的な汚染は大変です。海の赤潮の原因は化学的に燐分が多くなったためだと聞いています。これは仲々市民一人一人の力だけでは、及ばないかも知れません。けれども皆んなが使用する合成洗剤が大きな影響をしていることはたしかな様です。昔の様に石鹸を使用すればよいのですが、鯨も魚も取れない現況では動植物の油脂で石鹸を作ったのでは、国民の皆んなが洗濯するには、間に合いませんでしょうし、費用も高くつくでしょうから、これも、化学者を動員して今の合成洗剤よりも、早く分解して生物に無害な或は害の少ない洗剤を作り出すことこそ急務ではないでしょうか。大学等で考えて下さい。

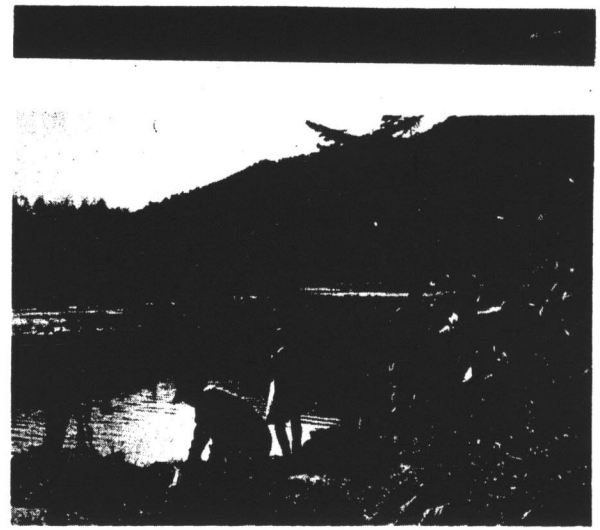
なお、先年春日井で折角誘致したあの製紙工場が、街の小工業所の小工場とちがって、工場内は見学させないし、上手に法を抜けて、昼夜かまわず、悪水と悪臭を所かまわず散らしていますことは、皆が知っている所です。隣の春日井市のことでは名古屋市ではどうにもならないのでしょうか。川はどこのものでもありません。川は人人のものです。資本家の勝手にするものではないと思います。庄内川や矢田川周辺の人達は、川へ入って遊んで生活したのでした。それが現在はどうです、子供らが川に入って遊ぶと親共は、「汚ないから遊んではならない」と止めます。害物を流す工場で働く人もいます。銭のために毒害をがまんして自分の健康をちぢめてまでも働いている人がたくさん働いていると思えば、かなしい悲しい世の中と思います。どうか、清れいな川、川に入って遊べる川を我々のものにしたいと願うものです。



”川の汚れは心の汚れ”

「矢田・庄内川をきれいにする会」の河川浄化住民運動

近藤爽風



名張川の清掃風景（大各山下て）

昭和51年5月9日日曜日。私は、名古屋の北西部を汚濁して流れる庄内川の、新川中橋の右岸に張られたテントの下で、陶然として魚釣り大会の世話役をしていました「矢田・庄内川をきれいにする会」が開催した。第一回庄内川祭り、バッヂで大行進とおおらかに謳った「食べられない魚釣り大会」の当日なのです。かたわらの、これも前日に急造仮設された板張りの舞台では、「河川の浄化運動を次代へと引き継いでくれる」準会員の子供達が、名東区西山青年会の男女諸君の奏でる楽器の調べに乗って、元気良くテーマソング「川の歌」の発表会を行っていました。また一方では、会員の方達が率先して買って出た売店も設けられて、すし、パン、ジュース、コーラなどが眼やかにくばられていました。

川岸の樹々や、草叢の青葉に降りそそぐ陽光は、大都市特有の薄いベールに包まれてはいましたが、ほとんど風の無い、真快な釣り日和と言えました。釣具のメーカーや近所の釣具店、それに有志の方達から挙って寄贈された数々の賞品の山積み。早朝から詰めかけた参加者に渡した審査券の枚数も軽く二百枚は突破していたでしょう。ともあれ、婦女子や親子連れといった参加が非常に多く、和気あいあいとした雰囲気が、いやが上にも大会気分を盛り上げていました。

社会の高度成長の煽りをこうむって、浸され汚され、まるで排水路のようにヘドロ化してしまった矢田川と庄内川を綺麗で、しかも快適な昔日の清流に取り戻そうと尽力する、そうした意義のある住民運動の一端にはじめて手を差しのべ、釣り魚の審査員として参加させて頂いていた私は、その感動と昂奮にしばらくはどうしようもなく酔いしれていたのでした。

やがて午後一時になりました。いよいよ審査の時間です。来ました、来ました。私達の子供時代には、到底考えられもしなかった一人前気取りの釣り師よろしき装備のチビッ子達が、入賞の期待に胸をふくらませ、瞳を輝やかせながら三々五々と集まって来ました。

「さあ皆んな、今から魚の寸法を計るから、一列に順序よく並ぶんだよ。押さないで、押さないで。」

子供達は、やっかみ半分に、それぞれのピクの中を覗き合いながらワイワイ、ガヤガヤと騒いで並びます。そして、やがて第1ピキ目。自慢気に計寸台の上に差し出してくれたそのフナを手にした時、私は思わず予期していた以上のショックに打たれて、顔を背けそうになりました。

それからの約一時間半。フナ、コイ、ナマズ、ウナギ、ライギョ、スナクジリ等々、子供達が釣り上げ、得々として持ち寄って来てくれるそのすべての魚が異様なぬめりを持ち、その魚眼たるや魚のまなざしと言うにはあまりにもうつろでドンヨリとした哀しい眼を宿していると見たのは、私のヒガ目だったでしょうか。そしてそれがまた臭いのです。それ等の魚体のぬめりから発する匂いが、たまらなく臭いのです。時おりのかすかな川風に乗って、私の鼻孔を衝く流れの匂いも然りですが、それ等は一様にドブから引きずり揚げた土左衛門といった形容がふさわしいほど、鼻持ちのならぬ悪臭がするのでした。それは昭和50年12月9日の当地の新聞紙上に環境庁が発表した「庄内川の六価クロムの検出量、日本一」と言う記事を彷彿させてくれるにあまりあるものがあったのです。鼻をつまみたい衝動にかられながら、1ピキ1ピキを審査する毎に、これが私達の食膳をうるおしてくれる魚達の仲間なのかと思うと、汚染源の誰彼はともかく、言い知れぬ哀しみと持って行き処のない憤りに、私の胸中は張り裂ける思いがしました。

昭和50年6月29日。それは奇しくも「きれいにする会」が、第一回の「食べられない魚釣り大会」を、庄内川で開催した当日でした。当時、自分が結成したNクラブで釣り三昧に興じていた私は、クラブの若者に福井県の大納川へと案内を乞われて、アマゴ釣りに出掛けました。釣果の方は、折からの降雨も手伝ってくれて、数もあがり、型も揃って28㌢級が2ヒキも混じりました。その大満悦の帰途だったのです、思わぬハプニングが私を襲ったのは。前日の出発前に、よく睡眠をとるようにとアドバイスしておいたその若者が、満足に二時間も眠っていないと言う状態だったために郡上街道の福野の集落辺りで居眠り運転をし、停車していた対向のダンプカーに激突するといった、事故を惹き起こしてしまったのです。幸か不幸か、二人共九死に一生を得て、生命だけはとり止めましたが、助手席にいた私の方は、退院後に両の肩に極度の筋肉痛が現われ、遅々として進まぬ回復に、毎日が胸を塞がれる思いをしていました。そんな呻吟の時、私はふと自分が地獄の入口まで行ってUターンして来たためなのか、釣りの一愛好者（私は釣りバカ）として生きていることの存在価値に疑問を感じはじめたのです。

根っこからの独りっ子で、それに義理の父や兄達の中で幼年時代を送って来た私は、自分が置かれている環境に左右されてか、自然と孤独を楽しむ趣味へと片寄って行くのを否めませんでした。工作、読書、俳句、釣り。とり分けて魚釣りに熱中したのは多分、息の詰まるような生さぬ仲と言う家庭の雰囲気から逃避したくて、子供心にも、慰められない心の痛手を癒やしてでもいたのでしょう。そんな頃の庄内川と矢田川は、水は濁くまでも清く澄み、尺を越すマゴイや、20㌢以上のアユが、水な底をゆうゆうと遊泳するのが見られました。もちろん、三十数年後の今日に至って、これ程までに汚染され、白濁の川と化そうなどとは露ほども見せず、沼々とした流れを誇っていたものです。日曜日ともなると、何をさて置いても、夢中で自転車を飛ばして来て、そうした川の流れに終日糸を垂らしていた私。一度、名古屋タイムズの一面にそうした私の釣り姿が載ったこともありました。ともあれ、そうした経緯もきっかけになって私の釣りバカの一ページは飾られていったのです。そうです。無学で無能な私は、魚を釣ることより他に得手を知らないのです。明けても暮れてもそしてまた釣れても釣れなくても、釣り竿さえ水に向けて伸しておればご気嫌な男なのです。しかし、そのように愚かな私でも、さすがにその交通事故から生き還って見ると、やはり人間並みに自分の過去や周辺を見回し、振り返らざるを得ませんでした。やれ今日は何㌢の何魚を何ピキ釣ったの、やれ今度はどこそこの何々川へ何魚を釣りに行こうなどと、ただ漠然と魚を釣り上げることにのみ、終始能力を絞っていた自分がどの角度から眺めてみても恥かしくて仕方が無くなって来たのです。

目を釣りの世界へと展じて見ます。世の中のモラルの低下と比例して、隣分と釣り人のマナーも悪化しているのではないでしょうか。例えば、人の頭越しに竿を出す者、等間隔もわきまえずに割り込んでくる者、釣れたとなると、その同じポイントへ竿を振り込む者、断りもなく、他人のピクをひっくり返して覗く者、また、私の愛好する渓流釣りにおいても、ひとことの挨拶もせずに追い越して行く者。ひとの釣っている目前の上流へ入川する者。橋や崖から、川へ向かって放尿をする者。禁じられている不法漁法を夜陰に乗じて行う者、稚魚の乱獲、禁漁時、禁漁区域への入川、遊漁料の不支払い等々、まことに枚挙にいとまがないほどの悲しむべき現状です。ましてや、自分達が飲み食いした空缶、空瓶、包装紙、ビニール袋などは片付けるすべとて知らず、無頓着にも川原へ放棄して行くのです。さらには沿川に居住する住民達においても同様のことが言えます。まるで我が庭のように平然と川へ汚物を投棄したり、悪質者ともなると、わざわざ車で乗り着けてまで、川原へゴミを放置して行きます。魚のアタリだと思い、勇んで竿を立てたとき、ハリに掛かって上がって来た物が魚とは似ても似つかぬゾロゾロのビニールだったりした

不愉快な経験は、私ならずとも多数の釣り人が味わっているのではないでしょうか。

河川は今、ただでさえ各家庭で使用する洗剤の多量の排水や、山間部開発の廃土、砂利採取の汚水、工場からの廃棄物の流入などで汚染され、瀕死の憂き目を見ようとしています。あまつさえそこに棲む魚族などは、そうした悪条件と並行して、加速度的に汚染され、背曲り、尾曲り、顎無しなどの奇型魚の出現はおろか、絶滅状態に陥ち入っている河川も少なくないと聞き及んでいます。河川は今、全国的にそうした危機的実状にあるのです。しかるに、川や海に対しては、誰よりも強い関心を持ち、誰よりも深い愛情を示さなくてはならない釣りの愛好者達がこのようなマナーの悪い行為を平然とするということは取りも直さず、汚染に拍車をかけ、自分で自分の首を締めているようなものではないでしょうか。

魚達は哭いています。水の中にしか棲むことが出来ない宿命にある魚達は、文明社会という巨大なメカニズムの犠牲になって哭いています。私は、自分の最愛の趣味である釣りが起因となってケガをし、ケガをしたためにはじめて釣り人としての自分達の歩みの土台を自分達で崩壊させていることに気が付き、自戒の念を深めたのでした。

「矢田・庄内川をきれいにする会」は、昭和50年の6月に、第一回の「食べられない魚釣り大会」を開催し、市民の注目を浴びて以来、

①スローガンである「川の汚れは心の汚れ」の看板を両河川の各所に立てる。

②庄内川の河原の石が綺麗なことに気が付いて、フィッシング・ショーで水石展覧会を開催する。

③浄化運動を「次の世代へと引き継ぐこと」という目的を推進するために、準会員の子供達へ綺麗で美しい本来の川の姿を見せる移動映写会を開催する。

④会のシンボルバッヂを作製する。

⑤西山青年会による、テーマソング「川の歌（魚に聞いて見よう）」の発表会を行う。

⑥愛知県水産課の放流してくれた椎鮎の成育追跡調査をする。

⑦全国放送協会主催の矢田川三階橋上流の川岸における環境美化キャンペーンの清掃運動に参加する。などなど……こうしたユニークで、しかもドラマチックな住民達自身の手による運動の続行は、着実にその効果を上げていったようです。ということは「俺達が汚したのだから、まず俺達の手で」という原点にたった物の考え方が順調に結実し、行政も会の存在を無視出来なくなるほど、市民の眼はいやが上にも白濁した川を見詰めずにはいられなくしてしまったのです。

まもなく、当然のように私の胸にも会のシンボルバッヂが輝やくようになりました。後日にはやったタイ焼き君の歌のような魚が、野球帽をかぶった微笑ましいバッヂが。もちろん、会の代表世話人である丹羽秀義さんに直接に面談し、尽力を惜しまないことを誓言しての入会でした。「私達は片イキ張り正面切って、公害防止の闘争をするものではない。どこまでも側面から市民一人一人の切実な叫び声に依って、汚染源を柔かく包囲し、昔日の清流の再現を願うものである」という会の趣意が、私に淀みのない共感と、芳わしい教訓とを与えてくれたからでした。やがて私は失礼な言い方かも知れませんが、老齢であるにもかかわらず、この浄化運動に余命を賭けておられる、バイタリティ溢れる丹羽さんの言動力と、若年でありながら、夫婦共々、丹羽さんの片腕ともなって情熱を傾注する事務局長・宮田照由さんの人柄にだんだんと惚れ込んでいったのです。第一回庄内川祭りの「食べられない魚釣り大会」での審査員役はこうした経緯から私自身が、奨んで買って出たものなのでした。

それから約五ヵ月経った9月のある日、中日新聞の市民版に見出しも大きく「川をきれいにし釣りを楽しもう、山彦会28日に発足」という記事が掲載されました。それは私が自分の立場も弁えず、厚かましくも丹羽さんに清渓流釣りクラブの創設を提案し、それが会の世話人会で決議されたためでした。ということは、私が自分のNクラブを退会したからなのです。当時誕生して三年目を迎え、新進気鋭の会員も増えて、完全に青年期の途上にあったNクラブではもう私など必要ではなくなっていることに気付いたからです。過去七、八年の間にSクラブからNクラブへ、そしてまた……とても第三者の目を意識していては行動に移せることではありません。しかし、真底から「きれいにする会」の運動に傾倒してしまっていた私には、不必要と分っているクラブに、何時までも未練がましく在籍しているより、小さな存在価値でしかないけれども、己惚れにもせよ、私を必要として下さる組織に移籍した方が有意義でもあり、格好の生き甲斐でもあると悟ったからでした。

釣りクラブ創設の提案。それはまるで無暴とも思える発想でした。けれども、私の考えとしては、会の運動が主眼とする「市民の目を川へ連れ戻し、川の危機的状況を認識してもらおう」と言う方法論を全うするには、浄化運動に携わっている当事者たる私達が「川を汚しているのは我々だ」という問題意識に対して、大きく開眼しなくてはならない。それにはまず、手っ取り早い話が私達自身が地方の川の実状をもつぶさに観察すること。その最短距離は魚釣りである、という連想でしかあり得ません。また、せっかく釣り大会というユニークな活動で、市民の精神革命に迫ろうとしても、万が一その釣り大会中に水難事故でも発生したら……。その時の反動が怖い。私はたった一度でしかなかったけれども、釣り大会に参加して見て事故防止のためのパトロールの手薄さに杞憂を抱いてもいたのです。川の怖さは釣り人が身にしみて一番良く知っているものです。

しかし、あまりにも突飛な発案ゆえに、私は恐らく一笑に付せられると覚悟はしていました。ところが、まるで打てば響くように「その声を待っていた。ぜひとも」という会からの応答が、うれしくも跳ね返って来たのです。

さてそれからの数日。私の チッポケな頭脳は多忙を極めました。会則の草案作り、クラブの命名、バッヂの図柄の考案、無い知恵を懸命に振り絞って出来上ったものはお粗末ながら左記のようなものでした。

まずクラブ名は「山彦会」と謳いました。それは「川の汚れは心の汚れ」という、会のスローガン、つまり合い言葉を山彦がこだまするように呼び掛け合い、その響きを全市民に、極端な言い方をすれば特に公害行政を進める自治体へも届かせようという意味合いから命名したものでした。

そしてクラブを象徴するバッヂは「きれいにする会」のバッヂの魚の図柄をキッスしているように向かい合わせ、クラブ員の親睦と和合を強調しました。

また会則の第一条には、『飽くまでも「矢田・庄内川をきれいにする会」の運営を円滑化する、オイルの役目を果たす人達の集結によって結成する』ことを必須の条件とし、別条にも『釣りのマナー、エチケットの遵守』、『会員は必らず釣り場の汚染防止を心掛けねばならない』など、強力に付加しました。

何といっても、この釣りクラブがこれほどスムーズに結成の運びとなったのは、幸いにして「きれいにする会」の会員の中に、魚釣りの愛好者が多数おられたことでした。趣味の魚釣りと川をきれいにする心を合体させることによって、より端的に河川の公害防止運動を推進させようと考えた私のもくろみがそうした過程でやっと花を咲かせてくれたのです。

それから日を置かずして、名古屋女子大の広正義教授によって、庄内川へ天然アユがソ上していたことが発表されました。「きれいにする会」の宮田さんが、独自に追跡調査をした成果でもあります。それに呼応して10月24日には、いままでの「食べられない魚釣り大会」を「食べられるかも知れない魚釣り大会」と変更して開催し、山彦会の会員も全面的に参加することによって、クラブ発足の布石としました。

11月7日。私達は、ようやくにして念願の山彦会結成記念第一回シラハエ釣り大会を、三重県の雲出川で開催することが出来ました。一志郡香良州町付近の川岸は、押しかける釣り人達の手で汚され、拾いつくせぬほどのゴミが散乱していました。私達は私達の運動を釣りを楽しんでいる他の人達へも呼びかけ、持参した特大のポリ袋にゴミを回収、付近の民家に後始末を依頼して、まず当面の目的を達成して帰名したのでした。

第二回目の釣り大会は12月12日、同じく三重県の名張川でした。この川も他聞にもれずひどい汚されようでした。名張市内の大谷山下など釣り人達の精神年齢を疑いたくなるほど唖然たる有様でした。日増しにせちがらくなる社会環境から、たとえ一時間でも逃避して釣りを楽しみたいと願うのが、当世風釣り師の心境だとは思いますが、もう少し大人の気持ちを忘れず、紳士的な釣りの姿勢が保てないものでしょうか。私達はたった二回の釣りを兼ねた浄化作業ではありましたが、山彦会の会員という自負心から立って見て、改めて一人一人の善意がいかに大切であるかを痛感して来ました。

暮れの12月20日。「矢田・庄内川をきれいにする会」の河川浄化住民運動の芽は確実に息吹き、市民の声と行政が一体となったその一つの証しとして、本山名古屋市長がみずから「川の汚れは心の汚れ」の百本目の看板を兄弟川である堀川の城北橋の堤に打ちました。市の公害行政への熱意のバロメータとなって下さった訳です。

アユがソ上し、水鳥が羽根を憩め、子供達が何の杞憂もなく泳げる。全国の汚染川がそうした清澄な川に還元してくれるのは何時の日のことでしょうか。私達山彦会の会員は、今後も可能である限り、他府県の河川へ釣行をして「きれいにする会」の運動をアピールし続けるでしょう。

釣り人達よ、われに還れ。山彦会の全員は僭越ながら、声を大にしてこのようにお願いするものです。

最後に、清掃用ポリ袋を寄贈して下さいました、日本釣振興会さんに衷心よりお礼を申上げます。

汚れ川浄化すべしと雪降れり　爽風

フイッシユオン　1977。12月号より

魚は街なかの川へ帰って来たのか!?

“食べられるかも知れない魚つり大会”取材記

編集部

名古屋近辺在住の人なら誰もが知っている川のひとつに庄内川がある。庄内川は陶器の産地で知られる岐阜県の土岐市、多治見市を通過して愛知県に入り、名古屋市の北東部から南西部を迂回して伊勢湾へ注ぐ川である。建設省の区分では一級河川とされているが、東京の江戸川や隅田川、大阪の淀川ほどの規模ではない。

しかし、名古屋市内を流れる川としてはもっとも大きく、古くから市民に親しまれて来た。一昔前（昭和三十年前後）までは、観光地として栄えた定光寺（中央線定光寺駅がある）かいわいの峡谷美をなしていたのもこの川だ。定光寺付近では“玉野川”と呼ばれるが、アユの友釣りもさかんであった。

この庄内川が、陶土を含んだ排水と、王子製紙などの排水とによって急激に汚染されはじめたのは昭和三十年代に入ってからである。水は透明度を全く失ない、“白い川”と呼ばれるようにさえなってしまった。

この庄内川と、さらにもう一本、近くを流れる矢田川とを一緒にして、市民のための川をきれいにしようという運動を進めてきたのが“矢田・庄内川をきれいにする会”（会長・丹羽秀義氏）である。

この会では、川の浄化を各界に訴えるとともに、デモンストレーションとして、“食べられない魚を釣る会”などを時々行なって来た。

ところが、最近、川の水もある程度きれいになり始め、付近の釣り具店などの協力でコイなどの魚を放流したりした努力の結果もあって、「庄内川に魚がもどって来た」という声をちょいちょい耳にする。事実、庄内川べりで釣りをする人の姿も増えて来た。

そこで今回は、“食べられるかも知れない魚を釣る会”と名称を変えての、ふうがわりな釣り大会となったのである。

集まった釣りファンと、“きれいにする会”の人々

⊙魚は事実ふえている

大会の行なわれたのは十月九日の日曜日。この日は前日にはげしい秋雨が降ったせいか、川はふたたび“白い川”にもどっていた。

しかし、少年たちをはじめ、熱心に釣りを行なった参加者は約350名の多数におよんだ。

コイをねらってブッコミ釣りをする人、シラハエ（オイカワ）のウキ釣りをする人など、大会本部のある水分橋付近を中心に釣りファンが川岸を埋めた。

午前十一時、審査がはじまるとともに、ぞくぞくと釣果が集まって来た。小池篤君（一二）は51・5㌢の大ナマズを上げた。会社員の大池保広氏（四九）は48㌢のコイを手にして来た。

その他、シラハエ、フナ、ウナギ、スナクジ（カマツカ）などの釣果が届けられた。

この結果から見るかぎり、庄内川の魚はたしかに増えてきたと言ってもいいだろう。

⊙はたして食べられたか

一方、審査済みの魚のうち、釣った本人が承知した魚の一部は、大会本部のかたわらにしつらえたバーベキューセットで即席の塩焼きにされた。

うまそうなにおいが川原に流れる。「勇気のある人は食べてごらん」との会長の呼びかけに、おずおずと手を出す人が出はじめた。

小さなシラハエの塩焼きを手にした小学生は、「うん、なかなかうまいよ」と、全部たいらげてしまった。中型のコイやフナの塩焼きに手を出した大人の一部は、複雑な顔で、途中でやめてしまった。

記者も、おのれの舌でたしかめてみようと、中型のナマズをブツ切りにして焼いたものを口にしてみた。はじめの一口は、塩の味とナマズの脂肪分が適当にミックスされて、けっこういけるじゃないかと感じた。二口めを口にした時、先にのみくだした一切れから、おかしな臭いがのどを逆流してくる気がした。「気のせいか」と思いつつ、三口めを「エイッ」とほおばってみたが、ついにだめだった。三口めをのみ込むことはできなかった。重油とも排油ともつかぬ独特の“油臭さ”がのど元にこみあげてくるのである。

急いで水をもらい、何度もなんども口をゆすいだ。だが、白状すると、その日の夕食頃まで、油臭いおくびに悩まされつづけた。

これは記者一人の感想ではなく、おおかたの試食者の意見でもあった。

庄内川の水は、まだ魚を食べられるほどの清流にはもどっていない、というのが率直な感想であった。

←大ナマズをかこんで

↓表彰風景

⊙とりもどしたい市民の川

大会の終わりは、各魚種別の長寸により表彰が行なわれた。こうした大会に賞品を出した各メーカー、小売店の姿勢というものも評価されていいと感じた。

魚種別の感想では、ウグイが1ピキもなかったこと。スナクジ（カマツカ）がただ一ピキだったことから、こうした清流を好む魚がもどってこないことには、庄内川の清流度は「まだまだ」ということだろう。

折しも、十月六日、名古屋市議会で本山市長が「名古屋港や市内の川に、市民のための釣り場をつくる計画がある」と答弁している。

一刻も早くそれが実現し、しかも“食べられる魚”を釣ることができるよう、のぞみたいものである。

水分橋より下流をのぞむ

河川浄化住民運動「矢田・庄内川をきれいにする会」の釣り大会に参加して

名古屋市　中一　伊藤康治

いつものように午前4時に集合してつり場にむかいました。目的の三重県の櫛田川には6時半ごろつきました。

はじめは両郡橋のすこし上流でつりました。最初はクリ虫のエサで、ややあさい瀬をねらいました。ウキが流れきって、サオを上げようとしたら急にウキが止まり、8センチくらいのシラハエ（オイカワ）がつれました。

友だちがうらやましそうに見ていましたが、あんまり大きくなかったのでぼくはうれしくありませんでした。それからは調子がでて、6～10センチくらいのシラハエをたてつづけに10ピキくらいつりました。

だけど、だんだんつれなくなってきたので美馬君とそうだんしてつり場を変えることにして、大人の会員が大ぜいつっているところへ行ってみました。

2回、3回とつるうちに、今までのものよりいちばん大きなシラハエがつれました。15センチくらいありました。だけどこの1ピキをつったあと、ぜんぜんつれてこないので鈴木君と村沢君のいるトロ場へ行きました。

ここはとても良いポイントらしく、下水が流れこんでいるところには魚がキラキラ光っておよいでいました。少しよせエをまいてからつりはじめました。いっぱつでアタリがきました。なかなかひきも強くてカタも大きかったです。

こんどはクリ虫をさしたところにサシをひっかけてウキを流すと、またアタリがありました。こんなふうにして2時間くらいがんばってみました。そして11時ごろに13センチくらいのが1ピキつれて、それが今日の最後でした。

ひるごはんをたべてからみんなのところを見てまわりました。おとなの人たちは大きいのをたくさんつっていました。時計を見ると12時でした。1時に集合ということでしたのですぐにかたづけて、バスのところへ行きました。

それから30分くらいしてしん査がはじまりました。今日の学生の部は、2ヒキのおもさとクジびきで出たので、大きそうな魚をよりわけて出しました。するとぼくのは78グラムあり、14人集まったなかでいちばんになれました。とてもうれしかったです。

全部の表しょうがおわり、川原にちらばっているつり人たちのののこしていったゴミをひろいあつめてから家に帰りました。

つりに行く前の夜はなかなかねむれません。それはどうしてかというと、こんどのつり大会はぼくが入会してから初めてのつりだからです。

午前3時ごろに友だちの家へむかえに行きました。そして集合の場所へ集まって、出発したのは4時すぎで、櫛田川の両郡橋へついたのは6時ごろでした。バスからおりて、会長さんの話を聞き川原へおりました。

したくをしてサオを出すと、しばらくして1ピキつれました。とても小さかったけどピクに入れました。1時間もすると10ピキくらいつれました。友だちもよくつっていましたが、数はぼくのほうが多いのだけど、友だちは1ピキ大きいのをつっているのでまけてはならないとがんばるのだけど、あいかわらずこれといった大物はつれません。11時ごろになるとあまりつれなくなり、とうとうまったくアタリがこなくなってしまいました。それでも30分くらいねばってみましたが、ほんとうにぜんぜんつれないままでサオをしまうことになりました。

道具をかたづけ、あらためてピクの中をのぞいて数をかぞえてみたら、どうにか25ヒキくらいはいました。だけど大物は1ピキもいそうにありませんでした。ガッカリしてバスのとめてある所へもどりました。

もうほかの友だちも来ていたのでぼくの魚とくらべてみたら、みんなぼくのより大きく感じました。

だんだんにおとなの会員の人たちが集まってしん査がはじまりました。クジをひいて、自分のつった魚の中から大きそうなのを2ヒキえらんでハカリにかけ、いちばん重い人がゆう勝ということになりました。

ぼくのは66グラムありました。そしてけっきょくは5位でした。賞品のもらえるのは3位までだったのでざんねんながら賞品はもらえなかったけれど、年間賞のたいしょうのとく点を10点もらえたのでまあまあよかったと思います。

「よし、つぎのつり大会のときにはかならずゆう勝してやろう」と心のなかで思い、最後に川のそうじをして名古屋へ帰りました。

河川浄化住民運動「矢田・庄内川をきれいにする会」の釣り大会に参加して

名古屋市　中一　鈴木幹太

9月25日の日よう日にぼくは午前4時出発だと聞いて、夜なかの2時半ごろからつりのしたくをしました。友だちが3時半ごろにむかえにきてくれました。

いつもの集合場所に行ってみると、もう大人の会員の人たちが大ぜい集まってきていました。それから三重県の櫛田川へ行きました。出発したのが4時15分ごろで、櫛田川についたのが6時ごろでした。

つり場で会長の注意をきいてから、橋の下の河原へおりてつりのじゅんびをしました。エサはバスのなかでクリ虫を20ピキくらいわけてもらったのでそれを使うことにしました。

しばらくウキを流しているうちに1ピキ目がつれました。それは小ユビぐらいのかわいいシラハエでした。あまり小さすぎたので「大きくなったらぼくにつられてくれよな」と心のなかで言ってすぐ川へにがしてやりました。2、3、4、5ヒキとたくさんつれてきますがみんな小さいシラハエばかりでした。

ぼくは、今日はもうダメだなと思いましたが、でも一生けんめいつりつづけました。ちょうど7ヒキ目のときに、ウキがピクピクするのでサオを上げてみると「ググーッ」と手ごたえがあって、13センチくらいのピカピカしたきれいなシラハエがつれました。ぼくは心の中で自分にもツキが回ってきたと思い、それからもつりつづけました。

時間がたち、ちょうど10時ごろピクのなかを見ると、知らないうちに15ヒキもつっていました。だけど友だちのほうは25ヒキくらいはつっているので「今日はもうまけだな」とガッカリしましたが、よく見るとぼくの魚のほうが4ヒキぐらい大きいのがいました。ぼくはおもさで成せきがきまると聞いていたので、「これは、ぼくの勝ちだ」と思いワクワクしました。

12時半ごろ集合場所へ行って2ヒキのおもさでしん査したら、やっぱりぼくは2位になれました。ゆう勝ができなくて少しざんねんだったけど、2位に入れてとてもうれしかったです。ぼくは魚つり大会で賞をもらうのがはじめてだったからです。

表しょうがおわったあと、川のそうじをしました。賞をもらってから川のそうじをするとほんとうによい気もちです。これからもぼくは川をきれいにしようと思います。

河川浄化住民運動「矢田・庄内川をきれいにする会」の「山彦会」の釣り大会に参加して

名古屋市　中一　村沢健治

ぼくたちのつりクラブは9月25日に、三重県の櫛田川でシラハエつりの大会を行い

釣った魚は放流しよう

千島淳蘭

私は川釣り、とくにハヤ、ヤマベ、マブナなどの、いわゆるザコ釣りを楽しんでいるものですが、最近、どうもあまりおもしろい釣りができなくなりました。つまり数が釣れないのです。数年前は入れ食いだったのに、最近では寄せエサを使っても、一日に十尾も釣れればよいほうです。

釣れなくなった理由は、魚の数が減ったということです。なぜ魚が減ったのかといえば、川の汚染ということもあるでしょうが、何よりも釣り人が多くなり、釣られる魚が減したということがいえそうです。

釣りを楽しくするためには、魚の数をふやすことが必要であり、そのためには、釣った魚を持ち帰らずに放流することが、もっとも手っとり早い近道ではないかと思うようになったのです。

釣りの楽しみは、釣ること自体にあるばかりでなく、釣った魚を持ち帰って、料理して食べたり池や水槽で飼ったりすることにもあるとは思います。しかし、釣る楽しみと、食べる楽しみが両方とも得られるうちはともかく、釣る楽しみがだんだん減っていくということになると、そのどっちかを自制せざるを得なくなると思うのです。

矢田川・庄内川にアユがよみがえった！

名古屋市　宮田照由

名古屋のまちに清流を…

庄内川は、岐阜、愛知両県の上流部から流れを集め、名古屋のど真ん中を斜めに突っ切って伊勢湾に注いでいる。その支流である矢田川は愛知県瀬戸市と長久手町から流れ、名古屋市内に入って合流している。

かつては名古屋市民の養白源であり、子どもたちにとって格好の遊び場であったこの両河川とも、いつの間にか漁業権までが放棄され、それに気づいた時には、すでに鉛末におえないほどの白濁した川と化していた。

両河川にはさまれ、終日悪臭にさいなまれていた住民たちは、汚染に対する反省と憤怒をこめて、矢田川と庄内川をきれいにする会をつくり、川を汚すものは、自分たちの心も汚れているのだぞと、沿岸に浄化運動の看板、百本を打ち立てる計画を思いたった。

できあがった看板は、ただガムシャラに沿岸のあちこちに立てられた。だが、それだけでは市民の一人一人にアピールできない。そこで、一人でも多くの市民の関心を呼び戻し、川の実情をのぞいてもらうため、「食べられない魚の釣り大会」の開催を思いたち、実行した。

大会の当日は、前夜のドシャ降りの雨も、カラリと晴れあがり、絶好の釣りびよりになって早朝から市民が押しかけ、鼻をつく悪臭の川に六百人もの釣り人が糸を垂れた。まさか、この企画がこれほど反響を呼ぶとは、予想だにしなかったとことである。

これが機になり、マスコミは新聞にテレビにラジオにと、この催しをユニークな運動といってカッサイし、それに勇気づけられた私たちはその会議にのって、その年に三回もの釣り大会を開催することを決定した。

そんなある日、愛知県から庄内川の汚染状況を調査するための、魚類の採取を依頼された。行政と住民の願いが一つになることが、浄化の近道になることが立証されたのである。

こうして庄内川に、県の協力で稚アユが放流され、浄化運動の住民や子どもたちの期待と夢がふくらんだ。

アユの成育を観察する追跡調査が始まった。捕獲されたアユは、川の汚れのように白っぽくひ弱そうで、何かものたりないさびしさを感じさせたが、その不安を解消してくれるように、確実な成育ぶりを見せてくれた。

去年までは、稚アユが上しても、エサにするものとてなく、生息だにしなかったのに、最も汚染されているといわれる庄内橋付近で、それも天然のアユが採捕されたという報告までが入った。実に十一年ぶりの快挙となったのである。このニュースは各地に反響を呼び、新聞にも大きく報道された。

会が発足して二年たち、最初の目標である百本めの看板も、二百万市民の切実な願いをこめて、本山市長の手によって、名古屋城近くの堀川端に立てられた。

河川の浄化を願い、数人の手によって始められた運動が、こうして着実に実を結び、県や市の公害行政を動かすまでに成長したのである。

名古屋の矢田川、庄内川に、天然アユがまみえたとはいうものの、清流にかえったとは、まだまだいえない。アユや他の魚たちが健全に成長していくためには、まだまだ充分な環境とはいえない。私たちの運動は、きれいな河川づくりこそ、われわれ人間にとって最も豊かな自然環境をもたらすものであるとの信条にそって、これからも明日に向かって運動の輪を広げていくことだろう。

矢田・庄内川をきれいにする会

名古屋市守山区瀬古川西270 (TEL) 793−0677

会　則

第一章　総則及び目的

第1条（名称）この会は矢田、庄内川をきれいにする会（略称きれいにする会）と呼ぶ。

第2条（目的）この会は、庄内川水系を汚すすべての汚染源に対しきれいで快適な生活環境をとり戻し、次代へ引きつぐ事を目的とする。

第3条（会員）会の目的、会則、運動方針に賛成する者はだれでも会員になれる。（ただし10才から17才までは準会員とする。）

第二章　機関及びその役割

第4条（総会）総会は必要に応じて開催し会の基本方針、規約改正などを決定する。

第5条（世話人会）会は、各支部の世話人に依って世話人会をつくり、会全体の運営を行う。

第6条（支部世話人会）会は地区ごとに支部をつくり、支部世話人会によりそれを運営する。

第7条（役員）世話人会の互選により、会の代表、会計、事務局を決め、日常の運営に必要な諸事項を処理する。

第三章　財　政

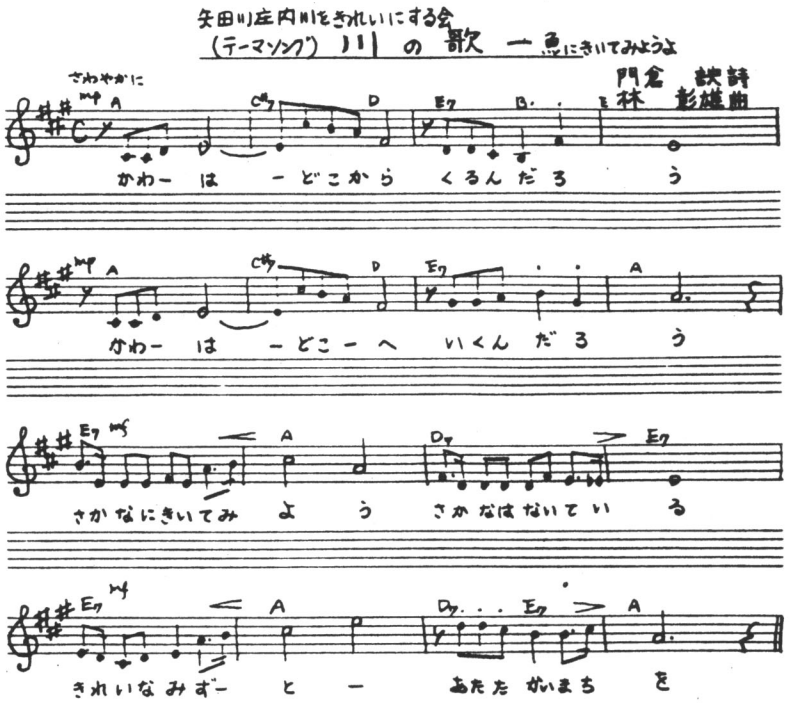
第8条　この会の経費は会費および寄付金、その他の収入によってまかない、会費は個人1ヶ月1口100円以上とする。（ただし準会員は、会費を必要としない。）

第四章　附　則

第9条　この会則を運営するに必要な規定（内規）は各世話人会の協議を経て別に制定改廃する。

第10条　この会則は1975年　5月24日から実施する。

以　上



川の歌
魚にきいてみようよ

門倉 詩
林 彰雄 曲

川はどこからくるんだろう
川はどこへいくんだろう
魚にきいてみよう
魚は泣いている
（きれいな水とあたたかい街を）

風はどこからくるんだろう
風はどこへ行くんだろう
魚にきいてみよう
魚は話してる
（きれいな水とあたたかい風を）

川はどこからくるんだろう
川はどこへいくんだろう
魚にきいてみよう
魚はうたってる
（きれいな水とあたたかい夢を）

矢田・庄内川をきれいにする会　会員名簿

氏　名	住　所	TEL
丹羽秀義	守山区瀬古川西270	793−0677
宮崎国一	〃　252	793−6879
渡辺治幸	〃　175	793−0665
鈴木　敏	〃　409	793−5661
小川　博	緑区神の倉80	876−2484
小池英司	守山区廿軒家長栄101	791−3622
宮田照由	〃　瀬古川西341	794−3876
阿部信一	北区上飯田南町4−3 市営住宅 1−409	915−0791
堀田幸博	北区安井町4丁目12番9号	913−2866
川上郁郎	守山区大字守山字西廻間39−3	794−9512
丹羽年弥	北区楠町味鋺南山62	901−2421
小池　弘	守山区廿軒家長栄101	794−4397
瀬尾さち子	〃　瀬古川西190	793−9917
宮田明美	〃　〃　341	794−3876
古川錦子	〃　〃　376	793−0796
丹羽あや子	〃　〃　270	793−0677
近藤正子	北区辻町3−57	915−9541
野崎秀也	北区上飯田通1−24	981−6771
竹内久雄	守山区大字守山字市場29	791−2676
村山孝夫	〃　瀬古川西397−1	793−5630
坂　登	〃　〃　206	793−5145

氏　名	住　所	TEL
近藤爽風	昭和区前山町3−46 日産サニー寮	761−8420
松田　勇	〃　瀬古川西68	793−1037
能勢美良	〃　〃　419	793−0673
鈴木久子	北区米ケ瀬町59	793−6044
阿部一栄	〃　47	793−1063
平岩正平	〃　200	793−2896
近藤礼一	〃　59	793−6904
西村　修	〃　142	794−6272
岩崎　宥	〃　49	793−4861
松田兼一	〃　133	793−8033
鈴木重右エ門	〃　59	793−6044
鈴木昭夫	北区志賀町4−60 志賀住宅 5−404	912−4878
鈴木恵子	〃　〃	〃
松田春吾	守山区瀬古川西68	793−9468
山岡三夫	〃　大字守山字間黒33	793−0513
河上岩男	〃　瀬古高見2427−1	793−2062
加藤健樹	〃　小幡字西島123	791−9521〜3
井山利春	北区鳩岡町2−82	981−4553
加藤藤夫	〃　敷島町6	991−0912
加藤好彦	〃　安井町2−26	912−3623
加藤秋美	〃　楠町味鋺1743	901−5672
上飯田釣具店	〃　上飯田通3−1	912−6791
柴山釣具店	〃　上飯田西町1−26	911−2922

氏　名	住　所	TEL
間渕信雄	千種区千種通７－２２	733－5432
宮田尚彦	北区米ケ瀬町５７	793－7455
宮田　巌	〃	〃
長谷川　弘	守山区瀬古川西３１８－２	794－8228
幸村　昭	北区上飯田北町３－120－１	915－3589
山崎　茂	守山区瀬古川西２７３	793－5876
村田佳子		
石川雅宥	東区泉２－３－２３	931－4883
小川くに	緑区神の倉８０	876－2484
浅野光定	中川区西日置町	
林　釣具店	熱田区三本松町２－４７	881－8733
平松　釣具店	一宮市新生２－１１－５	0586 45－1992
村田圭基	東区赤萩町1－72 国鉄アパート 34－D	
谷口俊一	守山区高島町３４１－１	
田中美智子	千種区元古井町９－７	
村山峰夫	瀬戸市菱野団地八幡台36－61	0561 82－1267
笹尾喜久魚	守山区小幡西島３４	794－2600
林　幸男	北区辻町３－１０	991－0686
常松義臣	〃 東大曽根町上２－９０２	991－4338
阿南享生	〃 光音寺町野方1907－16	914－4670
鈴木和博	〃　〃　1907－17	911－2077
横井孝太郎	千種区今池町４－２１	731－1057
上杉俊一	西春日井郡師勝町久地野河原152	0568 22－7756

氏　名	住　所	TEL
伊藤重治	江南市曽木１４４１－３	05875 5－4775
黒瀬明生	春日井市堀ノ内地1－54 パピリオンすみれ台A207	0568 84－0729
武内敏憲	北区上飯田北町４－１	913－5657
笹尾健司	守山区小幡西島３４	794－2600
市川辰也	愛知郡長久手町野田農６	05616 2－0296
小森　聡	北区上飯田東町５－４２A－９	981－5262
梅沢　稔	西区白塀町２－８	502－0293
本田耕一	守山区瀬古川西１７７	793－1410
本田宣子	〃　〃	〃
木下芳子	〃　１７６	792－2384
青木賢一	〃　１９６	793－2060
奥原加三	〃　１３４	793－0659
清水道雄		
日下勝正	〃　１３５	793－0237
一柳義兼	〃　２７４	793－5811
竹内秋洲	〃　２５２	791－8214
今井英雄	〃　３０６	793－0037
寺尾介秀	〃　２７３－２	793－9997
林　三郎	〃　２５０－１	793－2822
野倉金一	〃　３５８	793－0075
神山製作所	〃　〃	793－3327
坂上忠松	〃　４５１－１	
舟橋きく子	〃　３７６	793－0796

氏名	住所	TEL
井戸坂 俊一	守山区瀬古川西３１４	793−5907
野尻 公男	〃 大森字天子田3532 8棟302	
大森西住宅町内会	〃 大森欠ノ下634 大森西住宅	798−1298
黒木 弘	〃 上志段味字中屋敷1505	736−9320
寺尾 重則		798−0654
加藤 満雄	〃 川山際４３５−２	792−0098
金子 秀夫	〃 守山字山屋敷３７	791−5306
嵯峨 司郎	〃 小幡中島１０２	791−6029
田島ふとん店	〃 〃 小林２９８４	793−8818
青木 貞雄	北区安井町河野１５４６	991−0912
林 兼光	北区杉栄町５−１０９	
可児 好丈	〃 辻町９−５６	913−0257
木全 久子	〃 西志賀町１−４	
小川 兼男	〃 辻町３−４０	913−5876
鈴木 崇夫	〃 城北新町3−1城北住宅4−16	
荒川 千恵子	〃 中富町１中富住宅A９０９号	
幸村 金一	〃 上飯田東町３−１５	
斎藤 安雄	〃 上飯田西町1−1 郵政アパート C−502	914−3016
波多野 薫	〃 下飯田町３−２２	
タカヒロF商事	〃 御成通１−１０	912−3945
児玉 英治	〃 上飯田南町５−１	
平田 勇夫	〃 古道町１７	991−7420
若尾 隆美	〃 楠町味鋺字生棚１２−２	901−7338

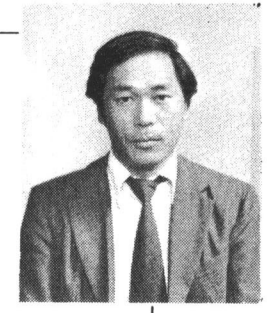
氏名	住所	TEL
高田 秀夫	北区楠町如意２２４３	901−5241
安藤 士郎	〃 〃 〃 ２３	901−8217
日石 清男	〃 〃 味鋺南山６	902−2889
中根 勝夫	〃 〃 〃 岩屋堂７０	901−0063
加古 雅治	西区市場木５３１	501−0200
竹内 里姉	〃 山田町比良八反地４８４	
野々部 直樹	〃 菊井通５−２５	
大沢 和男	千種区猪高町猪子石原字天神下 1221−16	771−6481
熊田 房子	〃 〃 〃 103−24	
加藤 はる代	〃 〃 猪子石下竹越68−2	721−2062
池田 吉徳	〃 〃 〃 ７５	721−1686
長谷川 文子	〃 〃 〃 上竹越３１	721−4948
鵜飼 千恵子	〃 〃 〃 竹越	721−8573
西沢 邦彦	〃 〃 〃 来命15−1	772−1887
高木 清江	〃 〃 〃 宮根１１７	771−0468
小柳 津直大	〃 〃 〃 下坪６４	772−4152
横地 甫	〃 〃 〃 南久留見46−1	771−5411
松井 智子	〃 清住町３−５６	
渡辺 京六	〃 豊年町１−４５	721−9441
山本 克英	港区惟信町2−26海星マンション 501	
佐藤 洋子	〃 佐野町２−４５	
成瀬 誠	東区矢田町2−5 市営山田東荘 6−308	721−6570
成瀬 希代	〃 〃	〃

氏名	住所	TEL
水野富枝	東区矢田町２－１５０	721−8405 722−0567
中村正明	〃 代官町１７－１０	931−2945
藤木千恵子	〃 矢田町２－１５０	
岡田陽三	中村区稲葉地町2−1市営北稲葉地荘2−221	412−8521
柘植鉄治	〃 太閤通２－３１	451−0019 0029
大橋正雄	〃 大門町５	
成瀬貞夫	春日井市上条町９－１２	0568 81−7506
高橋一雄	〃 味美知多町１１３３－１	
天津隆	〃 六軒屋町東丸田43−27	0568 82−3268
日比野哲夫	〃 白山町１４３６	0568 51−3306
柴田甫	〃 下条１－１－４９－１	0568 83−3273
川口立司	〃 柏井町６－１０２－１	0568 31−0138
丹羽義兼	多治見市	
椙山正康	瑞穂区下山町１－４－１	831−2737
野尻利一	守山区更屋敷９８	791−2892
滝英文	瀬戸市陶原町２－１２	0561 82−2924
藤原秀一	千種区南明町	262−3001
伊藤武	守山区塚本４５	762−1666
谷川政勝	北区楠町味鋺官有無番地	901−4617
一柳寿治	守山区高島町２７９	
谷口憲男	〃 小幡野萩２７	791−4150
伊藤正則	北区志賀町２－３３	912−2818
山田茂高	西区新道町１－１２	531−2571

氏名	住所	TEL
山田喜代子	西区新道町１－１２	531−2571
高橋正昭	守山区川北町２７０	793−6901
神野正和	港区小碓町１－３７	
尾崎豊子	北区金城町４－４３	912−0901

代表　丹羽秀義　　世話人　宮崎国一
財政部　村山孝夫　　渡辺治幸
事務局長　宮田照由　　小川博
事務局　阿部信一　　小池英司
堀田幸博　　小池弘
丹羽年弥　　瀬尾さち子
川上郁郎　　古川錦子
宮田明美　　丹羽あや子
近藤正子
野崎秀也
坂登
鈴木久子
阿部一栄
鈴木敏
近藤爽風
竹内久雄

編　集　後　記



「次代の青少年にきれいな水とあたたかい社会」を合い言葉にこの5年間色々な運動をしてまいりました。なかでも食べられない魚釣り大会を開催したおり夢中になって釣りを楽しむ子供達を見、後に寄せられた感想文を読むにつれ、子供達の夢が何であるかを知り、川を汚してしまった私達の責任の重さを今さらの様に痛感しました。

川をきれいにする事は汚した者の義務です。汚れてしまった川には思い切った手術をほどこし、川本来の姿にもどして次代の青少年に引き継ぐ事は私達の使命です。

しかし私にとって住民運動は初めての経験であり、失敗の連続でおしかりを受けながら数多くの先輩や仲間のあたたかい思いやりに見まもられて今日まで運動を続ける事ができました。

ここに会のあゆみと今後の課題を一冊の本にまとめ会の運動の道標としたいと思います。

なにぶんにも不慣れな私が編集しましたので、勉強不足な点、一人よがりな点も多々目につくのではないかと思いますが、これも川への愛着と思って理解していただければ幸いです。又あたたかい社会づくりには多数の方々にも賛成して頂けるものと確信しています。

この編集にあたって原稿をお寄せ頂いた本山名古屋市長をはじめ、各界の諸先生方や多くの仲間の皆さんの御声援に深く感謝いたします。また私たちは今後も力のおよぶかぎりこの運動を続けていきたいと思っております。何かとお世話になる機会もあることと思いますがよろしく御協力をお願いいたします。

事務局長　　宮　田　照　由

矢田・庄内川をきれいにする会
－川の汚れは心の汚れ－
昭和５４年３月

発行　矢田・庄内川をきれいにする会
名古屋市守山区大字瀬古字川西270
電話〔０５２〕７９３－０６７７

印刷　印刷の　共　文　社
名古屋市守山区大字瀬古川西２５５
電話〔０５２〕７９３－８８７２

協力者名簿

きれいにする会への協力者

中京ダイワKK	名古屋市名東区猪高町大字上社字鋳物師洞129	773−2711
オリンピック釣具名古屋営業所	名古屋市熱田区1番町2丁目18−6	
島野工学KK名古屋釣具センター	名古屋市中川区尾頭橋通2丁目37−1	331−8666
上飯田釣具センター	名古屋市北区上飯田通3の1	912−6791
柴山釣具店	名古屋市北区上飯田西町1−26	911−2922
守山釣具センター	名古屋市守山区小幡西島123	791−9521
竹内釣具店	名古屋市守山区大字守山字市場29	791−2676
浅野防水KK	名古屋市中川区西日置1−7	331−8616
宮田組	名古屋市北区米が瀬町57	793−7455
幸村米店	名古屋市北区山田	
加藤くつ店	名古屋市北区安井町2−26	912−3623
鳩岡モータース	名古屋市北区鳩岡町2丁目9−2	981−4553
野崎石油店	名古屋市北区上飯田通	914−2771
文化カバー	名古屋市守山区瀬古川西270	793−0677
朝日生命	名古屋市北区楠町味鋺大塚前	902−0137
名相銀	名古屋市北区楠町味鋺大塚裏	901−2121
長谷川製作所	名古屋市北区米が瀬町167	793−6562 794−8228
西山青年会	名古屋市名東区代万町2−90	701−6726
福寿し	名古屋市北区川中町10番地1号	911−2077
守山水石会	名古屋市守山区大字川字鴻ノ巣223	793−4065
北区酔石会	名古屋市北区敷島町6	911−0912
うな春	名古屋市東区泉2−3−23	931−4883
あずま	名古屋市守山区瀬古川西273	793−9361
名古屋釣具商組合	名古屋市千種区千種通7−22	733−5432
ひまわり幼稚園	名古屋市守山区森孝新田戌	771−8623
けやき吟社	春日井市上条町9丁目236−3	
東海園	名古屋市東区東桜一丁目9−32号	962−4111
岩本石材店	岐阜県恵那郡蛭川村	057345−2604

御協力ありがとう

同音での調和ではなく
和音での調和を……。

学校法人　荻　須　学　園

ひまわり幼稚園

理事長・園長　荻須　　巌
副　園　長　荻須あつ子

名古屋市守山区森孝新田字戍２８７
電　話　　７７１－８６２３(代)

あなたも 北医療生活協同組合へ

住民のための
病院づくりをめざし

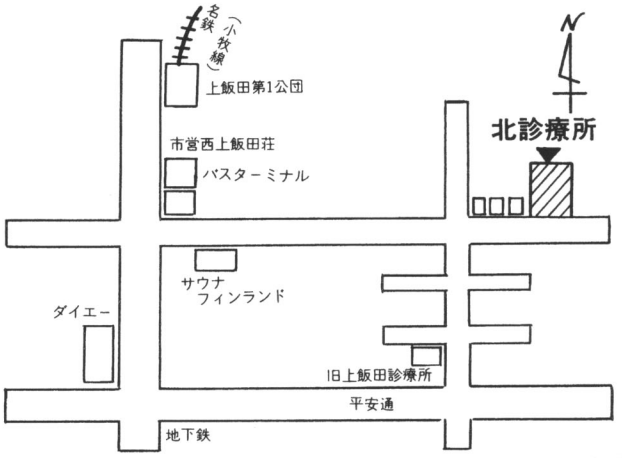
- 北診療所を運営する団体です
- 現在2，700世帯の加入数です。
- 加入の手続きは、出資金を納める事により行われます。
- 出資金は、加入時3,000円以上をメドに、更に一世帯平均出資額を15,000円以上めざしています。
- 脱退時は全額もどります。

組合員は

- 班に所属し、みんなと協同して、自分たちの健康を守る運動に参加します。
- 班をつくり学習会を企画します。
- 北診療所の運営に参加します。
- 機関紙「医療とくらし」が配布されます。
- その他レクリエーションはじめ、診療所の行事に参加できます。

北医療生活協同組合の

住民の健康を守る とりで
あらゆる困り事の
相談にのる



＊診療内容＊

診療科目
内科、小児科、放射線科

診療時間
午前９時　　～11時45分
午後５時30分～７時45分
（水曜のみ３時まで）

休 診 日
毎週、水曜日・土曜日の夜
日曜日、祭日

北診療所

北区上飯田南町２－78
☎ 911－２３０１～３

放射線検査・超音波探傷検査
磁気探傷検査・浸透探傷検査・総合検査

中日非破壊検査株式会社

代表取締役　高　橋　正　昭

〒462 名古屋市北区安井4丁目5番9号　TEL〈052〉915－0426・3467番

営業品目　庭園・公園・各種運動場・遊園地
観光地の設計・施工・管理の請負

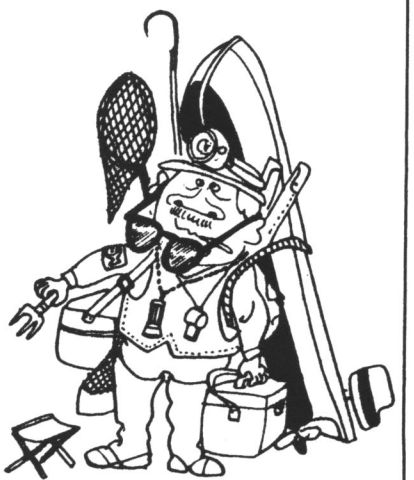
東海園株式会社

代表取締役　日　比　野　　真

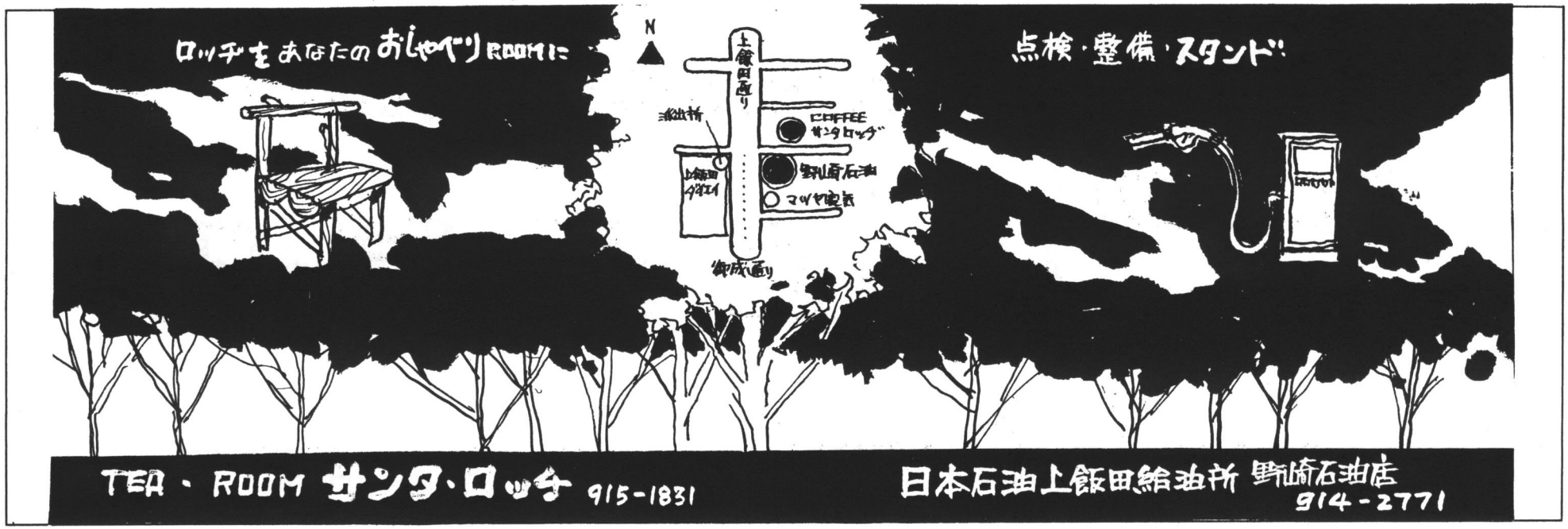
名古屋市東区東桜一丁目9番32号 電話〈052〉962－4111(代) 支店 東京・千葉・大阪

名古屋釣具商組合

理事長　間淵信雄



事務所　名古屋市千種区千種通七―二二
電話〈〇五二〉七三三―五四三二



ふとんカバー　製造・販売

文化カバー本舗

代表　丹羽秀義

名古屋市守山区瀬古川西270　TEL793-0677・4655

クロス張り・ジュウタン(安くて信用第一)

襖の製造と張替

川上表具店

名古屋市守山区守山字西廻間39－3　TEL794－9512

!!心のサービスが
魅力の喫茶軽食

あづま

名古屋市守山区瀬古川西273
TEL〈052〉793－9361

土木建築工事一式
埋立・造成・営繕工事・増改築・各種塀門扉

宮田組

代表者　宮田尚彦

名古屋市北区米が瀬町57番地　☎793－7455

社員募集中

不動産業務全般　**双葉不動産**

TEL 793-4322　代表者 井沢　進

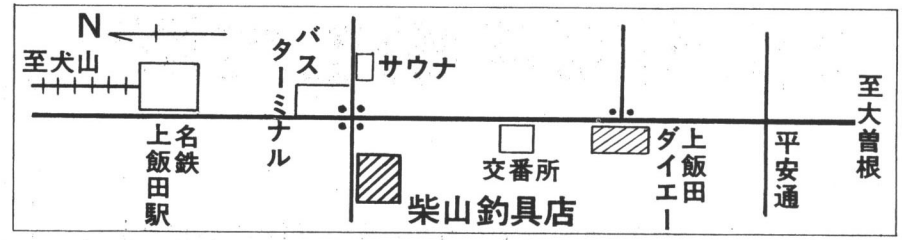
私も時々子供達と庄内川へ魚釣や遊びに出かける事があります。その時良く感じる事に川の水がすんで来た事と、魚や水鳥が多く見られる様に成って来た事です。これは矢田庄内川をきれいにする会が先頭に立って運動を重ねて来た大きな成果だと考えると共にこの会の運動に大いに賛同する者であります。

守山民主商工会会長　井沢　進

釣具のお求めは北区上飯田の

柴山釣具店

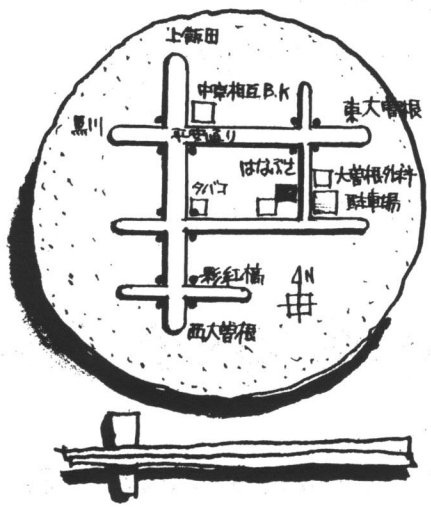
よい品を安く売る店



上飯田ダイエーの前の信号を北へ行き　次の信号を左へ廻った所です

名古屋市北区上飯田西町１－26

☎（052）911－2922



とんかつ はなぶさ

北区古城町29番

916-1968

海・川エサ各種

守山つり具センター

名古屋市守山区小幡西島１２３

TEL791－9521 〒463

庄内川遊漁券取扱店

冷凍冷蔵冷房工事
各種冷凍ケース製作

有限会社 山岡冷凍機工業所

名古屋市守山区大字守山字間黒
電話 793 － 0513・0947

喫茶　軽食

津和野

千代田街道
TEL〈052〉794－4585
守山区小幡菱池5ノ3
河上岩男

長沼建築設計事務所
長沼利三

〒463 名古屋市守山区大字小幡字茶臼前4
TEL〈052〉792－1456

営業品目

レヂヤー用雨衣	綿帆布シート	各種作業手袋
作業用雨合羽	ビニロンシート	各種作業前掛
通学・通園用雨衣	P，Eシート	ゴム作業長靴
一般作業服	土のう袋	安全靴
防寒作業衣	養生シート・マット	地下足袋
腕カバー	キャンプテント	各種防水用具一式

アサノ防水株式会社

中川区西日置町1－7 ☎331－8616(代)

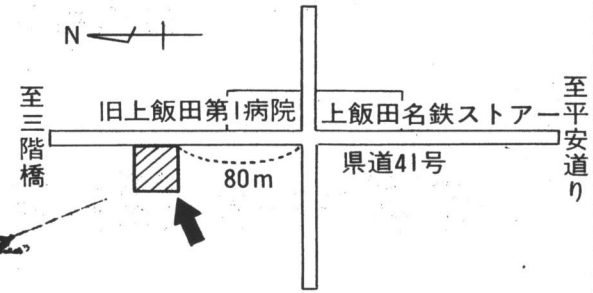
各種新車・中古車販売
定期点検・車検修理
鈑　金　塗　装

鳩岡モータース

井　山　英　雄

名古屋市北区鳩岡２丁目９番２号
（城北小学校裏門前）
ＴＥＬ〈052〉981－4553・914－8330

●ルアーフライ用品　●釣具一式



上飯田釣具センター

名古屋市北区上飯田通3の1　☎〈052〉912－6791

装飾用テント一式
パ　イ　プ　加　工

長谷川製作所

代表　長谷川　弘

名古屋市北区米ヶ瀬町１６７
ＴＥＬ〈052〉793－6562・794－8228

営繕工事 棚板１枚から
(県)13201 建築工事 増改築一式

阿　南　建　築

代表者　阿　南　享　生

名古屋市北区川中町10番２号
電話　〈052〉914－０７６５
喫茶　914－４６７０

政府登録 一般小売 業務用卸 米穀販売

有限会社 幸村米穀

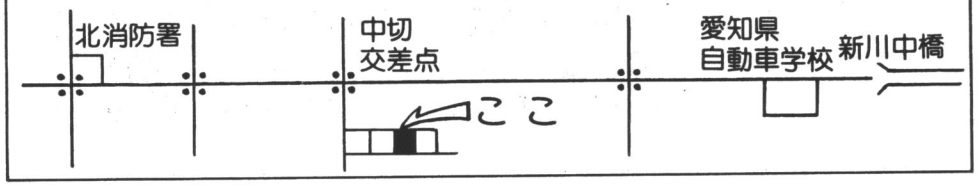
名古屋市北区上飯田北町3－120－1
本店 ☎ 981－2172・2176

出前迅速

寿福

江戸前
日本一

名古屋市北区川中町10番地1号 TEL 911－2077



バッチ・記念品・トロフィー
優勝楯・カップ・メダル

金文堂(株)

中区栄三丁目32－29（若宮大通矢場町バス停東北角）
☎〈052〉251－0855(代) 241－1129

高級美術印刷・活版印刷
オフセット印刷・軽印刷

印刷の 共文社

代表者 平田宗宏

名古屋市守山区瀬古字川西255
電話〈052〉793－8872番(代)

「水くらいは…」と、ムダな使い方をしていませんか。あなたの暮らしに一日も欠かせない水は、いつでも好きなだけ使えるほど豊富ではありません。水源地域をはじめ、大ぜいの人たちの協力を得て、多額な資金と、長い歳月をかけてつくられている貴重な資源なのです。しかも、水の使用量が年々増える一方で、ダムの建設はしだいに難しくなってきています。わずかの渇水でも水不足が起きて、あなたの暮らしにもひびきそうなのです。もう一度、水を見直してください。《限りある資源：水》を大切に使う心がけを…8月1日は「水の日」です。

皿一枚、洗えない日。

明日かもしれない。

政府広報：国土庁